甲乙付けがたい下僕ハッ？

宇ノ鹿　すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
甲乙付けがたい下僕ハッ？

【Ｎコード】
Ｎ７５６２Ｘ

【作者名】
宇ノ鹿　すい

【あらすじ】
一人称で、『僕』の話ですねー。お暇だったら、どうぞ。

1

僕は今日の陽が差し込まれてくる時間帯に音について新たな認識を持った。いままでは僕は音というものに対して感じていたことが、ひとことで言ってしまうと纏まりだった。集合体であって、その集合だけで完結されているものだと思ってて、音ひとつひとつ自体が景色にもなっているんだということは知らなかった。思いもよらなかったんだ。

でも今日ね、声の無い、失敗がない録音された音の集合体を聞いている途中にさ、ほら楽器ひとつひとつのかき鳴らすそれらの音が、景色を生み出してきて、雫が葉からこぼれるとかいう何ともありきたりな景色を思い起こしてしまったんだ。でも瞬間瞬間のことさ。所詮、僕なんてその程度のものでね、何時だって安定していなくて、さっきまではこうだと思っていたことを、次には否定してしまっていたりする不安定だ。で、今はこういう四方面を灰色の壁で覆われている、淡い西洋のただ中に放り投げられてしまっているような気がする。

実際にここは何処かは、わからない。目を開けたらこの灰色の壁や、色鮮やかな子供の喜びそうな玩具ばかりが転がっている牢獄のような、窓が高くて格子がかかっていて、それが陽の日差しに縦の模様を作って縞々なかんじさ。僕はそこに馬のぬいぐるみを置いて、シマウマを即興で製作してみた。で、こんな程度のことをしてしまうような自分自身の軽薄さに呆れて、空しくなったりする。ただ床に転がっている子供が喜ぶような玩具は僕は嫌いで、あんまり楽しそうでもないから、適当に蹴っ飛ばしたりしている。

娯楽がたくさん溢れている充足された世界の中で、まるで百年前の子供たちが喜ぶような工夫しかしていないように見える玩具を与えられているのは、本当に屈辱的というのかな、僕がなさけない愚かな人間だということを叩きつけてきたようで、つまり喧嘩を売ら

れているとかいう野蛮な格好悪い言葉を言いたくなるような行為をされているんだ。でも誰がこんなことをしているのかはわからないんだよね。例えば、この牢獄のような灰色と子供の玩具の部屋には、訪問者は日に一人しかいない。何処か砂漠の民族という雰囲気の、仮面をつけた、わざとみずぼらしい格好をしているらしき仮面の人が毎日くるんだ。来て僕が生きるための御飯や、新しい玩具、そういうものを置いて、置くだけで、立ち去っていく。言葉をかけられた覚えはないな。また同時に、僕が言葉をかけた覚えもない。何をされるかわからないからね。仮面のそいつは物々しい斧を持っていて恐ろしいから話掛け辛いのさ。下手に怒らせて斧で惨殺されるなんて、ごめんだ。

　それにしてもお腹が減ってきた。今は陽が落ちそうな時間帯でね、外のおそらく西洋世界では今頃お仕事という義務のようなそれを終えた人々が、朱色の夕焼けを背にそれぞれの自由を謳歌するための歩行を始めていることだろう。そんな時間だ、僕だってお腹くらいは減る。どうか仮面の人に、早く来て欲しいものだ。でもいつも、陽が落ちてからそれはやってくるんだよね。この時間帯には僕は、することも、されることもない、完全に社会的に一人となれている孤独でもあり、幸福でもある時間なのだろうさ。この灰色に塗れて、自分自身も灰色に染まってしまえばいいのだと自惚れることが出来るほど、ここでは他者からの干渉がない。自分の世界に浸れと脅迫されているかのような、圧倒的な孤独の環境だよ。なんでここにいるのか、僕は理由を知らない。記憶は壊されているらしくて雑音混じりのテレビから流れるザー、ザー、の砂嵐になっているからさ。どういう理由でこうなっているのか、僕はしらない。知ることも、仮面の人が斧をまず降ろしてくれなきゃ、何も知ることはできないんだろうから、そうなるとふと閃いたけど、玩具で何かを探った方がいいのかもね。ここには玩具がたくさん転がっている。色とりどり、形も様々、使用の仕方も様々な玩具たちは、ここでずっと転がっていて、埃を被っているんだ。でも埃を被らせているだけじゃ存

在意義が無くて可哀想だから、少しはいじくってあげた方が良いのかもしれないから、うずくまって手を伸ばしてみるんだ。まずは赤い牛みたいな玩具だね。かくかく首が不安定なその玩具を、両手の十本の指で支えて、僕の目の前に持ち上げてやって、夕陽の差し込まれてくる光をそれに重ねてあげる。赤い牛は光を得て、水を得た魚とはいかないで、ただ首をかくかくさせるだけだけど、生き物になってくれたように見えて、ひとりで退屈なこの部屋にいるから発生する僕の孤独感を紛らわしてくれてはいるかもね。でも、それってつまり一人じゃなくなるってことだ。

　僕は今は一人が良い。だって腹も減っているし、音について閃いて僕の存在意義に意味を持てたような気がして心地よい時期なんだ。一人について、孤独はあるけど心地良い気持ちを味わってもいる時間帯なんだ。だから赤い牛が首をかくかくさせることは、僕にとっては嫌な風景だな。そういえば音の景色だなんて、楽しい話をしていたものだな。もう楽しくなんかないかもしれない。でもゴミ箱に捨てるなんて汚いことは言わないさ。そんな偉そうなこと、よくできるものだよ。でも僕は今一人だからそうやって自信を持って言えるんだけど、大勢の前で一緒に生きていく時には、偉そうなことなんて勇気を振り絞るか鈍感になるかしなきゃ、できやしないことだよね。ああ、赤牛はもう置こう。丁度夕焼けも沈みはじめて、玩具たちも色を無くしていく。僕も色を無くしていく。灰色の壁たちも、床も、天井も。いや、目が慣れれば青白い夜の世界に包まれるのだろうけれども、今はまだ、目が慣れるまでは色を無くすということだからね。僕は何を言っているんだろう。非生産的な思考を繰り返しても、得にはならないし誰かを楽しませたりできない。仮面の人が悪いんだな。或いは、この牢獄に僕を閉じ込めた存在が悪いんだ。仮にそいつのことをクズと名づけよう。いや、違うな、ＮＯと名づけよう。これも違う。牢と名づけよう。甲と名づけよう。ああ、甲ということにしよう。甲が悪いのだとして、じゃあ僕は乙だろうか。

　でも今は甲に文句を考えることは止めよう。飯が仮面の人によっ

て運ばれてきた時にそれは考えることにしよう。そもそも僕には甲の見当なんてまったく付かないんだ。少なくとも個人ではない。甲には僕自身のことも含まれているような気がするし、世界全体が内包されているような気もする。つまり手強い奴なんだ甲は。つかみづらい靄みたいなもので、ああいやだなということなんだよ。考えるのは面倒だ。様々な知識を得て、編集し、纏めて、文章化する、という行為を何年も掛けてようやく手触りくらいはわかるようになるのが、きっと甲に違いない。輪郭をわかること自体が難易度の高い存在がそれだとしたら、まったくもって一番厄介なのは、そういうわかりづらい存在の甲を認識してしまおうとする乙たる僕自身で。僕は馬鹿で阿呆たる乙であると感じてしまうのは、甲という認識する必要がない存在を認識してしまうのは、あまりに愚かだからだ。実際的に甲に深い痛みを負わされた訳ではないのに、実際的に与えられた苦痛というのは、総量としてはおそらく、世間一般程度のレベルだったに違いないのに、僕はそれを深く深く僕自身の中に根ざしてしまった。だから甲乙の関係性はいつになっても消えないままに、灰色の牢獄の中にいても空気越しに繋がってしまっている。あの鉄格子の向こう側に果てしなく広がっている甲、そしてここにいる甲の一部でもある乙。音を景色だとかいったさっき。赤い牛で暇つぶしをしたさっき。

ため息をついた。とても深く、ため息をついた。

そして黄色いキリンの大きなぬいぐるみを尻に敷いて床に座ることにした。とても静かだ。ほぼ無音と言っても良い。

2

瞳を閉じると瞼が下りて来たということだから、真っ黒になって光の残影のようなものだけが仄かに見える。あと、集中すれば金の粒子たちが泳いでいるのが見える。これは僕以外のみんなだってそうだろう?目を瞑れば見える、星の流れのような、金色の粒子たちが真っ黒の中を踊るようにして走り回っている。集中しないとぼやけてしまうけど、見ようと思えば見ることが出来る、金色の粒子さ。どういう理由でこれが見えるのか、僕は知らない。これも甲の一部分ということだ。

　にしても寒い。毛布の一つや二つがあってくれても良い。玩具ばかり一辺倒に置かれているこの灰色の牢獄で、僕は上は長袖のシャツ一枚だし、下は薄手のジャージだし靴下だって無いよりはましだが大して温かくもないさ。毛布が欲しくなる寒さだ。陽も落ちたんだ。これからは寒くなっていくばかりだ。

　――ガタン…

　聞き覚えのない音が聞こえたせいで僕は瞼を開く。寒さのせいで鳥肌をたてながらもキリンのぬいぐるみから立ち上がり、静まり返ってしまった牢獄で、じっと耳を澄ましてみる。自動車が走る音も人の喋る声も小鳥のさえずる声も聞こえない、隔離された無音の空間で、聞き覚えのない音を聞くのは珍しい事だ。

　再び――ガタン…は鳴って、ああ、やはり何か…何かがいる気配がする…と実感して僕は、音の方へと歩を進めてみる。壁の向こう側から聞こえてきている音。丁度鉄格子の窓がある側の壁だ。ガタン、という音は頻繁に鳴り響くようになって、壊している、そう、壁を破壊しようとしてくれている何者かがガタンガタン言わせているのではないか、と僕は察した。

　途端に気持ちが高揚した。光線が放射状に僕の頭から光を放ち、牢獄の暗闇を照らし上げる光源となってパーッと開けた世界。煮詰

まっていたらしい脳味噌が新たな活路を開いてくれたおかげだ。存在する意義を音がなんちゃらとか言ってごまかしたりして時をやり過ごしていた孤独を好むはずの僕も、壁が壊れてくれる可能性を知った瞬間にパーッとなってしまった。矛盾とはこのことか。でも誰にも言ってないんだから良いんだ。僕の脳味噌の中で僕が矛盾したことを想像しようが、誰に迷惑がかかる？僕の思考が透けて世界に伝播されない限りは、何の問題もないんだよあははは。つうわけで期待。壁よ開けー、開けー。

しかし、と冷静にならなければならない。陽が落ちて真っ暗の牢獄内と僕のお腹の減り具合から察するにもうじき奴が来るはずだ。仮面をつけた物言わぬ監獄者にガタンという音を聞かせては……。

僕はそう気が付いて慌てて灰色の部屋に唯一ひとつだけある鉄扉、その方角に身体をむけたら、すぐ目の前に、監獄者、いた。

仮面をつけて斧と食事を持った僕と背丈は同じくらいの監獄者。

「……」彼の無言の威圧が恐ろしい。そして、――ガタン…が鳴った。鳴ってしまった。大きな音だ、監獄者がよっぽど耳の聞こえない人でなければ、聞き取ったことであろう。そして実際に聞き取って、異変を感じ取ったらしい。平常が壊れる可能性が近づいていることを理解し、そうされないよう抵抗しようと感じたらしい。監獄者は始めて声を発した。小さな、ちいさな、とても聞き取り辛い、声というか呻きだったわけだが、僕の耳にかすかに聞こえて、僕はそれをこういう言葉だと認識した。――秩序を乱すものは抹殺して血みどろ――。聞き違いでないならば背中に背負っている斧で、ガタン、という音を鳴らして壁を壊してくれていると窺えるその僕にとっての救済を、斧を背負った監獄者は血みどろにするといった。血の塊にするという意味だ。

監獄者は僕への飯、盆に乗っている夕食を一人用テーブルの上に置いてから、颯爽と立ち去ろうとする。心なしかいつもより足の進む速度が早く見える。ガタンはまだ鳴っている。とめなければ、救済は消える。光明は血に、僕は青白い牢獄で闇を纏う。いやだ、い

やだ、いやだから夕食は一瞥するだけ。僕にはやらなくちゃいけないことが出来た。駆け足。床に転がっている玩具を拾って、それを武器にして僕は監獄者に駆けて行く。駆け足で近づく僕に気が付いた監獄者は、仮面をこちらに向けた。仮面だから表情はわからない。驚いているか。それとも他の表情か。知らないが、僕の救済を血みどろにするというなら、容赦なく武器を振ってやるのは当然だろ？この玩具はルーピックキューブに似た固めなパズル。痛いよ、本気で振り下ろすからね！

仮面の丁度、眼、に当たる部分あたりに玩具を直撃させた。全力の力を込めたおかげだろう、仮面が割れて、破片が飛び散り、そして監獄者の眼の部分だけが露出された。眼からは血が流れていた。溢れんばかりにどく、どく、と今僕が殴ったせいで出血するその眼は、見覚えのない人のものだった。僕は眼に気を取られて、監獄者が斧に手を回したことに気が付くのが遅れてしまっていた。僕は逃げなければいけなかったけど、それをしなかったから、斬、振われる斧を避けることが出来ず、左手をすっぱりと手首から斬り落とされて、痛み、痛み痛み痛み痛覚痛覚痛覚が溢れて痛痛痛痛痛痛痛痛痛ッウ痛み痛み痛み激しく神経を痺れさせる痛みと出血、どくどくと手から血が流れちゃって地面にぼたぼた、僕はうずくまる他なかったけど、幸いなことに仮面の人は僕にそれ以上のことはしないままに——早くしなくては——と聞き取れる言葉を残して牢獄から出て行った。僕はそれしかできない。視界も霞んでる。血が出てて痛い助けてくれよ、と思うけどもう出て行ってしまった。救済が。九歳が。救済が滅びる。消えて行く。光は失われてぶわーっと闇が広がっていくんだ。薄ら寒い空間が広がっていくんだ。熱を奪っていく暗闇が……。

——ガタン……

——ガ　　タン……

——ガ　タン　　……

僕はキリンのぬいぐるみの上に腰を下ろしていて、瞼を開くとすぐに左手が大丈夫かどうかと視線を動かした。大丈夫だった。左手はそこについている。安堵した。あれは夢だったんだ、と僕は今そのことを実感した。何時の間に寝てしまっていたんだろう。どうやら丁度、陽が落ちた辺りらしいけれど…夕飯はまだ運ばれてきていないみたいだ。テーブルには埃を被っている本が数冊置かれているだけで、お盆も、食事も、血もない。

僕はひどくどきどきしている。心臓はフルに稼動していて、血管が収縮してるような圧迫感があって、どこか息苦しい。さっき――ガタン…という音が鳴り始めたのは、ちょうど陽が落ちて少し経ち、夜の青白さが灰色の牢獄を染めるようになった頃。ちょうど今辺りだ……。

――ガタン……

聞こえた。心臓のどきどきという喧しさはさらに強まりを見せ、いても経ってもいられない気持ちにさせられ、僕は駆け出していた。背後に振り向く暇も無い。さっきのが夢で今が現実だとして、さっきの夢が正夢だとしたら、僕には一切立ち止まって様子を窺っている暇などない。何としてでも壁の向こう側にいる僕の救済に、逃げろ、と伝えなければならない。――ガタン。ともっともその音が大きく聞こえる壁の位置を特定してから、僕は声をあげた。まだ仮面の人は鉄扉を開けていない。叫ぶなら今の内だ。「逃げろ！　僕のことは後で助けてくれ！　今はタイミングが悪いから、そこを立ち去ってくれ！」心臓がやばい、破裂しそうだ。でも伝わってくれたのだろうか、ガタン、という音が一旦止んだ。僕は安心する。一旦離れてもらって、夕飯を食べ終わった頃にでもまた来てくれれば、その時は本当に僕は救済してもらえるかもしれない。

――ガタゴトン！

しかし予想以上に凄まじい音が鳴ったことで、驚かされる。何が起こったのかと壁を注視すると、さらに驚かされてしまって、足元

の方の壁が崩れている。崩壊している。今のするどい音はその崩壊を導いたことによって発せられた音だったのだ。粉塵が上がってきて、くしゃみが出そうになる。僕はどうしようかと迷ってしまって背後を振り向いてみる。鉄扉の方を振り向いている。

仮面の人が、鉄扉のある位置で、お盆を両手に持ち、斧を背後に抱え、突っ立っていた。明らかにこちらを見ている。表情は窺えないが、彼の視線からは丸見えだろう。壁が、ほんの一部分とはいえ崩れていることが。人一人が無茶をすれば通れる崩壊が生じているから、牢獄に閉じ込められている僕が逃げてしまうということがわかるはずだ。

監獄者がいきり立った様子で、盆を捨て斧を両手に構えて、全力でこちらに向ってきた。走ってきた。彼のその速度は凄まじくて、広い牢獄のその端っこであるこの位置といえども、急がなければすぐに彼はやってくるとわかる。斧で砕かれる。僕は殺される恐怖に襲われて、ふわふわするような感覚に囚われた。パニック気味になってしまった、と僕は自身で察したが、ならばなおのこと早く逃げなければならない殺される。今度は夢じゃない、左手じゃすまない、ここは現実だ！

壁にまずは右足、そして次に左足、と足を差し入れていく。狭い。まったく入らないという訳ではないが、易々と通り抜けられる大きさでもないようだ。早くしなければ殺される。慌てながらも背後を向こう側を窺うと、テーブルが蹴っ飛ばされて本から埃が舞っているであろう光景が見えた。やばいやばいやばいやばいやばいと思いつつ懸命に身体をよじり、何とか通り抜けようとやっていると、下半身はようやく向こう側に行ってくれた。下半身側は外の冷気を感じている。外の感覚。甲が広がるその先に。

だが頭が斬り落とされてしまえば、それで御終いだ。後は上半身、渾身の力を込めて、一世一代とかいう心意気で、斧で惨殺なんていやに決まってる、痛いに決まっている。しかし肩辺りでどうにも突っかかってしまってやばい、骨が少し出っ張っているのが悪いのか

もしれない、この肩ァ！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬどうにかして引っ張れ、ていうかそうだ向こうにいる救済の奴助けてちょんまげ、引っ張ってくれちょんまげって何だよ、早く引っ張って引っ張って引っ張って、ああ、もう目の前にまで仮面の人が来てしまった！——逃がしてしまうなら、血みどろに——短絡的な思考回路をしている人だ、と僕は思った。逃がしてしまうなら血みどろ、って極端にも程がある。冷静になれよ。頭を冷やせよ。仮面を外せよ。

斧が僕の目の前で、刃を月明かりに反射させながら、振り上げられる。銀色に輝いている刃の部分が、僕の頭目掛けて、振り下ろされる……。

しかし本当に刃が、僕の視界から1という数字のように縦になって落ちてきた瞬間、僕の頭を貫くであろうその時に、僕の両足はすごい勢いで引っ張られて、一気に上半身が向こう側に抜け出た。

……ガキンッ！

刃が床に振り下ろされてしまった音が背後から聞こえる。あれがザシュ、という音だったら僕の頭は大出血サービスだったろうが、僕は今牢獄の中にはいない。外にいるのだ。

見上げれば明るい満月。夜空にはラメのようにキラキラしている星々と、暗い色をしてはいるが広大な雲たち。穏やかではあるが、たしかに吹いている夜風。かすかに感じる生き物の気配。そして目の前には、犬の耳を生やしている幼い少年。どこか野生児染みた、服を着た犬みたいな、しかしどうみても幼い少年である者が、目の前で。

「危ないトコロだったね」

ちょっと馬鹿っぽい口調で、にんまりと笑った。その笑い方もなんか馬鹿っぽい。

「立てますかぁ」

などと言うので僕はうなずいて、そして「助けてくれてありがとう」と言うと、デヘヘ、と汚らしく笑ってから、頼まれたんですよー、と犬耳の少年は言った。誰に？と尋ねようと思ったが、背後の

壁が斧で壊されようとしている音、ガァン、ガァン、と聞こえてきたので、僕は慌てて飛び上がりそうになる。

「た、助けてもらってありがたいけど、いろいろ事情もわからないけど、遠くに逃げないと斧を持った監獄者が来てしまう」

と僕が言うと少年は「なるほど」と言って、

「なら僕の背中に乗るとよろしいでしょお。巨大な犬に変身することもできますよ」

とへらへらと馬鹿な感じで舌を出したと思ったら、もう少年は巨大かつ毛むくじゃらな大型犬に姿形を変えていた。茶色。何て奴だ、と驚きながらも僕は彼の背に乗って、遠くに逃げてくれ、と頼み込んだ。「りょうかいー」と軽い調子で大型犬は喋る。

僕は大型犬が走り出して遠くに逃げるその寸前に、周囲の様子を窺った。この建物の様子は覚えておいた方が良いかもしれないと思ったのだ。

すると不思議な光景が目に付く。緑の、蛍光色という奴だろう。月明かりを吸収してとても光り輝いているそれが、いたるところに散乱していた。門らしきレンガとか、こげ茶の土とか、背後の僕が今までいた牢獄の壁とかに。緑色の蛍光色のそのこびりつき方は、夢でみた僕の左手が作った血貯まりに少し似ていたから、何か怪物の血とかかな、と思って苦笑したくなる。スプレーか何か、落書きみたいな感じが血に見えるだけだろう、蛍光色の血なんて、まさに怪物が流すような血があるはずがない、と僕は思った。そしてそんなことを思っている時に、背後の方から、仮面の人のそれと思わしき絶叫が聞こえてきたのだけれど、僕はその絶叫が繰返し繰返し、

「犯罪者め、嘘つきめ！」と言っているとわかった。何だか不愉快だった。僕が犯罪者？嘘つき？それともこの僕を救済してくれた少年のことを言っているのか？監獄者の癖に人を殺そうとしたあいつの方が、よっぽど犯罪者だ。きっとあの仮面の人は僕を逃がしてしまったから気が狂ってしまって、適当なことを言っているのだろう。

「犯罪者め、嘘つきめ！」

僕は犬になった少年の背に乗って、夜の風をぶわーっと全身に浴びながら、満月の下を駆けた。

爽やかな風だ。牢獄の中では味わうことの決してできないことだ。

僕は自由になったんだ。孤独をやめることになったんだ。

胸がざわつくが、きっとこれは興奮しているに違いない。

甲が僕を待っている。乙たる僕を、待っている。

3

両眼は僕が生まれた時から、僕の顔の上の方に二つ、ずっと変わらずについてきて僕に景色を見せてくれてきた。そういう役割を持っている存在が、僕の眼球二つだ。それが今映してくれている景色、風景というものに僕は違和を感じざるを得ない。

犬少年に跨って眺める、人が住んでいる都市らしき空間は、今まで僕が知っている都市とはまるで違う風景を僕の眼球に映し出してくるのだ。

それに犬少年である彼に跨っている僕は、特に目立つ存在じゃないということも不自然だ。そこら中で犬に跨って都市を駆け抜けている人々が見受けられる。僕の知っている都市という奴では、みんなは自動車や自転車に跨って、道路を走っていたのに今はどうだ、道路というよりかは、砂利道というのだろうか、そんな感じで自動車が走りづらいであろう造りになっているではないか。

建ち並ぶ建造物だって、何と言うのだろう、こういうのを独創的というのだろうか、アイディアーとか、オリジナルティーというのに溢れてる感じで、鉄くずだけで構成されている巨大な鉄塔とか、まるでサザエの貝殻のような外見をしているドームのような建物とか、時計が壁に何百種類と貼り付けられているビルだとか、赤白の縞々模様が奇抜な一軒家だとか、どうみても見た目はダンボールにしか見えないものだけで造られている建物とか、他にも様々あるが全てが一筋縄ではいかない外見をしている。

街中の街灯も何だか小洒落ていて、オレンジ色の暖かみある色彩が犬少年や僕、街中を駆け抜けている人や、歩いている人、それら全てを照射してくれている。治安は良さそうで街行く人々はどこか知性的に見えたり穏やかそうに見えたりするし、衛生面もよろしいのだろうゴミなども見受けられない。

ここは一体どういう都市なのだろうか。変わっている建物のセンスはこだわり過ぎてて好ましくもないが、嫌ではないし、行き交う人々の様子がどこか良さそうに見えて友達になれそうだ。つまり住みやすそうな場所なのだ。不良っぽいのもいなければ、変質者らしき人も、常に怒っているような人もいない。なんて都市だ。人間社会の中に、こんな場所があるだなんて信じられない。

僕は知っている。人間社会はとても不完全で、失敗だらけで、不条理なものだ。それは何時どんな時代でも変わらないことのはずだった。歴史という一側面の過去記録を覗くだけでも、そこにはたくさんの不条理があって、幼い頃の学校だとか近所とかにも、不条理はあふれ返っていた。なぜなら人間は機械じゃない、生物だからで、失敗をしてしまう動物だからだ。機械を作ることはできても、自分自身を機械にすることはできないのが人間だったはずだ。

でもこの都市は何と言うか、そういう『失敗』が本当に少なそうな、異様な雰囲気を放つ空間だ。　何なのだろうこれは。僕は未来にでも来たのか。様々な失敗が防がれるようになった素晴らしい社会にタイムワープでもしたのか。わからない。僕の記憶はザー、ザー、と壊れてしまっていて、思い出す、という行為が上手く出来ない。ノイズが走って駄目だ。眼をつぶれば、金色の粒子が踊ってくれるだけで、過去は映し出されない。

考えている内に、犬少年は立ち止まった。その急停止に驚きつつ両眼を開くと、宙にオブジェみたいなこれも独特のセンスをしていて、細かな彫刻が表面にされていて、赤、黄、青、の点灯ではなくて一つの円に七色くらいの点灯があって、それが事細かにチカ、チカ、と点滅していた。丁度交差点のような所で、四つくらいそのオブジェが取り付けられている。

「綺麗なもんだね」と言うと、

「はぁ。まあ、言われてみればそうかもしれませんね」

などと、何を言っているんだろうこの人は、みたいなリアクションをされたので恥ずかしい。で、ようく考えてみると、あれは信号

機なのかもしれないな、と察するのだった。察している内にそのオブジェだか信号機は点滅して、「しっかり捕まっていてくださいね」と僕に告げてから、犬少年は再び急加速をかけて砂利道を駆け抜ける。たしかに、しっかりと捕まっていないと振り落とされてしまうような加速で、これは慣れが必要だな、とわずかに嘔吐感を催しながら考えた。

やがて都市から人気がなくなってきた。どうやら都市の中心からは外れた位置に向っているらしく、湖が左側にある砂利道を走るようになった。湖の周辺を弧を描く感じで回っていて、大きい湖だからかれこれ三十分くらいは、湖が左側にあった。何湖？と尋ねてみると、犬少年はくすくすとおかしそうに笑ってから、ネリィです、と答えた。ネリィ湖。聞き覚えの無い湖だ。ネリィ湖のその周囲全てには深海色の街灯が設置されていて、都市と比べると何処か寂しくも見える。まあ、郊外だから落ち着くような雰囲気にしたいのだろう。先ほどから男女、カップルらしき手を繋いでいる人々が通りすぎる。そういう場所、らしい。

「ネリィ湖公園とも呼ばれるトコロですよ。えっとぉ、ここを抜けてもまだ目的地には着きませんから、少し休憩していきましょうかー。あ、でも今の時間帯だと、いろいろとお邪魔かもしれないですねー。えへへー」

僕の位置からでは犬少年の顔は見えないが、犬の顔をしていながらも、きっと馬鹿みたいに歪んでる表情をしていることだろう。命の恩人（？）に馬鹿というのは失礼だけれど。

「後、どれくらいかかるのかな」

とその答えによって休憩するかどうか決めようと思って尋ねると、

「軽く二時間くらいっすかねー」

という眩暈がするような返事が返ってきた。

「きゅ、休憩していこう」と慌てて言うと、

「じゃあカップルのふりでもしますかー。なんつってぇ、どへー」

とか言うので、もう何だかこの犬少年、わけがわからない。

とりあえず気まずいながらも公園っぽい空間で一休みすることにした。ベンチはたくさんあったけど、カップルが全部使用しているし、木陰とかも危うくて入り込みづらいし、ブランコにも男女がいて、トイレにも男女が殺到している。もうわけがわからない。

「この、色ぼけどもがッ！」

僕は一人ごちて唯一空いていたベンチで眼を閉じて金の粒子を眺めようとした。

それをする前に少年に戻った犬耳くんが飲み物を二つ抱えてやってきて、いやー男一人で並ぶのはさすがに恥ずかしかったんですけどおいしいんで買っちゃいましたよー、などと言った。十分くらい姿を消していたのは並んで飲み物を買っていたからしい。人気のジュースという話のそれを二つ、片方を僕に渡してくれた。

「ストローが一つのジュースにつき二本なんですよ、これ、カップル専用なんですよねー、使っちゃいますかねー。あ、さすがにそれはないっすね。はい、調子に乗りました、ごめんくさい」

異様すぎるほどに馬鹿げた話し方をする犬少年であった。

僕を牢獄から救ってくれて三十分以上背中に乗せてくれて、これからは二時間も乗せてくれるらしく、しかもジュースまで買ってくれた最高な人だ。何だか知らないが、こんな少年に助けられてとてもラッキーだと思う。幸運だと思う。

でも馬鹿なのも間違いないかな、と思いながらジュースについている二本のストローをどっちも無理矢理口に含んでジュースを飲んでみた。そんなことをする僕も馬鹿かもな、と思いつつ隣の少年をチラッと何気なく見てみると、もうジュースを飲み終わって満足そうな顔をして馬鹿面だった。

何この人、と正直思った。

しかもゲップしたし。

「さあ、行きましょうか」

まだ僕は全然飲み終わってない。

「遅いですねー。あ、僕が飲んで差し上げましょうか。あ、お呼び

でないですよねー。ぐほー」
　一々最後に変な声を発するのは何なのだろうか。
「あー、遅いですよー。暇つぶしにマーキングでもしてこようかなー」
　それってすなわち立ちションだろ。カップルが多いこんな場所でマーキングするなよ。
「あ、ウンコもしたくなってきた」
　いろいろと問題だ。
「ああ、腹減ったなあ」
　落ち着きが足りない。喋らないと気が済まないのだろうか。
「何か持ってません。上手いもの。あー、匂いがしないなあそういう」
　牢獄にいたんだから当たり前じゃないですか。
「すんませんした、調子乗ってましたちょっと黙ります。だからそんな怖い顔しないでよ」
　けっこうびびり。
「ぐひー」
　また変な声をあげやがった。
　うーん、この謎めいた都市に住んでいる人々はみんなこんな性格をしているのだろうか。だとしたらこの都市に住むのだとしたら、僕も最後に、ぐひー、とか、ぐほー、とか言わなければいけなくなるのだろうか。だとしたらある意味住み辛い。犬少年という存在がいる時点でだいぶおかしいけれど。まるでファンタジーの世界だ。そういえばこの少年は何と言う名前なのだろう。
「そういえば、なんてお名前でしたっけ」
「僕は、サントリーという名前です。略してサトと呼んでくだされば結構です。ぼひー」
「そうですか」
「あなたは何と言うお名前か、僕は知っていますがね」
　何故だか知らんが犬少年はベンチから立ち上がると偉そうなポー

ズを取ってくる。僕の名前を知っていることが何だというのか。つうか僕の名前……僕自身、が思い出せない、んですけど。

「……あれ」

人には名前があるのが普通ではないか。

思い出すことができない。

眼を瞑ってみても記憶は何も思い出されないが、まさか名前まで覚えていないのか。

「本当に記憶喪失みたいですね。でっへへへ。ずびー」

野蛮な人のように汚らしい笑い方をするが笑う所じゃない。失礼な犬少年だ。サトくんは馬鹿で失礼な犬少年ということだね。嫌な奴だな、と思う。まあ憎めない感じという奴だけれども。

とりあえず自分の名前を思い出せないというのは不気味だ。

だから僕はサトくんが僕の名前を教えてくれるならそれに越したことは無いと感じる。だからいろいろと助けてくれたサトくんにまた助けてもらうのは、何処か気恥ずかしいという感覚があるのだけれど、尋ねなければわからないままだ。

「そうみたいだ。あの、教えてもらっても良いかな。できれば……」

するとサトくんは偉そうなポーズをさらに偉そうに見せる、両腕を組んでフンと鼻息をもらすみたいな仕草するのだった。サトくんはみっともない奴らしい。人の名前を教えるくらいでこんなに偉そうな態度をするのは失礼だ。

「あなたの名前は、ポリフェノールＤＸガンバレルマーチ・スパンキンデリートマッハ・シューマッハ・イトウ・ホンジャルック・アバハーマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムＤＸ・パンツ・ポリフェノールＤＸです」

ん、と僕は呆然とした。

そしてこんだけ長い名前をソラで言えるサトくんは、とても暗記力のある素晴らしい犬少年だな、と思って偉そうなポーズをするのも仕方がないな、と納得した。

でもその名前は長すぎだよね、とツッコミを入れたいのだった。

覚えらんねえよ……。

4

犬少年くんが行方不明。公園から出発する寸前、『ハーデス公園』と表札みたいなのが貼られている門の所まで出て来たというのに彼はちょっとマーキング忘れてました、とか言ってぴゅんと風のように立ち去ってしまい、闇影夜に紛れた。そのせいで僕は公園に出入りしていく男女の影と交錯するだけで、にっちもさっちも行かないという奴だろう、前後不明の都市の中では行き場は無くて落ち着けない。

生い茂る木の緑葉は黒い影となって風に揺れ、さわ、さわ、と騒がしくもなく、かといって静かという訳でもない按配でそれのせいでさらに落ち着かない。公園というのは何故、こう木というものがいっぱいあるものなのだろう。僕にとってはこのさわ、さわとうるさい木たちは、不安を煽る嫌らしい奴としか映らない。かといって目線を下にさげたら『ハーデス公園』という表札が光を放っているのが眼にまぶしいし、通り過ぎる男女に不審がられているような視線を送られている気がして、ああやはり落ち着かない。

僕はその場に突っ立って犬少年を待つ、ということに耐え切れなくなりネリィ湖とかいうのがある方角へと歩き出してしまう。どうにも堪えられない。犬少年は鼻が良いのだから、場所を離れてもきっと僕を見つけてくれるだろう。何せ、犬なのだから。

適当に見当をつけて夜道を進み、途中犬人間の走っているのに轢かれそうになったが、犬側の方から避けてくれた。乗っている人の睨みつけてくる視線が痛かったので、それからは左右に気を取りながらも砂利道を横断し、ちょうど草が植えられた坂になっている所があるので、その上り坂を上がってみると、ネリィ湖とその輪郭を取り巻く青の街灯たちの、その一部分に出ることができた。本当に広い湖らしくて、右を見ても左を見ても延々と青の街灯が等間隔に

設置されているのが幻想的でさえある。坂を下りてコンクリに立ち、湖のその深淵を覗き込んでみると本当に暗くて、藍色で、波しぶきだけが少し白いから見える。たまに水が撥ねてきて、肌や服がわずかに濡れるのが嫌だなと思って、一歩下がり、何気なく周囲を見回してみると、左側の方には都市の輝き、朱色のそれがあるのがわかるし、右側はしかし対照的に暗くて、青の街灯がより寂しげだ。

その右側を覗き込むようにして眺めてしまう。何て暗いのだろう。引きずり込まれてしまいそうになる。左側の都市は、あれはあれで楽しげで暖かそうだろうけれど、青の街灯だけが頼りの今にも消えてしまいそうな灯りしかない闇や影が、妙に深くて、もしかすると目の前にある湖の黒い深淵よりも深い黒を持っているように見える。僕は息を呑んで、しばらくその風景を眺めていたのだけれど、ふと鼻に匂いがついた。花、をイメージさせる香りだと気が付いて、それが左側の深い暗闇の側、そっちの方角から漂っている、ような気が、した。でも確かに左側に鼻をひくつかせてみても、匂いは薄くて、ほとんど感知できないが、右に顔を向けて匂いを嗅いでみれば、ああ花の香りに間違いないとわかる。花に関しては詳しくないから、何の花だとかは全くわからないのが寂しいところだ。僕は引きずり込まれるようにして、匂いのする側へと歩を進めてみる。何だか、気になるのだ。で、ニ、三分湖の縁を右の方角に向って歩き続けてみたのだけれど、歩く内に寒くなってきてしまって、そういえば長袖のシャツを一枚着ているだけなのだった、と薄着で湖のところまで降りてきたことを後悔する。ここは少し寒い。

そんなことを思っていた辺りで、地面のコンクリに視線を落としていた僕は花を見つけた。香りを放っていたその大元かはわからなかったが、歩き始める以前よりも匂いは、たしかに強い。膝を落としてみて、僕は鼻で匂いを嗅ぐ。ああたしかにこの花が匂いの根源だ。たった一輪で、こんなコンクリのひびの隙間から生えてきていて、湖のすぐ縁で花は蕾で開いてはいない。だがたしかにここで力強く咲いているように見える。ニ、三分前までずっと左側にいた僕

のところにまで香りが届くのだから、コンクリのひびの隙間を縫って地表に出ることなんて、もしかしたらこの花には容易なことなのかもしれない。でも、こんな他には仲間もいない湖の隣で咲いていても、どうしようもないのもまた事実だろう。何だか無性に、この花を見ていると根っこからむしり取って、草原の所に埋め変えてあげたい気分にもなるが、根っこを引っ張るつもりで中途からちぎってしまっては、殺してしまうことになる。花を開く前に、匂いを放つこともなくなって枯れてしまうだろう。茶色くなって萎れてしまう、だろう。

「それは、そのままにしておくんだ」

声が背後から聞こえたと思ったら羽交い絞めにされた。何…？と予想だにもしない背後からの行為に驚かされながらも声の主は男性だったとはわかる。羽交い絞めにされた部分には凄まじい圧力がかけられて、身動きを取らせてもらえないな、と冷静に考えている間にはすでに坂の辺りに放り投げられてしまったので、僕は腰辺りを強打してしまい痛みに堪える。うごっ、という感じ。

「摘み取ろうとしただろ」

男は暗闇の中でそのシルエットが巨大だということがすごくわかる。筋骨隆々の大男とお見受けするが何処か口調の荒いところから、怒りの感情を発露しているのだと理解できるが、花を摘み取る気持ちなんて、まぁ、場所を移してやろうという気持ちはあったが、悪いようにする気なんてなかった。それが急に羽交い絞めにして坂のちょっと固いところに放り投げるなんて、どうかしてる、ひどいにもほどがある、不躾がすぎる。

「っつ……」

しかし相手が大男だというのは困る。周りに一切手助けをしてくれそうな人の見当たらないことから、自分の憤りを相手にぶつけることがどうにも恐ろしいというか、怒ってもいるみたいだし下手したらぶん殴られて骨折、殺される可能性だってあるのではないかと思える。ああ、びびってしまっているというのだろうが、仕方が無

いじゃないか、ていうか僕は何も悪いことはしていないのだけれど。でも一言くらいは言ってやらないと気が済まない。

「ひどいですね」

僕が言ったのはこれだけだ。挨拶程度の言葉じゃん。それなのに僕が立ち上がる前に大男は迫り来て、ああっ、と怒鳴るような調子のままに一発僕を殴打した。考えらんねえ、と思いながらも殴られてしまって肌がひりひりするのは事実。僕は起き上がろうとしていた体を再び坂に転がされてしまって、みっともない醜態を晒されたということだ。

惨めな気持ちになりつつ、青白い街灯のぼんやりとしていくのがわかる…あんなにはっきりとしていた青が、にじんで分裂している……暗い……というよりか寒い……。

5

羽毛に身体を包まれていると思ったのと、ああ、何だか夢を見ていたけど何だったっけ、ということを思った時に、丁度ぼやけていた視界が開けてきて、意識の覚醒をわかる。殴られた所が腫れてるので表情が張り詰めているのが自分でもわかる。ここはどこだ。

燈灯が一つ天井にぶら下がっていて、ギィ、ギィ、と揺れて錆によって発生している音を鳴らしている。毛布を被せてもらっていて、寒そうだと思われて着せてもらったのだろうか、青色の上着を身につけてる。

ギィ……ギィ……。

しばらく燈灯を見上げていた。静かだ。そして揺れている、と思った。別に錯覚とかふらついてるとかいうことではなく、地面がゆさゆさと揺れているのがわかる。不思議に思いながら、この感覚は水の上か、と察して、そうだ気絶させられたのだ…と大男のシルエットを思い出す。

何がどうなっているのだろう、水の上…湖の上だろうか、と見当がつくが、実際にそうかどうかはわからない。だが、ふと緑の蛍光を視界に捉える。円形の枠をしている窓から入り込んできた輝きだった。それがこの建物中の鉄の色を緑に染め上げて、どこか不気味だ。僕はベッドより降りてから、窓に近づき外を眺める。緑がまぶしい。ああそしてやはり、水の上、だ。

「ネリィ湖…緑色に発光してる……」

いや、そうではないかもしれない。ネリィ湖の水面が光っているのではなくて、その水の奥だとか底にあるものが力強い緑色の発光をしている、という風にも視える。もっとよく見たい。ここは水の上ということは、船、とかだろうか。船内だとしたら甲板に上がれるな。

そう思いながら回りを見渡してみれば白い色づけをされている錆

気味の梯子が目に付く。この船内は古めなのだろうか、何かと錆が見受けられる気がする。

早くしないと緑の発光は終わってしまうかもしれないと思いながら足をかける。そして上る途中で、不思議なほどに柔らかい感触とぶつかった。

「ん」

「あ」

聞こえてきた戸惑いの声は明らかに女性の声だった。

女性の尻と顔からぶつかったらしかった。しばらく奇妙な沈黙が続いた後、向こうから動き出して彼女は甲板に戻っていった。僕は呆然としていたがハッと気を取り戻して、だいぶ気まずいのでベッドに戻っちゃおうかなと思ったが、一度梯子に手をかけていた手前、それもおかしいので上る。

甲板に出ると夜風と緑色の発光を知覚する。

そして二つの人影を見て、あと、ここがやはり船だったのだという確認ができた。

僕は緑色の発光を一瞥だけしてから、さっきの気まずい出来事を謝るなりした方がいいと察して先ほどの彼女の姿、近い位置にいる人影に、声をかけようと思ったがどう言えばいいのかわからなくて戸惑う。それでどうするか戸惑っている内に、無言の時間というのは過ぎていった。

緑の蛍光のせいでお互いの姿がハッキリと映されるというのも不都合だ。真っ暗なら気まずさも紛れたかもしれないが、僕の目から見て彼女の姿は映っているし、彼女から見ても映っているだろう。まあ、もう何言っていいかわからないので、気まずさを含んだ会釈だけをしてみる。すると向こうから声を掛けてきた。もうさっきのことなどすっかり忘れた、という風な雰囲気だ。

「あの……痛かったですよね……」

僕の脳内は疑問に包まれる。痛かった?痛いってのは…ああ、そうか僕が殴られたことをこの人は言ってるんだ。となるとこの女性

はあの大男の親族、ということになるのだろうか。それとも仲間とか仕事仲間、まあ話してみないとわからないことだけど。

「正直、驚きました」

僕はひそひそ声で、ちょい遠目の距離から緑の発光を眺めている大男に聞こえない程度の大きさで言葉を呟いたのは、先ほどの二の轍を踏まないようにするためだった。が、聞こえたのかもしれなかった。大男が、こちらに顔を向けたと思うと、ずん、ずん、という音が聞こえそうな雰囲気垂れ流して近づいてきて、僕の襟を掴みやがった。

「殴られてもまだ生意気だな、お前」

大男はまたも拳を振りかぶりやがった。何だこいつ狂人か。

「やめて。この人、多分何もわかってなかった」

お、女性が叫んだ途端に振われそうだった拳が止まった。何これこの人に感謝。

やっぱり仲間とかなのだろう、大男は彼女の言葉に従って僕の襟を離してくれた。僕は自由になったので襟を戻してから、とりあえずいろいろと状況を理解したいとは思うのだけれど、どこからどう訪ねていいものか。でもやはり気になるのは、今も光り続けているあの緑の蛍光。

大男に対しては顔も見たくないくらいに怒りがわなないているので、顔を彼からは背けて、その女性に尋ねることにする。あれはなんなんですか。

「お前、あれを、わからないってのか」

大男が隣から驚いた調子で口を出してきたが、とりあえず顔を見たくないのでシカトしたのだが、隣からでも彼がシカトされたことでいきり立ちそうになっていることがわかる。ああ、コワッ。女性の方はまたブチギレそうな大男を軽く睨みつけてから、しかし緑の蛍光について知らない僕にたいしては彼女も驚きを隠せないらしい。

「久しぶりに見ました……。あなた、咎を犯した人」

「え」

「わかってないんですね。右腕の袖をまくってみてください」
言われた通りに捲くってみた。着せてもらってる上着と長袖の袖を捲くってみる。捲くる途中、この服貸してくださってありがとうございます、などと礼を述べる余裕さえあったというのに捲くってから僕は生唾をゴクリと、呑むことになった。人面瘤……？緑色に染められている、しかも発光している、あの光と同じ色の人面瘤が、右腕の中ほど辺りに、たしかにある。何で僕は今までこんなに大きな人面瘤を放置していた……。
「咎を犯した人には、この世界に落ちた時にその瘤が付くと言われています。本当は無限牢獄に囚われているはずなのに、どうしてかあなたは、世界を歩いてる……」

6

咎…犯罪者、ってことだろうか。そう言えば仮面の人も言っていた。犯罪者なら牢獄にいたことも納得がいく。でも、世界を歩いているのがおかしいって？僕は乙だから甲を歩くのは別に、そこまでおかしなことではないのだが。まあそんなことは今は、どうでもいい。

僕は慌てて右腕の袖を戻した。で、今のは無かったことにしたいなと思うけれど、全身から発汗が止まらないし、つうか無かったことには出来ないレベルの光景だった。何、今の、っていう衝撃。

単純にまず心配したのは、病気ということ。つまり自分の身体が人面瘤が原因でどうにかなってしまうのではないか、死ぬのではないか、という本能的な危機感だ。何せ湖を光らせている怪しげな光と同じ発光をしている人面瘤なのだから、かなり得体が知れない。

僕はとりあえず湖の発光の原因を教えてもらいたく思い、彼女に尋ねてみる。

「僕には記憶がないんです。そしてあなたの言うとおり咎を犯した人、なのかもしれない。でもこれは信じてもらうしかないんですけど、僕には本当に記憶がないから、湖の中で発光してる緑だとか、いまついていた僕の瘤のことも、何にもわからない。教えてもらいたいんです、差支えなければ」

「記憶がないんですか……」

「はい」

「で、今まで牢獄に囚われていたということは、この世界のことも何もわかっていない…？」

「そうです。で、で、犬少年に助けられて」

「犬少年。ああ、ということはあなたは……」

「え」
「いえ。犬少年はある人に遣われている身です。この都市で走り回る犬人間の類は全て、その人に遣われているんです。その犬少年に助けられたということは、あなたはその人の所に早く行った方が、この世界のことを様々、教えてもらえると思います。私では、上手に説明できるかどうか…」
「じゃあ、せめて湖のことだけでも、教えてもらえませんか。あるいは、この瘤のこと、もしくは咎について」
「私に説明できるのは湖のことくらいです。このネリィ湖だけでなく、この世界の全ての湖はこのように、緑とは限りませんが、蛍光する」
「蛍光する……」
「そして生まれてくるんです。この世界の象徴、繁栄の三日月に影響されて他の世界から引きずり出されてくる……」
「他の世界…？　繁栄の三日月……？　影響って……」
「ほら、見えてきました。浮かび上がってきました」
「何だ、あれ……」
「私にもまだわかりませんが……めずらしい…かも……！」
「レアってことですか？」
「そうかもしれません。あれは…すごいもの、その気配がありますね！」
　先ほどまで、緑の蛍光色に染まっていながらもネリィ湖の水面は静まり返っていて、例えば”音”、なんて一切鳴らずにただ発光だけが凄まじかったのであるが、これは何かしらの反響効果なのだろうか、壁を幾重にも反射して…例えば牢獄で音楽を流して聞いていた時に感じた三百六十度からの音の洪水…。そうだ僕はこういうサラウンドな音の回転で、音には何かしらがあると思ったんだったけど、そう牢獄の中にいる時に……ああ、もう忘れたな、っていうかこの音は頭皮や身体に染み込む感覚……びりびりと電流のように全身の表皮を震わせて、鼓膜を突き抜けるような錯覚を味あわせる…

…たしかにすごいことが起きる前兆か……。

僕がそう思った時に鼓膜を突き破るような音の感覚は、キィィィィィィィンというすさまじい耳鳴りに転じて、状況がよりすごくなることがわかる。思わず両手で耳を塞ぐ。大男と女性もそうしていた。そしてキィィィィィィンと共に水面が揺れ、崖下で波がしぶきを上げるかのような勢で湖が荒れ始めた。波しぶきは白色を緑の蛍光に紛れながらも主張し、僕の視覚と聴覚が捉える情報は凄まじい何かが起きることを脳髄に予感させる。

そして荒れ狂う湖の中から、水をその身に纏いつつ何かが上がってきた。水底から……あれは、僕の目からは、なんと言えばいいのだろう…。

「あれ……」

湖の中からそれが浮かび上がってくる。

考えられないことだ。

「人形、か」

「いえ、実際に人……」

僕はどちらの回答も違うとわかる。そして僕はあれを知っている。

金の粒子がざらざらと脳味噌の中を洗ってくれるような錯覚が起きた。いや、錯覚だったろうか。今僕の脳味噌から記憶が一つ、呼び起こされたようだ。これは、どういうこと、だ。世界……そうだこの二人は、アレ、を知らない。皆が知っているはずのアレを知らないということが、僕のノイズがかった記憶を呼び起こしてくれるかもしれない。鍵となって。

人体強化のためのパワードスーツ、Ｂａｂｅｌ・あれは僕らにとって大切な道具であり希望を託す対象でもあったはず。希望と絶望の狭間で揺れ動く世界に希望を拡散させるために人に力を与えてくれる発明、また戦乱をより激しくすることにも一役を買った……で、僕は今これをこうやって知識を思い出してみた、記憶を復活させることができたけど、何も嬉しくはないな、感情は何も湧き立たないなって感じだな。ただ眼に見えたり、耳で聴こえたりのこのネリィ

湖の光景は、圧巻だなと感じれるけれど。まあ、思い出した記憶はたった一つだから、そう興奮もしないのかもしれない。全ての記憶を思い出した時、僕は感動するだろうかー。

「ありゃ、鉄で出来た人形か何かか？」

「鎧……とか、そういうものにも見える……黒？　緑の発光に混じって色はよく判断がつかないけど……」

「黒じゃないか。そう見える」

「そうかも」

「どうにしろ始めて見るものだ。船を近づけて回収するぞ。あれは高く売れるかもしれないな」

「ええ、そうね」

耳鳴りは止んだ。緑の発光はまだ続いているが、波しぶきが上がるのも終わって再び静まり返ったネリィ湖。緑の蛍光が薄くなり多少暗くなった船上にて、二つの大小、身長と横幅に差のある影がは忙しなく甲板上で作業を開始し、船を緑色の蛍光のあるところに近づけていく。近づけていく途中で、作業をしながら吠えたくる大男。ありえねぇだろ、って呟きたくなるくらいに大きな声を張り上げているが、よく聞いてみると、こちらに話しかけているみたいだった。野生の獣か何かなのだろうか、興奮を包み隠そうともしない大声は、野蛮人成分百％。

「今日は実にラッキーだぞ、おおおおい！　ネリィ湖のここら一帯は俺たち兄妹が任されている縄張り……生意気なお前も、それから卑劣な横取りが得意な糞野郎どもも、この俺たちの縄張りのド真ん中の位置で蛍光が起きれば、邪魔をすることなんざ出来るはずがねえんだ！　あれを老いぼれに献上して、報酬は俺たちがたらふくいただけることになるんだぜ！　ざまあみやがれよ！　どいつもこいつも、悔しがることになる！」

……うるさい。

Ｂａｂｅｌを誰かに売り払うつもりらしいが、はたしてあれはそんなに売れるものなのだろうか。この社会は、さっきの都市の様子

から窺うに文明レベルがかなり高いように思える。僕が理解していた都市というものとはかけ離れた都市の姿を、さっき見せられた。

そういう文明の中でＢａｂｅｌが価値あるものとして扱われるかどうかは疑問だ。ていうか何で湖の中からＢａｂｅｌが浮かび上がってくるのか、ちっとも理由がわからないな。

「いやっほおおおおう！　おうおうおうおう、妹よ、あの向こう側で止まってる船が見えるか！　あいつらマヌケ丸出しで呆然としてやがるぜ！　緑の蛍光に誘われてやってきたんだろうが、ああ、残念だろうなあ、悔しいだろうなあまったくよお阿呆だなぁ！　ああ、まじで良い感じだ。良い予感がするぜ、俺は興奮してきた、俺はめっちゃ興奮してきたぜえええええ！」

うるさい狂人は自分が興奮しているということを自覚できる程度の脳味噌はあるんだな、と思う。発狂寸前とも見えるその大男、兄妹の兄の方、その発狂ぶりを一瞥することもなく作業を黙々とこなしている妹さんの方は、実に冷静な調子でそれに打ち込んでいる。まあ、あんなノリについていくのは面倒だろう。作業で気を紛らわすのが正解に違いなし。

「すみませんね、うるさくて」

途中僕に謝ってくる。妹さんの方は常識人だ。よかったよかった。二人して狂人では僕も、何だか同じ船の上にいることが不安になるって話。

「あの、本当に兄が申し訳ないことをしました。本当に、すみませんでした」

彼女が作業の手を一旦止めてから、謝ってきた。

いえ、と僕は言う。それ以外に言葉が思いつかない。彼女は頭を上げない。そんな彼女を兄が背後から叱咤する。なにやってんだ妹ぉう、などと絶叫しながら激しく作業をこなしている。大丈夫だろうか、頭脳。

やがて船は緑の蛍光のその中心地、つまりＢａｂｅｌの宙に浮かんでいる所に接近し、そして停止した。兄は歓喜の叫びを繰返し、

妹は落ち着いた様子。二人は水面に網を放り投げて、Ｂａｂｅｌをそれに引っ掛けると、甲板に引き上げて、回収した。

船上に上がってきたそれを僕も眺める。眺めれば眺めるほど、僕の脳内に金色の粒子がざわざわと蠢いて、記憶を提供してくる。Ｂａｂｅｌの第四試作型、企画時の名称はＯｍｎｉｐｏｔｅｎｔ．どのような状況、環境においても戦果を上げれるよう最新鋭の技術をこぞって投入するというコンセプトの元製作された、最後のプロトタイプＢａｂｅｌ。しかし、製作の途中にてＢａｂｅｌ計画の縮小が決定、それによって万能の神として崇められるはずだった第四試作型は、Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　ｎｏｎｅ、略してＭｏｎという蔑称を与えられた。黒と青の装甲を持つパワードスーツ。一度人間がそれを装着すれば、人としての実力を遥かに超えることができ、力を得る。そのための道具。だがその不幸たる失敗作、第四試作型のＢａｂｅｌ、Ｍｏｎ.

無くした記憶の燐辺として、見た途端にこのＢａｂｅｌに関する情報が湧いてきた。この都市に住んでる人間はＢａｂｅｌのことを知らないらしい。だが僕はこれを知っている。

何故僕が知っていて、彼ら彼女らはＢａｂｅｌを知らないのか。おそらく世界が違うから、ということ、だろう。犬が自動車の代わりに走り、オブジェのような信号機が立ち並び、湖から道具が浮かび上がってきた奇妙で、滑稽だが、独創的でもある世界。こんなのは僕の住んでた所とはどう考えても別世界だ。

「変な話だ」

と僕は呟いた。

大男がはしゃいでいる。変な踊りを踊っている。笑い声がやかましい。

「もしかしたら私たちの邪魔をする者かもしれないという可能性が捨てられなかったので、あなたを船に乗せていたんです。眼に付くところに置いておけば安心かと思って…それに気絶していましたし……あの、本当にすみませんでした。すぐに、陸に戻りますので…

…」

妹の方は本当に礼儀正しいと思う。正しすぎるくらいだ。まあ、この兄妹の場合はこれでバランスを取っているということなのかもしれない。

彼女はにこっと微笑んでみせる。作り笑いだと思えるが、良い笑顔だな、と思った。

7

あの兄妹はテスタという名を持つそうだ。テスタ兄妹。

僕はテスタ兄妹たちの主に妹だけと会話をして、別れの挨拶をして、船から降ろしてもらった。

あの香りの強い花はテスタ兄妹の湖内での縄張りを示すために置かれている一輪なのだそうだ。だから僕はテスタ兄の顰蹙を買ってしまったらしい。にしても花なんていう脆いものを縄張りに利用するだなんてどうかしてる。ただ僕は妹さんに恨みは無いので、そのことは喉に押し込めたままＢａｂｅｌとネリィ湖に別れを告げて、坂を上っていった。陽がもうすぐ登りそうな気配、夜が少しだけ藍色を強めてきている。僕はどれくらい気絶していただろう、犬少年は……。

高くなった坂の天辺で、僕はそこから一望できる三百六十度を見渡すことで、犬少年がいないかなと期待する。でも彼は見当たらない。その代わりに白髪…真っ白な髪の毛をした男性の姿がまだ薄暗い藍色の中で、見えた。それなりにがっちりしているが、テスタ兄とは違ってどこか紳士的とでも言うのだろうか、雰囲気からして話しがいろいろ通じてくれそうな礼節のある方なのではないか、と窺えた。見ただけでそう思わせるのだ、話してみればもっとその人から礼節を感じるであろう。かなりの紳士であろう。

その紳士は向こう側から歩いてくる。坂の上をずっと暗い向こう側から歩いてきたのだろうか。丁度良い、この人にものを訊ねれば親切に対応してくれるだろうと思ったので、犬少年を見たかどうかを聞くことを試みる。見かけませんでしたか、人を乗せていない犬の少年を、と。

そう白髪の彼の雰囲気は実に紳士的だ。服装もどこか落ち着いた風なチェックのシャツを着ているし、近づいてきて見えた彼の瞳の色は茶色で、何だか渋い。そんな彼なのだ、僕の質問に快く対応し

てくれるに違いない、犬少年を見ていないとしても、人を探すならこういう場所が良いですよとか機転を利かして親切にも良い情報を教えてくれたりするに違いない。…と、予想していた。

が、彼は僕の訊ねをシカトして、すっ、と軽やかに通り過ぎていきやがった。

な、なにぃ。

全然紳士違うじゃん。全然真摯な対応してくれないじゃん。

驚きつつ悔しがりつつ、僕は通り過ぎていった石像のようにガッチリした背中にもう一度声をかけた。だがやはり彼はぽつぽつと坂の天辺を歩いて進んでいき、何も僕に返事をしないまま背中を小さくしていくのだった。僕は少しずつ明るくなっていく夜の中で自身が否定されたような感覚に襲われて、朝日が昇らなければいいのに、と何故か思った。不親切な対応をされると嫌な気持ちになる。こういうことがわからなかったら、社会は黒ずんで死ばかりが横行するようになるんだ、失敗ばかりが横行するようになるんだ、それが連鎖して社会は最悪に住み心地が悪くなるんだ、だから僕達は親切を心がけなければいけないのが本当なんだきっとそうなんだ、なのに白髪の彼は普通にシカトした。鹿十した。今度あの男を見かけたら、拳を振るってやろう。いや、返り討ちに遭うのは嫌だけどね。ああ驚いたわー、悔しかったわー。

テスタ妹の笑顔でも思い出して気分を良くしてみよう。あ、もうどんな顔だったか忘れかけてる。必死に思い出そう。あれはいい笑顔だったから。そうだ昇り上がる朝日のようにね！

僕は馬鹿みたいな思考をしつつ、白髪の彼とは逆の方向に坂上を歩いていった。高い所を歩いていれば犬少年も僕のことを見つけやすいだろうと思ったからだ。まぁ、犬少年がまだ僕を探しているかどうかはわからないのだけど……だって、気絶して、起きて、もうすぐ朝日が昇ろうとしてるんだもんな……しかし犬少年くんはわざわざ牢獄から僕を引っ張り出してくれたんだから……きっとまだ探してるよな……案外、逃げちゃった方が僕にとって都合が良かった

りして。

「わからないことだらけだもんな」

一人ごちた時に、丁度日の出に頬を照らされた。丸くて、情熱的に赤い昇り上がる太陽は、僕の知っている世界と同じ円形をしていて、万物に色彩を与える光を提供する。僕も色彩を与えられているだろう。

見下ろせるネリィ湖も、黒かったのが、明るめの藍色という色彩を光によって与えられていた。テスタ兄妹と僕が乗っていた錆の多い小船がここからでも見える。小船の上でテスタ兄妹はＢａｂｅｌを包装などして、買ってくれるところに運ぶための準備をしているらしく、相変わらず忙しなく動き回っている。野太いテスタ兄の声が、離れた位置になったここにもよぅく聞こえてうるさい。花の香りも届かない位置にも来たのに聞こえるのだ、テスタ妹はよく耳が潰れないものだと関心したくなるね。

遠くに見えるテスタ妹の顔がわずかに見えて、彼女の顔を僕は思い出した。

朝日に彼女の笑顔が重なって、僕はゾッとした。何故だかわからないけど、ゾッとした。朝日を眺めるのはしばらくよそうと思わされる程、何か自分自身の個性だか何だかが、顔を思い出したことと朝日が重なることとを否定して。で、僕はまた歩き出して、それから長いこと歩いた気がするけど、時間のことは気にしなかった。どれだけ長いこと歩いたのかは、わからない。でも三十分は間違いなく歩いたな、と思う。ずっとネリィ湖が左側にあった。朝日が昇り、暖かい日光。途中すれ違う人々は都市の中心地にいたころよりもみずぼらしい姿である人が多くて、やっぱり、こういう所もあるんだなと僕は納得するのだった。浮浪者、貧乏そうな人、不機嫌そうな人……。

「ああ……」

集団暴行が目に付いた。ネリィ湖側とは反対側の、つまり右側。僕から見下ろせる位置の前方にて明らかに多人数で一人をぼこぼこ

にしている光景が見えた。何故あんなことをしているのか、理由は分からないが見てて気持ちの良いものでないことは間違いない。Ｂａｂｅｌがあればな、と僕は閃いた。でも直後、聞こえた。金の粒子が僕を諭すかのような声が聞こえた。

『お前が発明したのではない』

その声を聞いた途端に気持ちが暗くなった。

そしてそういえばさっきの不親切な、がたいの良い男もあの集団暴行を見ないで通りすぎたのだろうな、と想像してみた。想像してみたら、僕は阿呆らしくなった。あんなに肉体の頑丈そうな奴が手助けをしないのに、牢獄に閉じられていた僕があのぼこぼこにされている人を助けられる訳がない。僕の役割じゃない。言い訳かな？

僕は足を止めなかった。集団暴行の側を眺めないようにした。途中、『助けて』と聞こえたような気がした。それが幻聴なのか実際にその人が言った言葉なのかは、知らない。

僕は坂の上を、歩き続けた。

8

「結局、何処に行ったって、変わらないものは変わらない。そういうことかな」

何処に行ったって、と僕は思っている。そうだ、記憶はなくとも都市というものがどういうものであるかとか、人間がどういうものであるかとか、言語のことだとか、音楽、金色の粒子、そういうことを僕はわかっている。個人的な記憶という奴は思い出せないけど。変わらないものは変わらない。そうだ僕のいた世界でも集団暴行は溢れていたし、ああそうだ、僕らの世界はここよりもひどい不完全ぶりだった。人は争って、争って、争っていたはずだ。

馬鹿丸出しで。否定をして。信じることをせず。疑い深く。ただ保身だけをせざるを得ないと決めた人たちの、いかに多かったことか。僕はそれを知っている。覚えている。薄汚いんだ。

…そうだ、確かＢａｂｅｌ。僕は……。

立ち止まった。脳髄で粒子たちが忙しなく動き始めた。ぐるぐるぐるぐると小魚の大群が水の中で泳ぎまくっているようなイメージ。記憶が再生されようとしている。復活する。映し出されるのは白衣を纏った人、研究者、あるいは黒いスーツ、そうだＢａｂｅｌを……。

「ようやく見つけましたあああああああッッッ！　ずばあああああああん！」

「わっ」

背後からの衝撃。突き飛ばされて身体の姿勢を崩されて、よたよたしてたら、団子虫みたいに坂を転げ落ちる醜態を晒すことになっていててててっ、という感じで突如すぎる展開に混乱したけれども、転がるのがようやく終わって、坂下から坂上を見上げると、息をぜーはー、と肩を激しく上下させている犬少年の、犬耳のぴくぴくし

ている姿、尻尾がぶんぶんしている姿、が僕を睨むような目付きで見下ろしていた。…犬少年、やはり探し続けていたのか。少し驚く。

彼は坂下にごろごろ転がった僕を引っ張り上げて後に、こう言った。

「いやー、ほんと見つかって良かった。急がないとマジやばいんで、さっさと背中に乗ってくれません？　全速力で飛ばしますけど、吐きそうになったら道に吐いてくだされば結構ですから」

僕は青ざめた。吐くこと前提のスピードを出すのかよ、と訊ねたかったが、犬少年の目付きがかなり真剣なので反論ができない。

彼の皮膚から茶色の毛が生えて、二足で立っていた身体が骨格を変えることで四脚に転じ、人間の顔をしていた彼は犬そのものとなる。茶色の大型犬、だ。大人一人を背に乗せて走ることが出来るほどの、体長一・五メートルは超えていそうな。

「早く乗ってくださいよ。糞野郎」

などと悪口まで言ってくるのでムッとしたが、よっぽど彼は怒っている様子に見えた。あるいは急いでいる。ここは大人しく従うしかなさそうだった。吐くのは嫌だなぁ……。と思うが愚図ってばかりの餓鬼でもいられないので、僕は彼の背に跨った。

そして跨った瞬間にあり得ないほどの縦揺れと横揺れ、僕はすぐに気持ち悪くなって、おええ、と出てしまったが余計に速くなった。容赦ないねぇ、と怒りたい所だが怒る前に僕は吐いてしまった。逆流と嗚咽。こうして嗚咽無限地獄は始まった。その記念すべき第一回目の嗚咽だ、なんてその時僕は考えることができなかった。余裕がなかった。全ての思考を停止させられるほどの圧倒的不快感を与えてくる乗り心地。僕は犬少年を呪うことも、怒ることも、恨むこともできなかった。

「うわあああああああん」

何故だか、犬少年は走っている間ずっと絶叫していた。走りながら絶叫しているのにスピードがより加速していくという不思議。で、僕はずっと吐き続けて、すっかり屍のごとく疲弊してしまった僕が

落ち着くのはそこから三十分後のことになる。
たしかに到着は速かった。二時間で着くはずとか言ってた場所に、三十分で着いたのだから。
僕は犬少年から降りて真っ先に、ふらふらと地面に倒れてからゲロした。
涙がぼろぼろで、身体がくたくたで、服も汚れて、気分が最悪だ。でも僕は知らなかったんだ。この時、犬少年の方が気分は最悪だったに、違いなかったり。
彼ら犬人間は消耗品でしかないということを、世界にやってきたばかりの僕はまるで知らなかったから、彼がどうして「うわあああんん」などと圧倒的な走りを見せたのか理解できなかった。彼だけでなく犬人間は全てそうなのだった。すぐに代わりが利いてしまうから、すぐに捨てられてしまう。僕は知らなかった。可哀想な犬人間の実状なんて、甲を歩き出したばかりの乙にはわかるはずがない。僕は所詮、牢獄に閉じ込められていた犯罪者、そういうことだから。
辿り着いたのは館。ド派手で、うわ、芸術ですね、という感想を百人中八十人くらいは言いそうな、残りの二十人は唖然として口を閉じられなくなるような。そんな館が寝転がったまま起き上がれない僕の前方で、聳え立っている。と表現したくなるほど、巨大。館、というよりかは、四角い箱、という見た目に近かったのだけれど、犬少年が「館に到着しました」などと言ったから、僕はこれを館だと認識したのだ。
形自体はただの立方体。しかし装飾がすごい。あれは彫り込まれているのだろうか、どういう造りをしているのか全くわからないが、描かれているのが何であるかを知っている。あれは終末の時を描いているのだろう。彫っているのだろう。ならばこの館の主は終末を好む者ということ？人の悪癖が暗雲を生み起こし、神の怒りを買い、現世に悪魔を呼び起こす不幸の最たる時。その様子が始まりから終わりまで描かれているその彫刻が、立方体に万遍なく描かれているように見える。僕の目線から見えない位置に彫刻が為されているか

は、確認ができなかったが。
庭は広い。門もでかい。使用人と思わしき風体の、白黒の服を着た男女が忙しなく道を行き交い、そして犬耳を生やしたそういう者もたくさん見受けられる。
テスタ妹の『犬人間は遣われている』という言葉を思い起こす。この館の主は大金持ちであることは、まず間違いない。犬人間は都市に住まう人々の多くに利用されていたことを見れば、その見返りが館を大きくし、庭を広げたということだろう。僕は立ち上がってから館をわずかに見ただけだが、圧巻される。正直、怖気づいた。怖気づく他、ないだろ。
嫌な感じだ。僕の目の前で聳え立つ巨大な館は、人から人に向けられる侮蔑、その象徴だと思えたから。黄金が目立つ配色が、そう感じさせるのか、大勢の人間と犬人間が館のために駆けずり回っている光景を見せられて、そう感じさせられるのか。
僕は嫌なところに連れてこられたと、自覚する。
「遅かったじゃないか、主がお待ちだぞ」
多くの者から挨拶をされながら庭の奥より現れた人物は、干からびたミイラだとしか見えなかった。僕は口をポカンと開けてその人を眺めてしまって、それに気が付いたミイラは僕を鷹のような鋭い、って感じの目で射た。僕は慌てて目を反らした。
犬少年が偉そうなミイラの言葉に頷いてから、
「お役御免ですね。これにて。ひゅーひゅひゅー」
と言った意味を、僕は深い意味に取る事をせず聞き流していたが、この時犬少年はひどく恨みがましい目で僕やミイラ、館、その周辺にいる人々、を見ていた。口笛を吹いて軽い調子を演じていたが、彼の心底はひどく絶望していて、その絶望に付随している怒気を周囲に目線で訴えていたのだろう。僕は、馬鹿だから知らなかった。
それで、僕は犬少年が何時の間にその場からいなくなったのか、分からなかった。
彼は僕にもミイラにも挨拶をしないまま、どこかに消えた。いや、

消えたのか連れて行かれたのかもわからない。僕は彼が消えるその時を、絶望へと引っ張られていくのを、気が付くことすらしなかった。

「さあ、こちらへどうぞ。我々の配下の者がお手間を取らせたようで、失礼いたしました。主がお待ちです。私の後についてきてくだされば」

「はい」

僕はそう言われたのでミイラのように活力の無い、老いた執事、といった男の背後をついて歩いた。この時になってようやく、犬少年が見当たらないことを認知する。

でも、特に気にもとめない。

また会うこともあるのだろうか、と思考していた。

犬少年は廃棄処理場に送られて燃えるゴミとして投棄されて二度と現世には帰ってこないという、そういう処置を為されたということを知ったのは、この館の主に会ってからのことだ。そして僕はまた新たな犬少年と出会う。見た目などほとんど以前と変わらない、クローン、或いはドッペルゲンガーという言葉がぴったりな、姿形の変わらない再生された犬少年。でも投棄された彼と新しい彼は別の彼だ。記憶は削除されているらしいから。

僕は館の主と出会う。

老いた臆病者さ。こんな館に住んで、王座にて座り、奇抜な部屋で守銭奴をするしか脳の無さそうな、意気地を完全に無くした老人さ。

でも僕は実質、彼の指示のおかげで牢獄から引っ張り出されたとも言えるんだ。

僕を牢獄から実際に出してくれた犬少年はもう投棄されてしまったのに、指示をしただけの老人に感謝しなきゃいけないのだとしたら、いや、僕は感謝しない。

僕はその老人に、魅力を与えられなかったからだ。

9

豪華絢爛の至りと呼べる館に踏み入ってから、老人と挨拶程度といった会話だけを交わし、僕は客人として持て成しを受けた。館に従事する者が芸を尽くし、そういえばいろいろありすぎて忘れていた空腹を思い出された。黄金の食卓に座って、でも僕はがむしゃらとはいかず、様子をうかがいながら空腹を満たすために、手を動かし、口に料理を運んだ。ばりばり、ばりばり、と喧しい音が鳴った時、黄金の食卓は静まり返っていて、僕はその自分のばりばりと鳴らす音を意識させられてしまうのは心地が悪い。僕を客人としてもてなすなら、そういうところにも気を配ってくれれば良いのに、と考えてから絶望した。人ってこんなに簡単に甘えるようになってしまうんだ。

僕は黄金の食卓から立ち上がり、言わなければならないことを、近くで突っ立っていた綺麗な執事風の男に言った。

「僕には知らなければならないことがある。世界のことや、あと、これのことだ」

僕は右腕の袖をまくって人面瘤を、見せ付けた。

さっきまで芸をしていた人や、コックと思わしき人など、多くの従事している人間や犬人間が空気のように屯しているこの部屋で、僕は人面瘤を見せ付けたことによって目立ったらしい。…人面瘤だ、人面瘤…という人々の呻きを確かに耳で察知したのだ。

綺麗な執事は息を呑むような震え方をしてから、後少々お待ちください、と確認をするためだろうか歩を進めて部屋からいなくなる。

そして数十分後まで執事は帰らず、僕は黄金の食卓で相変わらずばりばり、ばりばり、と噛み潰す音を目立たせなくてはいけなかった。人間たちの空気のような佇まいの中、ばりばり、はまるで恥ずかしいし、生きているのが嫌になってしまう。嫌気が刺して食べるのをやめると、することがなくなってしまって、犬少年、サトと会

話して暇つぶしできたらな、と思うのだが彼は見当たらない。そうださっき彼はお役御免、と言っていたのだったと思い起こし、退屈に囚われるしかないと諦めて、目を閉じて金色の粒子と遊んだ。

やがて綺麗な執事が戻ってくると、僕に告げる。

「主が、お話しましょうと申しました。ついてきていただけますか」

僕は黄金の食卓で、金色の粒子と遊んでいることで満足する、ということはない。

「ＹＥＳ」

ふざけた回答の仕方をして、僕は開眼した。

黄金の食卓には、大きな海老を焼いたもの一匹、奇抜な味わいをもたらす卵を抱えた魚、鯨を小さくして小魚のようになったものの揚げ物、緑色の液体の香しいやつ、棒状のぷるぷるとした甘味のあるもの、そして最後に食べられるのを待っているような爽やかな色遣いをしている平べったい果実。僕は人面瘤のことを知らなくてはいけないし、世界のことを理解しなければいけないから、黄金の食卓の全てを腹に入れることはせず、老人の根城であるような、奇抜な四角い部屋に綺麗な執事の案内の元、足を踏み入れた。

綺麗な執事は、軽やかなステップを踏んで僕の前方から背後に下がっていくと、その下がっていくままにソノ場所から出て行った。

翡翠のルーム。翡翠色の宝石が埋め込まれている壁や天井、床を持つ、不可思議な力でキューブが浮かんでいる、そんな場所。それが老人の根城だった。意気地無しの……。

僕はまだそのことを知らない。

自身が犯罪者ということと湖が蛍光するということ。この程度しか僕は知らない。

老人は、最初に挨拶のような軽い会話を交わした時には、気が付かなかったが、彼ではなく、彼女、らしい。老人というよりは、老婆、ということだ。彼女は派手な装飾に身を包み、青紫色のキューブに乗ったままその玉座に腰を下ろしている。そして、

「この部屋にはルーピックキューブにあるような色彩は何一つ無い」

と独り言を呟いた。僕は訳が分からないのでその言葉をスルー。つまり返事をしないまま、老婆が何かしら言うのを待ってみる。余裕があるように見せないと、足元を掬われていいようにされるという危機感があったから、相手から話させようと思案、した。ルーピックキューブなんて、そういえば僕は並べるのが無理だと幼い頃に……ああ、あやふや。記憶ってあやふやー。

老婆の指は枯れ木の枝のように細く、その動くのが不思議なほどの朽ち果てている指を、彼女は一差し指から小指までを順番に動かしてくねくねしている。ただ、やはり枯れ木であるから、やっとこさ、という雰囲気。老婆は玉座より立ち上がると、派手な黄金色のアクセサリーを煌かせることで枯れ木をごまかしているが、老婆は、やはり老婆だ。…老い。

老婆は青紫色のキューブから風のように軽やかに降りてくると、僕の前に立ち、教えて欲しいことは全て教えて差し上げるさ勿論、と隙間風のような声付きで言う。

僕は執事にやってみせたように、袖を捲くり、老婆の落ち窪んだ瞳に人面瘤を見せ付けるようにしながら、

「僕はこのことだけではなく、僕の知らないほとんど全てを教えてもらわなければ気持ち悪くて眠ることさえできません。落ち着くことができません」

こう主張した。老婆は案外、素直なもので、首肯すると、己の身につけているアクセサリーをわざと主張するような、そういう嫌味のようなものが含まれた動作を惜しみなくする。彼女のプライドそのものがアクセサリーを身につけている自分、に集約されているのか、そう想像させられるほど主張の濃い、よくわからないが印象深い動きをする老婆なのだった。

そういう彼女は、首肯したにも関わらず、

「教えるよりは、経験するほうが早いだろう。見聞きする方が早いだろう」

と言った。僕はいらつく、と思った。だが、はやる気持ちを抑え

て、ここは老婆の言う通りに従った方が事は案外、近道なのかもしれぬと思い直して、僕は首肯を返した。すると話は本当に早いもので、その十分後には二十匹くらいの犬人間と、その背中に跨る二十人くらいの従者、それに囲まれて僕は甲の世界を知るための、外出をしていた。犬少年ではなくて黒い犬の背に跨って、僕は陽が昇り上がっている昼を、道を、都市を、駆け抜ける。

その途中で出会ったのが、〈顔の無い天使〉。

この世界を八十年周期で破壊するために作られる、災害。

灰色のローブで二メートルはある全身を包み、足がついていなくて幽霊のよう。顔があるのに目鼻口、耳さえもない、のっぺらぼう。背中に半円の形をした羽のようなものを付けて、突如として都市内に現れ、物を壊し、人を殺す。それが、〈顔の無い天使〉の役割。

秩序を象徴とする仮面の人とは対照的な、破壊を象徴とする存在だそうだ。

そして僕の人面瘤は、〈顔の無い天使〉の血を啜る。

それがどうにも、僕が牢獄から出されたことや、人面瘤の意味、そして老婆の目的。この世界の法則。老婆の言っていた、ルーピックキューブ。

全ては関連していることだ、と都市の中で僕は老婆に教えられる。

そして今、僕の目の前には〈顔の無い天使〉が浮かんでいて、僕を見下ろしている。

殺さなければ、お前が殺される。老婆は平然と僕にそう告げた。

10

芸術的な都市であるそこは、夜の時分よりも昼の方がどこか寂寥としていて、人通りも少ないように見える。

あんなに点灯していたオブジェと見紛う信号機も、発光が昼の陽光に包まれて、夜の時よりも主張をわずかにしているような。

ただ、今はそれを気にしている場合ではない。そういう時ではない。

乾いた風を身に受けながら〈顔の無い天使〉を見上げる。久しぶりの緊張感だ、と脳髄が喚くので、ああ戦いということを僕は昔していたのかもしれない、でも殺し合いをしていたのかはわからないよな、と天使を見上げながら思う。こんな天使があってたまるか、天使とは人の顔をして微笑むとされる安らぎの象徴ではないか、と僕は心の中で反対意見を唱えつつ袖を捲くった。たしかに人面瘤が普段より腫れ上がっている。ぼこっとしていて、ああ蛍光している赤色に。湖の時は緑だったが、今は赤、赤、まぶしい点滅が目に優しくなくて、やはり僕はこの人面瘤は好きになれない。身体に悪そうだと本能的に感じさせられる、そういう瘤だ。この瘤が嫌いだ。

「この世界に住まう限り、何処までも、何時までも付きまとうのがその瘤だ。それがお前に力を与えるのだから、源となるのだから、頼りにするといい。それで〈顔の無い天使〉の蛍光する液体を啜るが良い」

背後で控えて犬に跨っている老婆が、まったく平然とした声音で言ってくる。

他人事だろうが、僕はこんな瘤嫌に決まってんだよボケナスが、と絶叫したくなる混乱に襲われる。でも闘争心は滾る。おそらく八つ当たりをしたいと思ったのだ。ただやはり〈顔の無い天使〉はその幽霊のような佇まいが不気味で、何をしてくるのかわからない。

とりあえず武器がなければ戦うことはできない。
それに……。
「人質のつもりなのかこれは。これは人質ですか、人面瘤が光ってるからって勝てないじゃないですか！　人質もいて、武器もなくて、〈顔の無い天使〉なんて初めて見た！」
最悪の状況じゃないかと感じる。
気を失っているらしき男性が一人、〈顔の無い天使〉のすぐ頭上に浮かされていて、何時でも殺される準備は整ってますよみたいな。全身が真っ赤に染まっているのは、あれは酔っている？酒のせいで赤くなったというような紅潮。全身が赤くなるのはあまり良くないことらしいが、まあ酒の話はどうでも良い。まだあの人は生きているように見える。なら僕はあれを……というか、どこかで見覚えのある姿だと思って目を凝らせば、ネリィ湖の坂上で出会った、僕をシカト、鹿十、していったチェック柄シャツを着ていたがたいの良かった男ではないか。
何故、〈顔の無い天使〉の頭上でぷかぷか浮いているなどという醜態を晒しているのか。
屈強そうで知的な印象の人であったのに、酒によったせいで捕まってしまったとか、そういうことだろうか。人をシカトするような不親切ＧＵＹは放っておいてしまおうか。てかその前に武器とかなかったら僕も人質にされる、あるいは、殺されるなどしてしまうのは、嫌だ。
――ならば、これを食べさせるのだ……。
老婆の隙間風ｖｏｉｃｅが耳に入ってきて、驚きつつ、差し出されたのを受け取る。老婆がそそくさと逃げていくのを憎々しく眺めながら、僕は渡されたのを見ると、それはグミだった。
正確にはグミの形をした、凝固した血の塊ということだろう。青色に蛍光しているグミの塊が僕のてのひらの上でぷるぷるしている。食べさせる。食べるのではなく。誰に。この右腕に貼り付いて膨れ上がっている人面瘤に。

鼓動、心臓が躍動して血流が全身に駆け巡ることが、どく、どく、どくどくどくどくと力強くて手元が震えてくる。本当に、人面瘤に餌を与えるような真似をしていいものか。僕は明らかにこの人面瘤に対して嫌悪の感情を抱いている。それに対して、このグミを食べさせるということは不愉快、だ。きっとグミを食べさせたらむしゃむしゃと人面瘤は口を動かすのだろう。僕自身がどれだけ不快に思うかなど気にも止めずに、むしゃむしゃするのだろう。だが〈顔の無い天使〉は顔が無いから何を考えているかわからない。本当、今は見下ろしているだけだけど、早くしなければこいつは僕を殺す。宙に浮かんでいる男を殺す。

のっぺらぼうは表情がわからない。まったくわからない表情。だが、突然蛍光を開始した。黒い影のような色遣いをしていた、のっぺらぼうが、蛍光した。赤色に。僕の人面瘤も赤色に蛍光している。人面瘤が同調しているということ?それとも〈顔の無い天使〉が?

だめだ同調だけはしてはいけない。

焦りつつもそう悟って、唯一赤とは違うグミの青色に期待を寄せる。青は僕を冷静な気持ちにさせてくれる色だ。ならばきっと青と同調するが正しい。嫌悪するべき人面瘤や〈顔の無い天使〉に同調してはいけない。そうか餌ではない。このグミを食べさせることは人面瘤に対する、どちらかというと攻撃、たる行為か。

そう閃いたことで決意が固まって、ならば話は早い、僕は青色のグミを人面瘤の口の部分に突っ込んだ。捻りこむようにして、押し込んだ。人面瘤は、いやいや、とでも言うような気味の悪い動作をするので、僕は腹正しくなってもっと力強くグミを押し込んだ。

無理矢理、食させる。

喉に押し込ませれば押し込ませるほど、人面瘤は苦しそうに、いやいや、と顔を動かす。ナイフで横に線を一本入れただけのような開いていない両眼と、小さな鼻、ポカンと開いている口。僕は迂闊にも、人面瘤に対して赤ん坊というイメージを感じ、感じてから後悔する。赤ん坊なんて可愛らしい、守らなくてはならないものじゃ

ない。だからグミを無理矢理食させる。いやいや、としているのなど、気にしてはならない。

人面瘤はグミを拒んでいるのだろう、より赤色の蛍光を強くする。そして人面瘤だけではない、それに呼応するかのように、〈顔の無い天使〉も影のような黒から血のような真っ赤に、点滅を激しくしてみせる。そして灰色のローブに包んでいる身の、その長い両腕を高く掲げた。

やばい、と思った。〈顔の無い天使〉はいきり立っているように見える。やはり人面瘤と呼応している。人面瘤が嫌がるから、〈顔の無い天使〉も嫌がり、興奮しているということか。

「キャアアアアアアアアアアアアアア」

甲高い悲鳴。生物の発している声とは思えない、耳をつんざく超高音。それは言葉ではなく叫びでしかなかったが、〈顔の無い天使〉がどういう思いでその超高音を発しているのかは、さすがにわかる。こいつは、ブチ切れている。

かかげられていた天使の両腕が振り下ろされる。潰される、と思い慌てて背後に下がったが、地面の砂利が幾粒も弾け飛ばされてきて、さらに地面に拳を叩き付けただけの癖に、その衝撃は凄まじく、それのせいでふわっ、と身体が浮かされて、骨が軋むほど叩きつけられた。

かはっ。

そんなのが肺から絞り出て、内臓から昇り上がってくる不快感。また吐くのか、と思ったが黄金の食卓でいろいろと上手いものを食べた、と過ぎった瞬間に吐き気が少しおさまった。

これが飯の力か、と思った瞬間に僕は人面瘤が大人しくなったとわかる。勿論〈顔の無い天使〉はイキリ立ったままだが。しかし右手の袖の人面瘤は、青く、染まった。グミの力。いける、と僕はわかる。予兆。『腹の中で何かが造られた』。

黄金の粒子が脳髄をザラザラと洗うような感覚と『腹の中で何かが造られた』感覚二つが入り混じり、恐ろしくも期待したくもある

予兆と転じ、激しい頭痛という副作用を味合わせてはくる。
『腹の中で何かが造られた』
繰返し強調するかのようにその感覚は強まってきて、頭はジンジンと痛い。
だが腹の中から『造られた』それが迫り上がってくるのもわかって、そしてその迫り上がるモノは消化した食物ではなく、血反吐という奴でもなく。そう、人間の中から通常出てくるはずのものではない、だから『造られた』なのだ、と僕はジンジンする頭で支離滅裂な思考をした。混乱している混乱している、と自分でもわかる。だが『造られた』それが腹から喉へ、喉から口へと、そうやって登り上がってくるに伴って、快楽、安心、みたいな感覚も登り上がってくる。僕はめちゃくちゃな頭になりながら、遂に口からその柄が見えた時、握る所が見えた時、そうだその時、僕は激烈に感動した。武器だ、なるほどこれで〈顔の無い天使〉を……。弓なりに硬直して痙攣するかのような姿勢になっている僕の、その口から登り上がってきたのは柄。
柄を僕は握って、一気に身体の中から引ッぱり出した。その時には異様と言っていい痛みが走り、ただでさえ痙攣していた身体がさらに震える。だが柄を握る拳にさらに力を込めて。
ずぶしゃあ。
そんなひどい音を鳴らしながら、露出させたのは一本の刀。血しぶきと共に、身体の中から。口の中から刀、細めではあるが長い刀身を持ったそれを。武器。……僕は右手にそれを持ち、青の霧を纏うそれを構えた。
――お見事、お見事。皆、拍手、拍手喝采を！……
背後から老婆の隙間風。
すると二十人くらいの人々が犬人間に跨ったまま、手と手を打ち合わせて、騒がしい拍手。完全に見世物だった。多くのその打ち鳴らされる音は、本当に感嘆して打ち鳴らされるというのではなく、形式的、という雰囲気がある。ただ僕自身は碌に事態を理解してい

ない。わけがわからない…。ただわかることは〈顔の無い天使〉はまだイキリ立っていて、今しがた身体の中から出て来た青い霧を纏う細長い刀身の刀、これで戦わなければ、両腕で叩き潰されるなどして、殺されるということ。

僕は拍手喝采を背にしたまま、拍手が終わるのを待たないまま、駆け出す。

〈顔の無い天使〉に斬りかかった。

赤色に蛍光している液体が斬り口から噴き出したと思うと、霧のようなものに変わる。その霧となったのを人面瘤が吸い取っていく。

こうやって吸い取ることによって力になるのか、とわかりながら追撃していく。

だが、横殴り。ふきとんだ。

あ、死んだ、と思った。

11

全身を包帯で巻かれて、いる。

瞼が腫れている感じがある。全身が重たい。ベッドの上で毛布に身体が包まれてはいるが、感覚でそれらが損傷していることがわかる。腫れとか、動かし辛い、とか。痛みもある。なんでこんなことになっているんだろう。

「まったく記憶が無い。……いて」

パッと見た感じ洋風な部屋だ。が全てが黒で塗られている家財であり、その自身が被っていた毛布の色でさえ黒。スタイリッシュとでも呼べば良いのだろう。ただ僕の身に着けている包帯だけは真っ白だが。そういえば、服を着替えさせてもらっている。これは、黒のスーツ……。何でスーツ？

ベッドから降りると眩暈。立ち眩みがする。

立ち眩みが終わってから思い出したのは人面瘤と、のっぺらぼうで長い手を持った、半円のような羽を持った灰色のローブ、〈顔の無い天使〉のこと……僕は慌てて黒スーツの袖をまくってみると、包帯がぐるぐると巻かれていて見えないので、ほどく。

「……」

やはり、人面瘤は、ある。今は蛍光していないし、腫れも治まってはいるが。

僕は段々と思い出してきた。〈顔の無い天使〉が馬乗りになって僕をぼこぼこに殴りつけて……骨が折れた、武器を手離して、死ぬ、と悟った辺りで、意識がなくなったはず…。この黒い洋間は棺桶を連想させるものがあるが、まさか死んだわけじゃないよな。

黒光りしている棺桶が縦向きで、壁に立てかけられているな、と思って近づいて見たら、洋服箪笥だった。開けてみようかと思ったが、鍵がかかっているので開かない。開かないのでは、棺桶という

ことだろう。

棺桶とは反対側、ベッドの隣にある窓。三角形の窓。それを両開きに外側へと開いて、入り込んでくる風が冷たいとわかる。長袖一枚だけではさらに寒く感じたことだろうと思えば、スーツを着せてもらえていたのはありがたいことだなー、と漠然と思う。

見える景色は庭。とても広い庭で、僕の目線から見下ろせる景色のほとんどが庭。果物が生っている樹や花園、うねうねした道、明らかに不自然なのは黄金の生っている樹。黄金が生るなんておかしなものだ。悪趣味なことだ。そういう樹が百本以上。果物だけ生らしていれば綺麗な庭って感じなのに、むしろ黄金と果物の両方の樹を生らしていることで、老婆が悪趣味だとより伝わってくる。食と金両方なくちゃ、みたいな。

庭師みたいな人だけで三十人くらいいる。その内の一人が僕が見下ろしているのに気が付いたらしく、会釈してきた。僕は彼らを見下ろしていることに何だか居たたまれなくなったので、

「やはり嫌なところに来た」

言いながら外開きの窓を閉じると、針の落ちる音さえも聞こえそうな静寂、と思えば、ハッ、ハッ、という吐息のような。後ろからなので振り返ると、入り口のドアがあるところに、何時の間にか犬少年がいた。茶色い大型犬の状態で。

わん、と吠える。

大型犬の尻の穴と尻尾を頼りにして、僕はタロットカードの置かれている通路を歩く。何でタロットカードが置かれているのだろう。しかも純金製。月のカードを引いてから、スーツの胸ポケットに何気なく入れて歩くことを再開する。犬少年は僕が立ち止まった時は、ヘッ、ヘッ、と舌を出してこちらを見て待っていてくれた。犬少年は忠実だな。と思いつつまた茶色い大型犬を頼りにして通路を進んでいく。右往左往。右往左往。通路は複雑で、長くて、老婆のいる

であろう部屋につくまでタロットカードを何組見たことだろう。大型犬は途中犬少年に変身して、

「ナラク様は、タロットカードがお好きです」

と説明した。老婆はナラクという名らしい。僕は心の中では、（きっと彼女は金の方が好きだろう）、と思ったが口には出さないでおいて、大型犬に戻った彼の尻尾と尻の穴を頼りに、右往左往、右往左往。迷宮のような館だ（犬少年がいなければ館から出ることもできない）。つまり老婆に命を握られてるようなものだろう、と僕は悲しくなって空しくなって衝撃が走ったが、そんな頃には翡翠のルーム。辿り着いてた。相変わらず浮かんでいるキューブだけは青紫色。他の色遣いは翡翠。

僕はそれらを見渡してから老婆に目をやる。ナラクという名のその人を。大型犬は犬の姿に戻るとナラクに一礼をしてから、僕にも一礼をし、そして左脇に下がった。僕は数歩前に出て、ナラクから見下ろされる位置で跪くような姿勢を作ってから、立ち上がり礼をした。

身体中が痛かったが、痛いからこそ礼を欠かせば甘く見られると思い行った礼儀であったが、それのおかげかナラクは、ふふっ、と薄く笑い玉座から降りると、風に吹かれる枯葉のように弱々しく、青紫色のキューブから降り立ち、僕の前にしわがれた装飾品だらけの身を、降ろしたと思うと、相変わらずの隙間風のような声、それをさらに潜めたような息遣いで言葉を紡いだ。

「痛かろう……？」

そして僕の手を握り取ると、枯れ木の枝のようなシワガれた手で、僕の包帯を巻いている、つまり痛い所を、老婆とは思えない力の強さでギュッと握り締めやがった。

「ぐっ……」

下手に声を上げて痛がれば負けだと思った。全身に汗が走り、神経に電流が走るような感覚が回ったが、しかし声は押し殺す。だが老婆は力を込めるのをやめない、このナラクという老婆は負けず嫌

いなのか、と動揺し、やがて気が錯乱してきて、声こそあげなかったが、その場で跪くことにはなった。片膝をついて。

ふざけんな……と怒りたい気持ちに塗れる。だが声を押し殺すことに気を配るに精一杯だ。反論をする余裕などもあるはずは無い。

やがて老婆が腕を解放してみせた。僕は一気に脱力してその拍子に押し殺していた声を上げそうになったが、それも何とか堪える。全身の汗は冷や汗のように変わり、体中を寒くする。

解放された僕は跪いたままナラクを見上げると、彼女は何時の間にか僕が通路で拾い上げた、純金製の、月のタロットカード。あれを僕に見せ付けるようにして持ち、

「勝手に持ち出したというのは、調子に乗っているのではないかい？」

と呪うような言葉を呻く。そして彼女は自分自身の懐に、月のタロットカードを入れた。がめついとはこういうのを言うんだ、と口に出すことを堪えながら立ち上がるが、もう何か言葉を告げる気力も湧かないほど消耗したので、とにかくナラクという老婆が僕に用があるならさっさと告げて欲しいし、用がないならこの館から出させてもらおう、という気持ちになった。

だからしばらく黙っていた。

ナラクも何も言わないでアクセサリーを愛でるようなことをしているので、しばらく翡翠ルームは静まり返ったものだった。

さっきまで青紫色キューブの上にあった玉座が、突如として空間転移でもしたみたいにナラクの居る所に置かれた。そしてナラクは玉座に座る。玉座に枯れ木が植わっている、というような光景にも見える。だがナラクは両眼だけが鋭い。鷹、或いは、鷲、か。目だけは動物としての意志を持っている、そういう老婆だ。

「お前は自由の身でもなければ、ものを楽しむためにこの世界を歩き始めたのではない。私ナラクの力があってこそ、あの同じことを繰り返すだけの無限牢獄から出られたのだということを、努々忘れるな。私の館にあるものを好き勝手に手に取り、さらに懐にしまう

など、なんたることか……信じられぬ愚かさ、考えられぬ浅はかさ……お前はこの世界のことを何も知らぬ、人面瘤があるからこそ利用される価値のある、その程度の人種だということを覚えておきなさい」

「……」

何も答えずにいるのが吉だと思った。というか、それしか思いつかなかった。

そしたら隙間風を洩らすばかりだった老婆の癖に、大声を上げて笑った。はっはっはは、と翡翠ルームに響き渡る大声をあげたのだ。音が部屋中を跳ね回り、やがて反響が終わってから彼女はようやく言った。

「世界のことを、教えてやろう」

一度は懐にしまったタロットカードを取り出して枯れ木の枝で弄ぶようにしながら、彼女はこの世界、について語り出した。僕はとりあえずそれを鵜呑みにすることにして、痛みを堪えながらだが、しっかり、聞いた。

12

そもそもこの空間は、僕のかつていた世の中から言うと、つまり『死後』の世界ということらしく、天国とか地獄だとかいう類に分けられてもおかしくはない世界なのだが、いるのは天使ではなく〈顔の無い天使〉だし、針地獄もなければ蜘蛛の糸が垂れ下がってくることもなさそう。あるのは建物や湖、生前の世界とあまり変わらない。だが、話を聞いていく内に、これまで僕が生きてきた生前の世界と、この死後の世界では、まるで違う代物だとわかってくる。

まずこの世界で独特なこと。それは人類というものが、秩序の象徴と、破壊の象徴、その二つの象徴に挟まれたまま、八十年周期で滅び、そして再生するということを繰り返すサンドウィッチの具のような存在である、という点。破壊と秩序に挟まれて滅びることを余儀なくされる、八十年ごとに再生されるためにあるのが人類、ということらしい。

それはこの世界での根本的鉄則。

ちなみに僕が仮面の人と言っていたあれは、本来〈腑抜けた悪魔〉と呼ばれるらしい。

秩序の象徴は〈腑抜けた悪魔〉。

寡黙な様子で人間文明が混沌に包まれるのを防ごうとする。

破壊の象徴は〈顔の無い天使〉。

悲鳴をあげながら人間文明が秩序に守られるのを防ごうとする。

八十年間〈顔の無い天使〉は人類をめちゃくちゃにすることに普請し、〈腑抜けた悪魔〉は人類が心穏やかに生きていくその手助けをすることにだけ普請する。まったく正反対な性質を持つ〈顔の無い天使〉と〈腑抜けた悪魔〉だが、その両翼は湖が『ウロボロスの満月』に照らされる夜、湖より誕生するのだそうだ。数十匹ずつ湖より誕生したその二対は、その場で血肉の争いをし、どちらか片方が全滅するまで争いは終わらない。

ちなみに八十年周期の内の、前半から後半に行くに伴って〈腑抜けた悪魔〉の誕生数は減り、その逆に〈顔の無い天使〉の誕生数は増える。そのため、八十年周期の前半、四十年程度は、〈顔の無い天使〉は全て湖から誕生する時に、数の多い〈腑抜けた悪魔〉に全滅させられることになる。同じ場所に誕生するから、自然そういう流れになるのだ。

だが四十年を過ぎた辺りから、誕生数の多い少ないが逆転する。〈顔の無い天使〉が数で〈腑抜けた悪魔〉に勝るようになり、誕生時に〈腑抜けた悪魔〉を虐殺するようになる。当然、そうなると〈顔の無い天使〉は死なないので世に放たれることになり、人類を滅ぼすための活動を開始し、建物を壊し、人を殺しはじめる。つまり四十年を越した辺りから、自然世の中の治安が悪くなってくるというわけだ。勿論、一年目から四十年目までの間に数を増やし続けた〈腑抜けた悪魔〉たちもいるし、数が逆転したからといってその全ての誕生した〈腑抜けた悪魔〉が殺されるわけでもないのだから、すぐに治安が最悪になるというわけではない。だが確実に治安が悪くなっていくこともまた事実。〈顔の無い天使〉に怯え、混乱した人々が犯罪を犯すということも増えていく。そして最終的に、八十年目が訪れた時には人類文明は滅びてしまう。勿論、〈顔の無い天使〉によるものだ。全てが荒地となり、山も川も畑もなくなる。残るのは、湖、だけだ。

再生のキッカケとなるのは、まずは湖である。この世界には湖が六つ、ある。そして一つの湖につき九つのｂｉｒｔｈ　ｓｐｏｔというのがあるらしく、そしてそのｂｉｒｔｈ　ｓｐｏｔから〈腑抜けた悪魔〉が誕生する所から世の再生は始まる。

というのは新たな世界の周期が始まるその一年目に、圧倒的な数の〈腑抜けた悪魔〉が誕生し、秩序の力を持ってして圧倒的速度で文明の再生を開始する。そして八十年周期のその最期の時まで生き延びた人々、というか、〈顔の無い天使〉に殺されなかった人類や建物を、再生してみせるのだそうだ。

だから世の秩序は自然と、再興される。再生させられた人類も〈腑抜けた悪魔〉と協力して文明を築き、年々誕生数が増加する〈顔の無い天使〉に殺されないよう、精一杯に世を再興して、文明をより強いものにして〈顔の無い天使〉に抵抗するというわけだ。ただ〈顔の無い天使〉に殺されたり、壊されたりしたものだけは再生することが出来ない。建築物に関わらず、人にかかわらず、とにかく〈顔の無い天使〉の手にかかって殺されたり破壊されたりしたものは、二度とこの世界には再生されない。その行方が何処へ行くのかは、勿論誰にもわからない。つまり僕がいた以前の世界で言う、いわゆる『死』はそれにあたるのだろう。八十年の間、事故で死んでも、老衰で死んでも、病気で死んでも、再生はさせてもらえるから『死』とは言えない。〈顔の無い天使〉によって殺されることそれだけが、想像のつかない終わり『死』を迎えるための条件である。人間は毎日毎日、以前の世界よりやってくるというのに、この世界での人間の数が飽和しないのは、〈顔の無い天使〉によって殺され『死』を迎え、この世界から退場している人間も毎日いるから、だそうだ。

なぜ〈顔の無い天使〉に破壊されたものは、〈腑抜けた悪魔〉に再生させてもらえないのか。その理由はわからないらしく、そもそも〈顔の無い天使〉に人類は近づこうとしないため、その研究は進まないらしい。誰だって『死』にたくはないということだ。〈顔の無い天使〉に人類が抵抗するための兵器というのは発明されているらしいのだが、せいぜい追い払うのが限界なため、いまだ〈顔の無い天使〉の正体は解明されていない。〈腑抜けた悪魔〉にもわからないことだそうだ。

〈腑抜けた悪魔〉は基本的には人類の味方らしい。人類が穏やかに生きるための秩序を作ることに努める存在だ。ただ何故彼らも自らがそうしたいと思うのかは、感覚的なものらしく、理由は言葉にしづらいらしい。ただ秩序を守るのは当然のことだと思っているのだそうだ。

僕は牢獄にいた時〈腑抜けた悪魔〉に斧で殺されそうになったが、彼らは監獄に入れている存在を秩序を乱す者だと捉えているため、基本的には捕えておくか、それが達成されない時は殺してしまうか、という判断に至るのだそうだ。犯罪者の僕が逃げようとしたのを殺そうとしたのは、秩序を守ることを当然のこととする彼らにしてみれば、やらなくちゃいけないことだったのだろう。「嘘つき」呼ばわりまでされた理由は、わからないが。それに、犯罪者、ということは確定的なのだろうか。前の世界に居たときの記憶が無い僕には、思い出せないことだ。思い出さない方が、いいのかもしれないが。

ただ無限牢獄に捕えられている者とは、前の世で犯罪を犯した者であるということは間違いないらしいので、ああやはり僕は犯罪者だったのだろう。何をしたから犯罪者とみなされたのかは、記憶が無いからわからないけど。ただ、嘘つき、と呼ばれたことは関係しているのかもしれないな。無限牢獄に捕えられた者は、毎日同じ一日を過ごす。そして自分が何日そこに捕えられたのか、ということを理解することもできない。ひたすらに一日が始まり、一日が終わる、ということを繰返し、前後は無い。だから僕は何日間あそこで過ごしていたか、とかはわからない。覚えてない。知覚さえできていなかっただろう。ただ一日があって、また一日がある。それが無限に続くから、無限牢獄なのだそうだ。僕は何年、何十年、いや何百年と、あそこで捕えられていた可能性がある。無限牢獄は〈顔の無い天使〉に破壊される対象ではないのだそうだから、何千年とあそこで一日を過ごしていた可能性もあるのではないか。僕の年齢は八十年ごとに若年に再生されるのだそうだし。この世界に以前の世界からやってくる人間というのは、ランダムで肉体年齢が決定されるそうだから、若年として肉体が再生されるのは幸運なことだろう。

どうにもやはり、湖、がもっとも重要な根源たる何かしら、らしい。

湖から何かが誕生、或いは召喚、される現象を”ルーピックキューブ”と呼ぶのだそうだ。六つの湖と九つのｈｏｔ　ｓｐｏｔ。白、

赤、青、黄、オレンジ、緑の六色が一つの湖につき九つあるｈｏｔ　ｓｐｏｔで不規則に蛍光するという様子が、ルーピックキューブに例えられたのだそうだ。確かに、ルーピックキューブは六つの面に六つの色、それが一つの面につき九つに不規則に並んでいる。一つの面がそのまま一つの湖だと考えれば、なるほどルーピックキューブだと言えなくもない。

ｈｏｔ　ｓｐｏｔは湖一つにつき九つある訳だが、『繁栄の三日月』というのに当る日に、三箇所のｈｏｔ　ｓｐｏｔが蛍光するのだそうだ。蛍光した湖の中から現れるのは、以前の世界からの贈り物だと言われている。勿論、以前の世界側からすれば贈ったつもりなどないのだが、現に『繁栄の三日月』に当る日にはｈｏｔ　ｓｐｏｔから何かしらが召喚されてくるものらしい。この世界の人類の繁栄を手助けしてくれるような、何かが。

なるほど、テスタ兄妹が縄張りと言っていたのは、そのｈｏｔ　ｓｐｏｔのことか、と思い当たる。そして昨日はちょうど『繁栄の三日月』に当る日だった、ということだろう。だからネリィ湖のｈｏｔ　ｓｐｏｔが緑色に蛍光し、Ｂａｂｅｌの第四試作型Ｍｏｎが召喚されてきたということだ。あれが繁栄の手助けになるのかは、僕は疑問だが、湖から召喚されたということは手助けになると判断されたということなのだろう。この世界では湖は重要な役割を持っているように見える。何せ、八十年置きに壊されることを前提とする世界で、何回も再興のためのキッカケを生み出してきたのが湖だ。〈顔の無い天使〉と〈腑抜けた悪魔〉を誕生させるのも湖。うーん、そういう湖が六つ。……不思議な世界だ。そもそも八十年置きに終わるというが、それがどのような光景なのかまったく想像がつかない。無限牢獄も八十年置きに滅びていたのだろうか。それとも無限牢獄は例外だろうか。まあ、わからない。僕は、こうやって世界のことを聞かされたが、結局何がわかっただろう。

そうだ大切なことを聞かされていない。

人面瘤とは、何なのか。なぜ僕は口の中から刀を引ッ張り出すこ

とができたのか。
青色のグミ。赤く蛍光していた人面瘤と〈顔の無い天使〉。犯罪者にだけ付く人面瘤。
僕は袖を捲くり、ナラクに尋ねる。
「このことについても、教えてください」
ナラクは笑うことをせずに、こう返事した。
――ならば、私に従う下僕になると、誓うかい？

13

幾つかの情報を引き出して後に首を横に振って見たら、牢獄にぶち込まれた。まったく、災難なことだと思う。あのナラクという老婆は何でも自分の思い通りになると思ったら、大間違いだ！ちょっと自分の不都合があったからって癇癪を起こしやがって……。ああここは寒い。鉄で囲まれた牢獄だ。僕が閉じ込まっていた無限牢獄と比べれば狭くて、玩具も転がっていない、なんか変なにおいのするじめじめした所だ。じめじめした所にいると脳まで湿る気がして、ぐにゃぐにゃする。つまり調子が悪くなって、死にたくなる。これは良くない。

と言ったって牢獄の中なのだ。自由に湿り気のない所にいけるわけじゃない。木枯らしが吹くような乾燥地帯にいけばぐにゃぐにゃも治まるのかもしれないが、僕こと乙は牢獄に居たままでは、甲を彷徨えない。ここにはきっと小鳥さえも訪れないだろう。小鳥のさえずりが聞こえることすらも、怪しい。

食事は朝、昼、夕と、三食運ばれてくる。

案外、おいしい。残り物みたいだけど、元々が黄金の食卓だからね、その残り物というのは結局ご馳走が少しグレートダウンした程度のもので、美味いのは間違いなかった。ただ時折、嫌がらせか何かだろうか、やけに調味料がかかった、激烈に辛いのとか、激烈に苦いのとか、激烈に甘いのとかがあって、それを食べた時だけは最悪な気分になった。ぐにゃぐにゃ、ぐにゃぐにゃ繋がりでとグミのことを思い出した。青色のグミ。あれは〈顔の無い天使が〉人間から追い払われた時に噴出させた蛍光する液体を、凝固させたものらしい。〈顔の無い天使〉には種類があって、その種類数は六。六種類、それぞれ蛍光する液体の色が違う。白、赤、青、黄、オレンジ、緑。その種類によっていくらか違いはあるらしいが、大きな違いは

ないらしい。どの種類の〈顔の無い天使〉も、人を殺し建物を壊す。その習性、目的は、変わらない。僕が人面瘤に食べさせたのは青色のグミ。

赤と青は反目しあう。黄と緑も。白とオレンジも。それぞれが反目し合うから、赤色に蛍光する〈顔の無い天使〉が現れた時には青色の液体を利用しなければならない。人面瘤は〈顔の無い天使〉に同調しようとするので、同調すればするほど赤対赤という対立になるので、〈顔の無い天使〉を追い払う或いは殺すということは難しくなる。だが向こう側はこちらが〈顔の無い天使〉と同調すればするほど、こちらを殺すことを容易にするらしい。だからなるべく反目しあう状態にしなければ、〈顔の無い天使〉に殺されてしまう。人面瘤を持つ人間は常にそういう、属性、を気にしなければならないのだそうだ。

「それにしたって、何だって僕が……」

戦わなければならないのか。

人面瘤がついているからといって。

そんな風に落ち込みながら、人面瘤と睨み合いをしている時に、犬少年がやってきた。

僕はそこでようやく、彼が以前の彼とは別の犬少年だということを知る。

知ったからどうということもない。僕は楽しく彼とお話することも出来ず、暇人となり、牢獄の中で一週間ほど生活した。ただ犬少年に僕の名前を尋ねてみると、

「あなたの名前は、ヒンニョウＤＸガンバレルマーチ・スパンキンデリートマッハ・シューマッハ・イトウ・ホンジャルック・アバハーマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムＤＸ・クソ・ヒンニョウＤＸです」

と、より悪い方向に傾いた珍名になっていると思った。

そんなこともあった一週間の間だが、嬉しいことも一つあった。

僕の牢獄に一つ付いている鉄格子の窓越しに、歌が聞こえて来る

のだ。

綺麗な声で、透き通っているそれだった。何処から響いてくるのかはわからない。ただそれは僕の退屈な一週間の中では、最高に心地良い時間であったのも、また事実だ。

ずっと、歌を聞いていた。

誰のものかはわからない、透明たる声を。

14

嬉しいことはそれだけだった。歌声。でもその歌声のおかげで、こんな牢獄生活も悪くないなと心底から思えた気がする。僕は気が付けば、歌声がいつ聞こえるのだろうと、耳を澄ますばかりの一日を過ごすようになっていた。無限牢獄で身体が慣れているのだろう、待つことは苦痛じゃなかった。嬉しいことがその先に待っているというのなら、猶のことだ。僕は鉄格子を見上げて、ずっと座って、耳を澄ましていた。

一日にニ回、それも十五分程度のことだけど、歌は聞こえて来る。透明な声が風に乗って、この牢獄の一室に届いてくる。それを耳にして、ずっと自分の息さえも潜めて、それを聞く。僕は長い間歌声を聞く事だけを楽しみにして、朝、昼、夕に出される食事の味が、わからなくなるほどだった。

だから二週間が経ち、ようやく牢獄から出された時、僕は嬉しくなったのではなくて、むしろ落ち込んだかもしれない。それほどに聞き惚れる歌声だった。僕はおそらく以前の世でも、あんな綺麗な歌声を耳にしたことは、無かった。

牢獄から出されて招かれた所は、やはり翡翠ルーム。ナラクの待つ所だった。

老婆は以前と変わらないシワガレタ様子のまま、玉座から降り立ち、僕の傷が癒えた様子を見て取って、

「さあ。下僕よ、戦いの時だ。これを受け取れ」

と巾着袋を差し出した。毒林檎を渡されるかのような錯覚を起こしながら、巾着を受け取り中身を覗くと、あったのはグミ。色とりどりの、六色入りである。当然、おやつをくれたということではないだろう、このグミを使って〈顔の無い天使〉を殺せということだ。

巾着の口をきゅッと絞ってから僕は言った。

「下僕になったつもりは……！」

「下僕でないということは、つまりこの館に侵入してきた盗人というのが、お前の正体ということでいいのかな？　招待した客人ではないのだから、盗人ということだ。盗人ということは、この館にはいらない敵ということだよ。敵ということは侵入者ということ。侵入者を見過ごすほど、私は寛容でもなければ優しくもない。そういうものには私刑を与えなくてはならない。〈顔の無い天使〉が誕生する所に身包みを全部剥いだお前を連れて行き、その湖内に放り投げてやる。そうすりゃ侵入者は『死』ぬことになる。正真正銘の退場だ。終わりだ。……下僕なら話は別なのだけれどねぇ…」

「今後とも、よろしくお願いします。僕は下僕でございます」

命を握られているとあっては、こう述べるしかないではないか。

うるっ、と泣きそうになったが堪える。頭を垂れて、丁寧にお辞儀。すると目の前にあの純金製、月のタロットカードが差し出されていた。僕は、受け取って黒スーツの胸ポケットにそれをしまった。

「それでいいんだ。……さて……では君に下僕としての名、を授けよう」

それが契約とでも言うつもりだろうか。僕の名前はヒンニョウＤＸガンバレルマーチ・スパンキンデリートマッハ・シューマッハ・イトウ・ホンジャルック・アバハーマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムＤＸ・クソ・ヒンニョウＤＸではなかったのか。

「その月のタロットカード、その裏面を見てみろ。そこにお前の名が書いてある。努々、それがお前が私の下僕になった証ということを、忘れないように」

「…わかりました」

僕はタロットカードを胸ポケットから取り出し、裏返して、そこに彫られている文字を見た。

『ゲロ野郎』

見なかったことにして、しまって、二度と見ないようにしようと誓う。

「ではゲロ野郎。〈顔の無い天使〉を殺すために、これから頑張ってくれたまえ。おほほ」

僕はナラクに対して怒りを感じるが、やっぱり感じるだけである、言葉では、

「了解しました」

などとヘコヘコして、そういえば何で〈顔の無い天使〉を殺すということをやらなくちゃいけないんだろう、〈腑抜けた悪魔〉に任せればいいのにと考えた。それだけだ。

僕は犬少年に案内されて、館を出た。

久しぶりの外だ、と甲を歩き回れることに感謝しながら僕は庭を通り過ぎていく。庭師の連中は僕が『ゲロ野郎』になったせいか、僕に会釈をしないようになった。僕は最低ランクの下僕か何かなのだろうか。まったく敬意を払われていないのがわかる。まったく、と思いながら僕は大型犬に変身した犬の尻と尻尾を頼りにして、門前に立つ。

そしたら、

「おい」

と急に男性の声が背後から聞こえてきたので、振り返ってみると、そこに男がいた。

誰かなー、と思って良く見るとあのガタイの良い、不親切なＧＵＹだ。〈顔の無い天使〉に捕まっていたお馬鹿なＧＵＹではないか。先日と服装は違って、なんか物々しい銀色の甲冑などを身につけている。見た目は紳士的なのだけれど、格好良いのだけれど、ナサケナイＧＵＹという印象の人だ。

「先日、助けていただき、誠に感謝しています。どうぞ、その恩を御返しする気会を俺に与えていただけないだろうか。これでも俺は元騎士だ。これまで〈顔の無い天使〉と戦い、都市が破壊されるのを防ぐために腕を磨いていた者だ。あなたは〈顔の無い天使〉を討伐するために出発するのだと、庭にいる人から聞いた。どうか、その出陣に、俺も加えてもらえないだろうか。俺は人にされた恩は、

返さねば気がすまない性質なのです」
　意外にも丁寧な挨拶をするのだった。彼は甲冑を鳴らしながら僕がナラクに対してしたように、地面に片膝をついて、ひざまづいてみせた。だいぶ急展開すぎて戸惑うけれど、しかし彼は元騎士だというのが本当ならば、なるほど確かに助けになってくれるだろう。以前〈顔の無い天使〉に捕まっていたのも酔っ払っていたせいだと思えば、まあ、彼の腕が弱いのだとは限らない。誰でも酔っ払ったら実力は発揮できないだろう。それに何だかんだ言って、僕はまだこの世界のことについて何もわかっちゃいない。犬少年が僕に御付きとしていてくれるが、彼のことはどうにも、当てにできない気がする。となれば。
「突然で、驚きました。とりあえず、歩きましょうか」
　と提案して彼と話をしてみることにした。
　そこで、あ、この人を仲間にしたら犬少年の背に乗って駆けずり回るということが出来なくなるのではないか、と不安になった。
　だがそのことを訊ねてみると、彼は「それは問題ありません」と言ってから、口笛を吹いた。
　そしたら羽の生えた真っ黒な馬、ペガサスみたいなのが曇り空を引き裂いて降りてきて、館の門前に着地してから、ヒヒーン、と唸った。完全にファンタジーである。しかし目の前に確かに、黒いペガサス君は、これはＣＧとかじゃなくて現実だ。
「す、すごいですねー」
　と関心したが、やはりその騎士ＧＵＹはどこか陰を帯びているというのだろうか、ひねくれている感じで、
「全然、たいしたことじゃ、ないんですよ」
　と褒めたのに俯くので困る。やり辛い。彼の過去に何かがあったのだろうか。ただ僕がそのことに首を突っ込むのは、良くないことだろう。僕はとりあえず、彼と仲間になるなら、まずは名前を教えてもらおうと、尋ねてみた。すると、
「レイナードと言います」

と普通に格好良い感じの名前が飛び出てきたので、僕は嫉妬した。
風が穏やかに、駆け抜けていく。

15

他者の名に嫉妬しつつも茶色い大型犬の背に乗って”墓標荒野”と呼称されている荒野を駆け抜ける。都市の東側に位置するこの荒野は、この世界においては二番目に大きな荒野とされ、また顔の無い天使の出没確率の高い、危険区域としても認識されているのだとか。

巨大なる都市のその東側周辺を取り囲んでいる広大な荒野であり、東側のさらに遠くに歩を進めたいならば、どうしても墓標荒野は通り過ぎなければならない人類にとっての関門である。〈顔の無い天使〉に殺される危険性をはらみながらも、人類は東側のさらにその先を目指すならば、ここをやり過ごす必要がある。

だが殺されてしまう者が多いから、この場所を人は”墓標荒野”と呼称し、恐れるようになったのだから、準備もなしで、そう簡単に踏み入って良い所ではないのだが…。

廃棄され記憶を消去されたばかりの犬少年は、記憶を消去されたことによって脳内情報がまだ整理整頓されておらず、墓標荒野の危険性を忘れているという失態だったらしい。

仲間になったレイナードは、墓標荒野の危険性を当然のように知っていたが、彼はどうやら、僕が〈顔の無い天使〉など楽勝に倒せる猛者だと勘違いしていたらしく勝手に僕が何とかしてくれるだろうと想像していたらしい。というのも、彼は僕が〈顔の無い天使〉との初戦をした当時、泥酔状態だったがために記憶が混乱していて、実際には僕は〈顔の無い天使〉にぼこすかにやられたというのに、恩を返すなどと言って、勘違いしている。騎士だけど馬鹿だ。

当然僕はこの世界のことなど知らなかったから、”墓標荒野”という危険区域に足を踏み入れたという認識すらなかった。

記憶というのは大切だね。記憶を喪失してなければ、都市で準備をしていただろう。

犬少年の嗅覚と聴覚に任せて〈顔の無い天使〉を探してもらって、結果、いきなり窮地に追い込まれるなどマヌケにも程がある。

僕らはマヌケであった。雑談などして余裕ぶっこいてる場合じゃなかった。

「レイナードって名前、格好良いですねー」

僕は少し上空を飛んでいる銀の鎧を纏った白髪の彼に、話しかける。

彼は礼をする。

「ありがとう。だが、そんなことはないよ」

謙遜した。僕は悔しくなったのでレイナードをもじってみようと閃き、荒野の乾燥した風を浴びながら、悶々と彼の名を脳内でいじくってみる。で、アダ名を思い付いてみた。

「ドナドナ」

「…ん？」

「レイナードを逆から読むとドーナイレ。ちょっと無理矢理で、ドナドナ」

「……」

ドナドナは口を閉じて何か言いたそうな表情で僕を黒ペガサス上から見下ろしていたが、しかし何も返事しないまま前を向いた。彼はドナドナと呼ばれることに抵抗がないのだろうか。哀れな子牛。ドナドナ。ドナドナ。僕はこんなことを思いついた自分がくだらないと自嘲しながらも、ドナドナ、ドナドナ、と脳内で何回も繰り返した。何回も何回も繰り返す内に、黒ペガサスに乗っている彼を本当にドナドナという名前だと認識できそうになってきた。僕はもう、彼はドナドナでいいや、と適当なことを思った。彼が怒りそうなことを、思った。

マヌケである。そんなことを考えている間に、〈顔の無い天使〉に標準をつけられてしまったのだから。

「キャアアアアアアアアアア」

「キャアアアアアアアアアア」

「キャアアアアアアアアアアア」

降臨、してきた。

三重奏（トリオ）してる〈顔の無い天使〉三体の歌声は、ひどく甲高く、不協和音とかいう奴と関係あるだろうか、ひたすらに耳障り。不安にさせられる音の組み合わせが僕らをトライアングルで囲むのだった。何のキッカケも無い。突然、頭上から三体の天使は降臨し、僕らに逃げ場を与えないまま歌声を無理矢理に聞かせる。赤、白、黄。三体はそれぞれのっぺらぼうを点滅させていて……僕の人面瘤が反応し袖の中でいっきに膨張したのがわかる。

僕ら三人は、顔の無い天使に囲まれたのだった。

冷や汗を掻きながら、袖を慎重に捲くり、腰につけているグミの入っている巾着袋に手を掛けるが、全身がフワフワして手の感覚がよく、わからない。どこかおかしな方向に手が行ってしまっている気がする。動悸が激しい。指先が麻痺してる。喉に異物が入り込んでる感じがする。僕は犬少年より降りてから、言った。

「い、犬少年のサ、サトくん。こういう時は、どのグミを食べれば、いいのかな」

喉がイガイガするせいで上手く声を発することができない。我ながらナサケナイ。だが犬少年はもっとナサケナかった。大型犬から人の形に変身すると、犬耳をへこへこさせて、両手で顔を隠して、怯えた様子のままその場でうずくまるのだった。ひぃ、ひやあ、とか呻くのだった。

こ、こいつ、だ、だめだ…。

となると頼りはドナドナだ。いや、レイナード、だ。騎士である彼ならば〈顔の無い天使〉を追い払う手段を知っているに違いない。頼むよ、レイナード。

しかし彼はドナドナだった。

こ、こいつ、だ、だめだ…。

明らかに腰が引けているではないか。何だこの男は、見た目は格好良いのに剣を持ったその構え、めちゃくちゃへっぴり腰やないか。

しかも剣、ちょっと錆びてるし。
最後の頼みは黒ペガサスか、と思って見渡してみたら、既に彼は天高く飛び上がって一匹で逃げていたのであった。このパーティー、終わってる。
なんたることであろうか。
三体の〈顔の無い天使〉が僕ら三人を嘲笑うかのようにして浮かびながらぐるぐるぐるぐると時計回りに回転、不協和音ｖｏｉｃｅのその音量をさらに上げてきて、鼓膜が震える。金縛りにされるのではないかと不安になる。このままでは『死』ぬのは間違いない。…やるしかない。
怯えている場合じゃない。巾着袋を腰からちぎり取って、中を覗く暇などない、手を突っ込んでいくつかの粒を掴み取る。赤、黄、白…赤、黄、白、黄、白……。
僕は人面瘤に赤と、黄と、白のグミを無理矢理に食べさせた。不思議なことに以前とは違って嫌がらず、もぐもぐ、と美味しそうにほおばって、すぐ食べ切ってくれるのを眺めて、何かがひっかかると思った。何か間違っている。何か、おかしい。そして三色のグミを食べたら余計に膨れ上がって、三色に点滅する。赤、黄、白…で、その点滅を眺めてようやく僕は何がおかしいのかに気が付き、冷や汗をどわっと全身に掻いたのである。うすら寒くなって、ああっ！、と声が自然と洩れていた。同じ色のグミを食べさせるのではない、その反発し合う色を食べさせなくてはいけないのだった！赤なら青、緑なら黄、白ならオレンジ、と！その属性の関係を覚えておいて、食べさせるグミは顔の無い天使と反目しあうようにしなければならないから、僕が食べさせるべきグミは青と、緑と、オレンジだったということになるじゃないか！
「ぷげぐぇあ」
初歩的なミスを犯してしまったことに呆然としている僕に、同調を強めたことによって余計にイキリ立った〈顔の無い天使〉からの、殴打。長い腕に十分な遠心力を加えてから、僕のことを殴りつけた

ようだ、僕は思いっきり吹っ飛んで、地面に横たわり土埃に塗れる。強い衝撃を受けたせいで身体が痺れて、立ち上がることがなかなかできない。

「くっ！　我が恩人に、報いる！」

レイナードがそんな言葉を大声で張り上げながら、僕を殴りつけた白の〈顔の無い天使〉にへっぴり腰のまま接近したが、そんな構えで振り下ろす剣に力が入る訳もなく、呆気なく彼の一撃は、当たりはしたが、〈顔の無い天使〉の灰色のローブに傷をつけた程度のことだった。まったく効果がなかったようにしか見えない。

だが〈顔の無い天使〉からすれば灰色のローブに傷を付けられたことは問題であるらしかった。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアア」

耳がジンジンするほどの雄叫びが白い〈顔の無い天使〉より発せられる。わなわな、といった様子で両手の指を動かしてから、〈顔の無い天使〉は『何か』をした。というより、目で捉えられない程の速度で回転して、レイナードに打撃を加えたのだ。…顔にそれが当たっていたら、と僕はまだ震えが止まらないまま、息を呑む。幸い、銀色の甲冑に打撃は当たったことで、彼は吹き飛んで意識を無くしたようではあったが、げほっ、げほっ、とむせている声が赤と黄の〈顔の無い天使〉の奏でる不協和音に混じって聞こえてくるので、息はあるのだとわかる。

白い〈顔の無い天使〉は怒っている様子だが、そのおかげかこちらに近づいてこないし、赤と黄の〈顔の無い天使〉は歌っているばかりだ。

今の内だ、と思い痺れの治まってきた身体をなんとか上半身だけは起こし、巾着袋が何処にあるのかと見渡す。すると、不幸なことに〈顔の無い天使〉三体がいる方角に、巾着袋が転がっている。三体に気付かれないよう慎重に巾着袋を回収しなければ、間違いなく『死』ぬ。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「キャアアアアアアアアアアアア」
「キャアアアアアアアアアアア」
慎重に、慎重に身体を動かして音を鳴らさないように。四つん這いの形でゆっくりと、とにかく気付かれないことを最優先として……。かなり冷や汗を掻いているのが自分でもわかる。バレたらおそらくイキリ立っている白いのに殴られるか潰されるかして、オシマイだ。慎重に……。
こんなに巾着袋が大きく見えたことが、かつてあっただろうか。こんなに巾着袋の形を意識したことがかつてあっただろうか。僕には記憶が無いが、間違いない、こんなことは初めて、だ…。あと少し、あと少し……指が、届いて……手で、……掴んだ！
僕はもう堪えることが出来ず、掴みとったのだから後はバレても構うもんかと、巾着袋を勢い良く握り締めてからは音も気にせず立ち上がり、なるべく時間を稼げるようにと〈顔の無い天使〉のいる方向とは逆方向へと駆ける。走る。……だが、すぐに絶望は訪れた。
ない。
ない。
ない。
さっきよりも随分とひどい衝撃だった。頭に一本の線が走って、それが僕の全気力を奪っていくのを感じる。
さっき殴られて吹き飛ばされた時に、巾着袋の紐は緩んでいた。だからグミは全部、荒野の土くれに落っこちてしまったから、巾着袋の中には、ない。ない、ということ、だ。
いやだ、と思う。ありえねぇ、と思う。
心臓の音がどくどくどくどくどくどく。
背後からの視線を感じる。僕はもう立ち止まってしまった。逃げることなどできるはずもない。逃げたって追いつかれるに決まっている。僕は、ゆっくり、と背後に、振りむいて。
迫ってきていた。
三体の〈顔の無い天使〉が僕に向って、長い両腕を伸ばしながら

近づいてくるのが、スローモーションのようにゆっくりと見える。のっぺらぼうの天使。見れば見るほど、異様。不安をこちらに与えてくる。幽霊のように、すーっと、両手をこちらに伸ばしながら近づいてくる。

不協和音の歌がより大きくなって。悲鳴のような。キャア、キャア……。

こういう歌を耳に残して、死ぬのか。牢獄で耳にしたああいう綺麗な歌声と共に死を迎えたかったけれど。屍と化して骨として墓に埋められて、虫に食われて肉を失う？

絶望をしている僕。だが。だが、と、なった。

僕は救われた。

救ってくれたのは凄まじい横からの銃弾の嵐、だった。

空気を切り裂くだけではあらず、〈顔の無い天使〉三体の灰色のローブをぼろぼろにしてしまうような激しい銃弾の嵐が、僕から見て左側から、ぴゅん、ぴゅん、と次々に飛来し三体を貫通していった。効き目があるのは明らかで、僕が殴られた時のように全身が麻痺しているかのような、痙攣しているかのような動作を〈顔の無い天使〉は突如飛来した無数の弾丸によってさせられている。弾丸にはそれぞれ色があった。青と、緑と、オレンジ…。それらが乱れ撃ちのように混じり合って放たれて、〈顔の無い天使〉三体を、貫く。

やがて銃弾の嵐が終わった時、〈顔の無い天使〉たちは、消えていた。

血を流さず全て灰となって、”墓標荒野”の墓標の、その一部分となったということか。

弾丸が飛来してきた方を僕は見る。おそらくたくさんの人間がいるのだろう、という予想をしながら。

だがそこにいたのは集団ではなく個人、つまり一人だった。

しかも女、で、僕は少し目を見張った。

（露、露出狂……のような……いや…？）

黒のローブをはだけさせて両手で扇形になるように開き、そのロ

ーブの下に着ている薄地の白色の肌着が見えている感じ、ちょっと公共の場でするには薄すぎ、って感じの。頭に三角帽子を被っていてやはりそれも黒色。なんか、魔法使い…？と僕は彼女の全体像から浮べたが、ローブをはだけさせて肌着を露出させてるのが不自然。こんな荒野であんな格好をしている女、がさっきの青、緑、黄、の銃弾の嵐を放ったのだとしたら、たしかにそれは魔法の成せる技だろうか。だが杖を持ってはいない。彼女が両手で掴んでいるのは、自らの黒のローブの裾だけだ。

まぁ、細かいことはとにかく。

九死に、一生、らしい。

……あ、倒れた。

16

都市の名はＨＯＭＥ　ＴＯＷＮだということを、都市の中では割と簡素な設計のされている宿のその主に教えてもらった。主は僕がそれを尋ねた時、案外こういうことを尋ねる人は多いのだろう、平然と答えてくれた。やはりこの世界に新参者として現れる人というのは、頻繁に現れるということだろうか。だからこの世界でもっとも主要の都市のひとつであるこの場所の名を知らぬ人がいても、そこまで驚かれない、ということか。

木造の宿。木彫りが至るところにされているのが特徴的ではある。

「ここもいつ破壊されるか…だけど、破壊されるまでは経営は続けるつもりさ。あんたらも気を付けなよ。……いのちはだいじに、な」

「ガンガンいっちゃだめですかね？」

「いろいろやってみるのも、いいかもしれんが」

「めいれいさせろ、ですかねぇ」

「ははは。やっぱり、いのちがだいじだよ」

「ですよね、ははは」

などと談笑してから、ホットココアを三つ、ミルクを一つ、もらう。ミルクは犬少年のサト用。

「わたしがこんな飲み物で満足すると思われては不愉快ですよー。…どひぃー」

愚痴りながらも犬少年はミルクをぐびぐびと飲む。

（自分のことをわたしとか言うようになってる。前は僕、だったよな。変な語尾をくっつけるようなのは同じだけど）

そんなことを思いながら犬少年のホットミルクを飲んでいる様子を眺めていた。口元だけを犬化させて、舌を長く伸ばしてべろべろ飲んでいる。慣れないと少し違和感のある光景だ、と思いながら犬少年の隣でひもじそうにぐったりとしている黒髪セミロングの魔法使い、その様子を眺める。

今は黒のローブもはだけていない。ボタン止めるの大変だった。

とりあえず僕らは墓標荒野からは引き返して、ＨＯＭＥ　ＴＯＷＮ東口のすぐ側にあるこの宿に避難したわけだが、この女はずっと寝ているんだか意識を失っているんだか、その狭間みたいな様子でぐったりしている。時折声を掛けてみると、……腹が……減っ、と悪夢にうなされるようにして言うので食べさせてあげないと可哀想なのだが、僕ら一行は、金銭不足。金が無い。つうか、宿に泊まる金すら無かったのだが、この宿の主が気前の良い人で助かったというわけだ。部屋を用意してあげることは難しいが飲み物くらいはタダであげるさ、などと言ってホットココアとミルクを用意してくれたというわけだ。全員が見るからに具合の悪そうな様子だったから、そういう待遇をしてくれたのだろう。不協和音やら、殴られたりやら、腹が減ったりやら、怯えるあまりの憔悴やら、で宿に入った時の僕らはひどく惨めな様子に映ったに違いない。

だったら飯も気前よく用意してくれたら最高だよねん、なんて甘えられるはずはない。このＨＯＭＥ　ＴＯＷＮ東口のすぐ側にある宿は、場所のおかげなのかサービスのおかげなのか知らないが、やけに繁盛していて人の出入りが激しく、なんか旅する者って雰囲気の連中が賑やかな感じなので、ハッキリ言ってここの宿、暇じゃないのだ。多忙なのだ。そんな宿だというのに金の無い僕らを追い出しもせず、飲み物を振舞ってくれたとあっては頭が上がらない。この店の繁盛を願わなくてはバチが当たるに違いない。僕は木造の古めの椅子に座ってから、ホットココアに口を付ける前に、この店が破壊されることなく繁盛し続けますようにと、祈る。∞の形となるその祈り。誰から教えてもらった祈りの仕方だろう、でも僕はこの祈り方を知っている。以前の世界の記憶の欠片。

さて祈りのことはともかく。ホットココアを啜ると、芯からほどばしるような温もりが、のぼりあがってきた。何だこの温かさ、と驚愕しながら温かさに何度も口を付ける。口を付ければ付けるほど温かくなる。僕はそのことについてドナドナと語り合う。

「これ、めちゃくちゃ温まるよね」
「あ、俺もそれは思いました」
「ていうか、この宿全体が何か、暖かいというか」
「そうですね。この宿は結構俺も使わせてもらうんですが」
「うん」
「いつも宿の主人と、その奥さん。この二人が中心となってね、墓標荒野とかから憔悴しきって疲れている旅人とか、まあ、あとは料理を食べたくてやってくるお客さんとかもいるんだけど。そういう風に、お客さんはいつも集まってきますね、ここに。良い宿なんですよ」
「いい所にあるしね」
「そうですね。場所も。ただ、やっぱりここにくる人のそのほとんどが求めてるのって、暖かさだと思うんですよね。温もり。ここは緋色のランプのおかげなのか、主さんとかの努力のおかげなのか、人が大勢集まっているからなのか、それはわかりませんけど、とにかく暖かいでしょう」
「そうだね。さっきまで不協和音を聞かされていたってのもあって」
「特に、ってのはありますよね」
「うん、〈顔の無い天使〉と向かい合った後にこの宿は、良い。かなり良い。癒されるね。お金があれば泊まらせてもらいたいくらいなんだけど……」
僕は一旦言葉を切ってから宿内を見渡す。
酒の入った杯をにぎやかに交し合う疲れを癒す者たちの、笑顔が眩しい。大きな笑い声は下品でひたすらに騒がしいが、まったく耳障りにならないのが不思議だ。スキンヘッド、モヒカン、パーマがかった昆布のような髪、直毛、様々な髪型があり、様々な顔がある。にぎやかな中で落ち込んでいる者もいるが、それも風景の一つとして、全く違和感がない。冒険者にとっての憩いの場。この宿はまさにそういう場所なのだろう、とわかる。料理が次々にテーブルに運ばれては、あっという間に手掴みで食べられ、空になっていく。殻

になっていく。それぞれのテーブルにランプが一つ置かれており、天井にもいくつか取り付けられている。全てが緋色で、暖かみのある色遣いだ。

僕はそれらを眺め終わると、これからどうするかと考えることにする。残り少なくなってきたココアをもう一口啜ってから、瞼を閉じて金色の粒子を見つつ、とりあえずこの女、この人があまりに衰弱しているので食べ物を食べさせた方が良いと思う。でもこの宿に頼るのは間違っているのだから、ならば、自然、ナラクのいる館に向う必要が出てくる。金もないし。ただ自分が下僕として扱われるようになったことを考えれば、はたして老婆の館に向っても黄金の食卓に合間見えることになるかどうか。だが牢獄にいる僕にも残飯が渡されたのだから、何とかなるような気もするのだが。

僕はふと思いついて、巾着袋の紐をほどいて中を覗く。

荒野に落ちてしまったグミは半分程度しか回収できなかった。特に荒野の色とだぶるせいでオレンジを多く紛失してしまって後二個だけになっていた。全色合わせて、大体半分くらいは探したけれど見つからなかった。慎重に探せば見つかったかもしれなかったが、次の〈顔の無い天使〉が現れたら終わりだったので、あまり探すことに時間は割けなかった。

ただその代わりに弾丸をいくつか入れてある。〈顔の無い天使〉を貫いた弾丸は、貫いて地面に落ちた後も、力強く蛍光していたので見つけやすかった。グミはかすかにしか蛍光しないが、弾丸はそれぞれ赤、白、黄に蛍光していた。三体を貫いた時には青、緑、オレンジの三色として光っていたような気がするが、落ちていた弾丸の色は赤と白と黄だった。僕はそれが気にかかったので、いくつか拾ってきたのだった。色が変わっていた理由は、この涎を垂らしそうにしながら半気絶状態の魔法使いの女に話を聞くのが一番早いのだろうが……まだ意識は回復していない風だし……いや、意識は戻っているのだが、どこかぼやんとしていて、話のできそうな状態じゃない。あ、しかしホットココアに手をつけてぐびぐび一気飲み

した。
よっぽど喉が渇いていたのだろうか。ホットのココアを一気飲みだなんて。
「ぷはー……」
彼女は空になったコップをテーブルに戻すと、焦点の合っていない紅蓮色の両眼をキョロキョロと動かしてから、またぐったりとした。で、「腹が…腹が…」などと苦しそうに呻くのだった。なんか可愛らしいなと僕は思った。でもこの女わざとやってんじゃないだろうな、とも過ぎったのだが、まあやつれているのは確かだから御飯を食べなければ本当に危険なのかもしれない。
弾丸の話をしてもらうなら食事を取らせる必要があるだろう。何だか弾丸は気にかかる。
犬少年がぐったりとしている彼女の膝辺りに両手を乗せて、顔を覗き込んでいる。わざわざ大型犬の状態になって。ぺろっ、とその頬に舌を出した。
「おい、積極的だな」
とそんなどうでも良いことを言ってから、僕は館に向うために腰を上げた。
「いくのか？」
とドナドナが宿の暖かさが恋しいのだろうか、寂しそうにいうので、
「寒くなった方が、暖かさがより心地よく感じられるだろうさ」
と言ってやった。

17

宿の外に出てみると宿の電光看板（うさぎが酒をぐびぐび飲んでラリってるっぽい絵）がチカチカと目に眩い。うさぎのお腹の部分に酒を表現しているのであろう液体っぽいロゴで、『憩いの竈』と書かれているのが何か、腸っぽく見える。うさぎの腹に文字が書かれているから、そういう錯覚を起こしてしまうのだろう。

この都市に帰ってきた時は夕方で、都市は傾いた陽の陽光に包まれていたが、いまやその情熱的な灯火は息を潜めて、ラメのような煌きの星々が天空を駆けている。今日は雲ひとつ見当たらないが、月は見えない。繁栄の三日月か、ウロボロスの満月か。それとも別の形をしているか。

見えないから、わからなかった。

それにしても寒い夜だ。僕は下僕専用の黒スーツを着用しているが、あと一着、暖かくなるコートでも羽織りたいところだが、そんなのは無い。都合よく向かい側のお店は、お洒落な感じの服屋だが、金ないし。（お店の名前はテリー・ブロッサムと言うみたいだ。ショーウインドウに書かれてる）。

白の照明に塗れながらショーウィンドウの中で服が、物寂しそうに見える。きっとあの服たちもあんな所に納まってるよりは『憩いの竈』でお酒を飲んだりしたいだろう。だが、誰かに買われて着てもらわなきゃ、その願いは叶わないだろうね。

そんなことを考えていると、後ろからドナドナと犬少年が出て来た。犬少年はすでに茶色の大型犬に変身していて、相変わらずぐったりしている黒のローブの彼女を乗せている。進んでそんなことをしてる彼を見て、こいつもしかしてスケベ？と思って表情を窺うが犬の表情はあまりわからない。まあスケベということにしておこう。

ていうか犬少年は僕の使いだというのに何勝手なことをしているのだろうか。

「僕は、徒歩？」

と、くぐもった声付きで尋ねると、へっ、へっ、と舌を出しながらも間違いなく頷いた。首肯した。ふざけんなよ、と小声で言ってみると一瞬だけ悲しそうに地面を眺めるような様子をしてみせて舌を閉じたが、すぐにまたへっ、へっ、とご機嫌そうに舌を出すのだった。こいつ大型犬の状態でも喋れる癖に喋らない。僕は以前こいつが大型犬の状態でも会話したし。こいつ新しくなって記憶が紛失したから、僕がそのことを知っているのを知らないのかもしれない。ていうか。

記憶がないのは、そういえば僕もそうだったな、と。

そんなことを思い出しつつ、ドナドナの黒ペガサスに乗せてもらおうかと視線をそちらにやれば、もう黒ペガサスは飛翔していた。あ、ちくしょ、と思って憎々しく黒ペガサスの影を上空に眺めていたが、顔を下ろしたらドナドナがすぐ脇にいた。

今にも泣いてしまいそうな、悲しそうな顔をしているのだった。

「置いていかれたの？　ペガサスに」

と尋ねると、

「あいつ反抗期なんですよ、多分」

と調子の悪そうな言葉が帰ってきたので、ちょっと同情。僕はドナドナと横並びで適当に会話をしながら、徒歩でナラクの館に向うことにしたのだった。僕の頭の中でドナドナのメロディーが流れそうだったけれども、記憶の調子が良くなくてドナドナのメロディー、思い出せなかった。思い出せなくて、良かったと思う。悲壮感強まるし。

しばらくＨＯＭＥＴＯＷＮの東側メインストリートである”スマイル通り”を歩いた。犬人間たちが頻繁に砂利道を行き交い、またファッションが奇抜な人が大勢いて、それらが夜道を賑やかそうにしながら歩いていく。この通りの街灯は、白色と緋色が交互に設置されておもしろい。

その、白の街灯と、緋の街灯に挟まれた位置に突っ立っている時

に、聞こえてきたものがあって、それが幻聴でないならば、間違いなく歌。牢獄の中で耳にした綺麗な歌が、幻聴ではなくて耳に流れ込んできたのだ。僕は街灯に挟まれているその位置で、立ち止まり、そしてドナドナに、

「悪いけど待っててくれ。ちょっと用事。……館までの道はわからないから、先に行かないでちょっとでいいから待っててくれ！」

とだけ告げてから僕は歌の聞こえてきたその方角に向って、駆け出す。「え、ちょっと」と戸惑うドナドナに申し訳なく思いつつも走る。白と緋をいくつも潜り抜けて。

やがて、スマイル街道の栄えている所から外れて、街灯の等間隔に設置されている頻度は下がり、行き交う人たちの賑やかさも無くなり、街灯とかに足をつけている灰色の梟が、何故かたくさんいるのが目立った。

僕はＨＯＭＥＴＯＷＮの東側地区内でもっとも郊外なのではないか、と思えるひどい静寂に包まれた所に到着した。帰り道はちゃんと意識しているから大丈夫。右右真っ直ぐ右、と辿っていけばドナドナと犬少年の所に戻れるとわかっている。迷ってもスマイル通りへの標識は出ているだろうから、それを利用すれば何とかなるだろう。

…にしても、周囲の廃墟染みた建物を眺めながら、思う。……歌がこんなに遠いところから聞こえて来るはずは、ない。……だけど、歌が間違いなく僕の耳には聞こえていた。幻聴？僕は頭がおかしいのだろうか。

点滅している街灯、蜘蛛の巣の張っている標識。まるでゴーストタウンのように静かで、人気がなく、梟のほー、ほー、という鳴き声が頻繁に聞こえる。歌はもう聞こえない。街灯の点滅していて今にも消えてしまいそうな音は聞こえるのに、歌声はこの通りに着いた途端、途絶えてしまった。蜘蛛の巣の標識に書かれている文字は、かすれていて、上手く読むことが出来ない。この通りの名前が書いてあるのだとはわかるのだが、色彩が剥がれ落ちているせいで読め

ないのだ。
本当に暗い、裏路地のような通りだ。歌は残念ながら聞こえて来る気配もない。さっきまではハッキリと耳に届いていたというのに。急に、消えた。
……帰り道が面倒だ、と思いつつ、通りの暗闇に目を凝らすと、遥か向こう側だが通りのその最果てにはネリィ湖があるのだと気が付いた。といっても広い湖でこの都市の中心に位置しているのがネリィ湖だから、あれが見える所なんていくらでもあるらしいから、見えるからと言って別にどうということもないのだが。おそらくここは位置的には、東側地区のちょうど最西端に当たるのだろう。ネリィ湖は都市の中心にある。ＨＯＭＥＴＯＷＮはネリィ湖を中心として作られているのだ。だからネリィ湖から東側にあるのが東側地区とされるし、ネリィ湖から西側にあれば西側地区とされる。
ナラクの館があるのは東側地区の最北端だから、徒歩で向うのは多少骨が折れる。それを想像するとうんざりするが、幻聴を聞いてしまった自分自身にも幻滅する。幻聴に惑わされて十分間以上走ってしまった。疲れた。ただでさえ今日は牢獄から出してもらった初日で、〈顔の無い天使〉にひどい目に遭わされて……そりゃ疲れるわけだ。疲労が原因かもな、幻聴を聞いたのは。
牢獄で聞いたあの歌声に脳味噌も魅せられてしまった、ということかもしれない。
……とんでもない歌、だ。……脳味噌をおかしくされた。
僕はため息をついてから、梟たちに背を向けて”スマイル通り”へと戻るために歩き出した。
あまり皆を待たせるのもどうかと思ったが、走り出すまでには、時間がかかった。
幻聴なのが、あれだった。
かなしいって奴。

右右真っ直ぐ右、と辿ることで”スマイル通り”に戻っている途中で、さっきのは夢だったのではないか、幻聴のみならず幻覚まで見ていたのではないか、という気分に変わってきて、背筋がゾッと寒くなり、心細くなる。ドナドナでも犬少年でも魔法使いっぽいあの人でも、何ならナラクでも良い。誰にでも言いから会いたいと思った。会話を交わしていないと、背筋の薄ら寒さだけで死に追いやられてしまうようだ。

だから白色と緋色が交互に設置されている賑やかな表通りに出た瞬間、僕はひどくホッとして走っていたのを、歩きに変えてゆったりと落ち着く。うさぎの着ぐるみの、もふもふしているのが道でポケットティッシュを配っている。僕はそれを一つもらってから、そこに書かれている広告（クーポンがついてる）を見て後に、スーツのポケットに。

ドナドナらしき影が見えてきた。緋色に照らされている銀色の甲冑と、白髪。なかなか目立つ風貌の人だから、遠くからでもよく見える。で、彼は暇つぶしのためだろうか、誰かとお話をしているようだ。丁度、僕の目線からではその人は後姿になっているので、誰なのかはわからないのだが、見覚えのある風格だと思った……砂漠……斧……見覚えのある……。

僕は立ち止まった。

（なんでドナドナが仮面の人と仲良くしてるんだよ！）

明らかに談笑している様子だった。ドナドナの顔は雑談をしている者の表情をしている。僕は立ち止まったまま、あの仮面の人に見られたら僕は犯罪者としてまた殺されそうになるのか、と考えるとまた背筋がゾッとしてきた。ぞくぞくする。だが、どうなるかわからない以上、関わらないのが吉なのは間違いない。ならば。

僕はピュー、と口笛を吹いた。以前牢獄に居た時に、犬少年と話しておいた彼を呼ぶための手法だった。ここから聞こえるのか心配だが、彼は犬なのだから耳は良いはず。僕は何度もピュー、ピュー、と口をおちょぼさせて口笛を吹く。ぴゅー、ぴゅー。

すると遠くからでも犬少年の耳がぴくぴく反応しているとわかる。

そして彼はすぐにこちらに気が付いた。さすが犬少年だ。耳が良い彼は、相変わらず魔法使いの人を背に乗せたまま、こちらに駆けてきた。白色と緋色に彼の毛並みが染まる。素早く僕の目の前にまで来てくれて、わん、と吠えるので、

「僕はお前がその状態でも人間の言葉を話せることは知ってるぞ」

と言うと、悲しそうに地面を眺めて落ち込むような素振りをしてから、

「し、知ってたんですか」

と申し訳無さそうに言った。まったく、世間知らずだと馬鹿にするにも程がある。

僕は、これでドナドナも僕が帰ってきたことに気が付いてこっちに来てくれるだろうし、これで僕は背を向けてナラクの館側に歩き続けていけば、自然と仮面の人には背を向けることになるので、仮面の人にはばれることはない。さすがに僕の後姿だけで、しかもちょっと遠い位置からでは、僕だと判断することはできないだろう。それに仮面の人と言っても、要は〈腑抜けた悪魔〉なのであり、〈腑抜けた悪魔〉にもたくさんの〈腑抜けた悪魔〉がいるに違いないのだから、あの仮面の人が僕を牢獄で監視していた仮面の人とは限らない。だったら、僕が犯罪者だということを知らない可能性もある。だったら、僥倖なのだが。

「レイナードさんのこと呼んで来ましょうか。いくんですよね、ナラク様の館にどへー」

「いや、ドナドナはもうこっちに気が付いてるから、勝手にきてくれるよ」

実際にドナドナは犬少年が突如としてこちら側に駆けてきたのを見たから、その流れで僕がいることに気が付いたみたいだ。それで仮面の人もとい〈腑抜けた悪魔〉との談笑を締めくくろうと思ったのか、何かを話していて、そして僕のいる方角に向って一差し指を突き出した。察するに、あの人にずっと待たされてたんですよ、とかそういうことを語っている内に突き出た一差し指であろう。僕は

慌てて向こう側に背を向けた。そしてナラクの館の方角へと、すたすたと歩き出した。背筋めっちゃ寒い。ドナドナよ、お願いだからその〈腑抜けた悪魔〉を僕に近づけないでくれ。

僕は心の中で念じる。

すごく念じたよ。ぐわーっと念じたよ。

その結果。

「おーい。紹介しますよー。この〈腑抜けた悪魔〉さんは俺の親友で…きっと何かあった時は助けになってくれますよー。おーい」

「……！」

歩いてくる気配。何も知らない者が、陽気に背後から声を掛けてきて、そしてこちらに近づいてきているのがわかる。二人分の足音。幻聴？いや、違いますねー。ど、どうしよう逃げるか、いや、しかし……。

と、考えている内にもうすぐ背後に来てしまっていた。逃げることはもう出来ない。逆に怪しまれる。僕はもうにこにこと笑顔作るしかできない。ゆっくりと背後に振り返ると、ドナドナの陽気な顔と、仮面の人の表情のわからない仮面。鉄でできた仮面を付けていて、鉄の板みたいな。工場で熱い火花が顔につくのを妨げるために持つあれ、みたいな。そんな仮面をつけてる〈腑抜けた悪魔〉がめっちゃ僕の目の前。戦慄が走るとはこのことだ。斧、背中に背負ってるし。凶器を持って街を練り歩くとか勘弁して欲しい。刃はさすがに剥き出しではないが、その威圧半端ナイ。

「こちら俺の恩人で、名前は、…えーと、あれ。…まあ、とにかく俺の恩人で素晴らしい人さ。〈顔の無い天使〉と戦ってる。……だから、仲間みたいなもんさ！」

僕はそれは認められない。多分仲間になってすぐ人面瘤があることがバレた辺りで、斧で惨殺されると思う。ていうかこの男はこの世界で随分と長いみたいなのに、人面瘤が犯罪を犯したものにくっ付く代物だと知らないのだろうか。〈腑抜けた悪魔〉は秩序を乱す者を許さないということを知らないのだろうか。おそらく、知って

いるのだろう。知っているが馬鹿なので、何も考えずにこんなことをやっているのではないか。僕は薄々感づいていたのだが、ドナドナは馬鹿だ。間違いなく、こいつは馬鹿、だ。

――なるほどよろしく。

仮面の人が握手を求めてきた。心臓の鼓動爆発寸前何秒前？握手した瞬間僕の内臓は破裂してぐちゃぐちゃになるだろう。ていうか、仮面の人の握手を出すその手付きが、何か違和感あった。きっと僕が犯罪人だと気が付いているに違いない。あ、せめて左手で握手してみたほうがいいか。人面瘤は右手についているのだから。

というわけで、僕はわざと左手を差し出した。親切にも仮面の人は右手を差し出していたのを、わざわざ、左手に変えてくれた。その行き違いから一瞬空気が凍ったような気がしたが、ほんの一瞬のことだ、僕は握手を、臓器が壊れること覚悟で、した。そしてすぐにその握り締め合った手を離して、あとは簡単だ、すたこらさっさである。

「では、また！」

と言って徒歩で向おうとしたがその背中にドナドナの陽気な声がまたもかかる。

「乗り物を貸してくれるそうだよ。ナラクの館を知っていて、乗せてってくれるってさ！」

いい加減にしてくれないだろうか、と叫びたいのを喉にグッと堪えて、しかし徒歩でナラクの館に向うのは確かにもう疲れてるから嫌だ、という心もある。僕は数秒迷ってから、

「乗せてってください」

と仮面の人にお願いした。

そしたら、立派な馬車がきた。

月夜を駆け抜ける空を飛ぶ馬車であった。僕らはそれに乗せてもらって、あっという間、数分間でナラクの館に到着させてもらった。多分臓器の一部が腐敗したなりの損傷は受けた気がするが（特に胃腸）、うん、ありがとう仮面の人って感じ。彼は馬車の中から僕ら

に陽気に手を振ってくれて、夜の闇に紛れて消えていった。
ナラクの館のいたる所にイルミネーション。
季節とか関係なく一年中つけてそうだな、と思える目に眩い豪奢極まりない、アミューズメントパーク顔負けのド派手な装飾が、庭中にされている。その反射光が館の外壁をわずかに明るくしていて、終末の時が描かれている彫刻がうっすらと見える。どこか気味悪ぃ。
「あれ…ここ、どこですか……」
いままで意識が朦朧としていた魔法使いの人が、犬に跨った状態のまま、起きた。

18

「なんなんですかこれはわけがわかりません！　ていうか暗いしこの館不気味だしあなた方は誰ですか！　こ、答えてください、あ、わかった誘拐犯ですね誘拐犯魔法使いを嫌ってる人種は外の街にはたくさんいるとお母さんやお父さんや先生から教わりました！　キャー誘拐犯死ネー！」

荒ぶってる。

犬少年に跨ったままの姿勢で挙動不審にわたわたしながら全力で叫んで後に、彼女は身軽に犬少年から飛び降りると、庭にザッと立ち、月の出ていない夜の下、僕がせっかくボタンを止めたばかりだというのに、それを器用なことに黒のローブの裾を左右に扇形となるよう引っ張ることによって瞬間的に外し、白い薄地の肌着を露出させた。薄らボンヤリとした庭の中でも彼女が肌着と同じくらい白い柔肌をしていることと、あと明らかにひどい混乱をしているのがわかる。やばい、と思った時には彼女の黒のローブの内側、漆黒にあたる部分が、キラッと星の輝きをみせた。僕はその瞬間墓標荒野での夕方のことを思い出し、

「横っ飛び！」

と隣にいるドナドナとあと自分への強調という意味で全力で叫ぶ。そして、僕は左側に跳躍し、ドナドナは右側へと避けたと思われる。そして、僕らが横に広がったことで出来たスペースに容赦のない弾幕。庭師が泣くことになるであろう、くねくねとしている舗道のその敷石が吹っ飛ばされて飛び散って行き、道が曲がっていたのだがあっという間に真っ直ぐになった。舗道が、土埃をもくもくとあげる。

（……な、なんつう凶暴な女だよ…）

土埃のせいで薄目を開けることができない状況でも、凄まじい事が起きたのだと理解できる。やはり彼女は魔法使いだとわかってく

るというものだ。この世界は本当に僕のいた世界での常識を覆してくる。記憶がなくても、魔法使いが普通に存在するのはおかしいとはわかる。しかも……

（弾丸……さっきのように蛍光はしていないが……あの黒のローブの内側から弾が発射されたように見えた…）

敷石吹き飛ばされて土が盛り返したり埋め込まれていたイルミネーションの一部がバラバラに砕けてしまっていたり。その合間に弾丸がいくつも地面に突き刺さったり転がったりなどし、その数は軽く百を超えているように見える。……身震いが自然と起きる……。危うく全身穴だらけにされる所だった。〈顔の無い天使〉以外で死んでも再生させてもらえるとは言うが、痛みとはやはり嫌なものだから、弾丸を全身に浴びる味わいを体験しなくて本当に良かった。

僕がそうやって奇妙な安心をしていると、庭の奥、つまり館内が騒がしくなってきた。あんなにド派手な弾幕を場所も気にせずやってみせたのだから、そりゃ騒ぎにはなる。庭師などは憤慨するであろう。というかナラクも憤慨するであろう。僕はもしかするとまた牢獄生活を送る羽目になるかもしれない、であろう。僕がやったわけではなくてもありえそう、であろう。

まず現れたのは寝間着姿の庭師や執事やメイドたち。揃いも揃って水玉模様つまりドット柄のピンク色パジャマを着ていて正直何か嫌なんだけど、まあそれに関しては今はどうでもいい。

「なんかもっとたくさん来た！　なにこれ組織犯じゃんやだやだやだやだ身代金とかそういうののために誘拐されたんだー！　何でお金なんて持ってないよやめてよー！　バカー！　アホー！」

第二射が躊躇なしに絶叫とシンクロしつつ発射されて弾幕すげー。いや、すげーとか言ってる場合じゃなくどうにか彼女を落ち着かせなければ、なんか誘拐されたとか勝手に勘違いしてるんで困った話だよ。自意識過剰な女だね。女ってみんなそうなの？ふふん、困っちゃろ！

ズバババババババババ。

…余裕ぶっこいてる場合ではなかった。調子ぶっこいてすみません。

庭はどんどん荒れていき、イルミネーションも金の樹も果物の樹も、その多くが弾丸にぶち抜かれて駄目になっていく。壊されていく。焦げ枯れていく。ああなんたる、庭師や執事にとったらなんたる悲劇であろうか。日々手入れを入れてきた自らの命の証明とも言えるような存在でもあっただろうに、運が悪いという理由で三割くらいは焦げ枯れていってる。こんだけ広い庭の中の三割だから、それだけでもすごい量だよ。土埃もすごい。目頭が熱くなるね、二重の意味で。

僕は懐に閉まってある巾着袋を取り出して中身をごっそり掴み取って適当に人面瘤に食べさせた。もがもが嫌がってるのが見なくてもわかるが、無理矢理食べさせた。そしてあの感覚が来た。『腹の中で何かが造られた』せりあがって来る血の気配。体が弓なりに硬直し、腹の中からせりあがって来るものを、引っ張り出す！が、何故か刀じゃなくて小刀だった。小さかった。何で？一応緑の蛍光を纏ってはいるから属性は付いてるようだけど、なんですかこれは。小刀ちいさっ。戸惑っている間に、すぽんっ、と小気味良い、風呂の栓が抜けるような音が人面瘤のあたりから鳴ったので何だと思い視線を向けると、血がついた弾丸が人面瘤の口元から吐き出されていた。ああなるほど僕はまたミスをした、グミではなくてさっき拾っておいた蛍光する緑の弾丸を僕は人面瘤に食べさせてしまったということか、と理解。凝固されてた液体の量が足りないから小刀になってしまったのだろうか？

まあとにかく彼女を落ち着かせなくてはならない。彼女は肌着を見せる露出状態のまま第三射を放つつもりだ。一応下僕としてはこれ以上館を壊させる訳にもいかない。いや、下僕根性が座ってしまったということではなくて、ナラクにぶち切れられてひどい目に遭わされるのはごめんだからだ。もう遅いかもしれないけど。

僕は隅っこの茂みに隠していた身を立ち上げて、彼女に向って両

手を振った。
「お、おい落ち着っくんだわぁ！」
びびってしまっていたらしい。声が上ずって変なことになった。でもそのおかげでおそらく通りやすい声になったのだろう、いきり立っていた彼女は裾を広げたまま、僕の方に顔を向けた。くりっとした紅蓮色の両眼が印象深い。今は混乱に染まっているらしきその瞳に射られるとちょっと怖いが、まあちょっと怖いと言った程度である。僕は説得をするために口を開こうとする。だがその前に、
「武器とか持って脅すつもりですか最悪だもう最悪ほんとうに最悪」
「うわちょ」
彼女の絶叫と共に第三射が僕目掛けて発射されると思い、僕は、さっ、と地面にうつ伏せになった。し、しまった小刀が逆効果になってしまった。そ、そうか小刀なんて山賊っぽいから、余計に誘拐らしさを演出してしまっているということか。う、うっかり……作戦失敗だ。ていうかうつ伏せになったからと言って弾丸を避けれるとは限らない。ていうか、第一射も第二射も、発射された後には庭は土ごと舗道がえぐれていた。……ということは、僕はうつ伏せになっているが……これは大丈夫どころか、安心どころか、超最悪な選択をしてしまったということではないのでしょうか…？
（死ぬ……！）
そう悟るが今顔を上げたらそれこそ弾丸直撃コースだ。終わった死んだ痛いだろうなぁ苦しいだろうなぁ再生できるといいなぁ早く再生してもらいたなぁ…などと考えていたのだが、あれおかしなことに弾丸が発射されてこない。死なない。何で死なないのだろうか？
不思議に思いつつ顔を上げた僕が見たのは、魔法使いの彼女が気を失った状態で一人の男に前倒れとなってよりかかっている状態、つまりまたも気絶してしまったということだが、自然に気絶したのではなくその彼女がもたれかかっている男の手によって気絶させられたことは明白だった。そして暗闇の中でもイルミネーションが全て壊れたわけではないから、その人物が誰かなんて一目瞭然で、そ

れは銀色の甲冑で白髪でがたいが良いということだから、つまりドナドナであった。レイナードであった。

何がどうしてへっぴり腰のドナドナが、格好良いレイナードになっているのか。それがよくわからないのだが、とにかくおかげで場は落ち着いた。執事や庭師たちは庭をぼろぼろにされたことを嘆きながらも、もう瓦礫の撤去作業などを行っていて仕事が早い。ピンク色のパジャマが汚れるんじゃねえのと心配になるが、まあ気にしないらしい。

やがて館から静かな怒りを心の中で溜め込んでいますみたいな雰囲気のナラクが出てきて、三割が廃れ落ちた庭を一瞥。綺麗な執事とミイラな執事を呼び出して何事かを叱責した後に、何が起こったのかを聞き取ったらしく、魔法使いの彼女が気絶している方へと顔を向けた。そして、ぬらっ、ぬらっ、と悪霊のような気味悪いオーラを放ちながら彼女へと接近すると、その顔を覗き込んだ。もしかして知り合いってこともあるのかな、と僕はその様子を見ながら想像したが、

「ふんっ。どこの回し者だねこいつ。まったくひどい話だね、これは私刑かな。朝日が昇り上がると共に墓標荒野に貼り付けにしてほっぽり出して、〈顔の無い天使〉の餌食にしてしまおうかな」

などと言っているので僕はさすがに、可哀想じゃん、お前が私刑される気持ちになってみてもいいんじゃないのかね、という気持ちになって老婆の側へと近づいて何か言ってやろうと思ったら、その前に何か知らんがレイナードがナラクに跪いた。そしてこう言った。

「これは、私の妻でありますので、どうかご勘弁をー！」

すごく良く響く声で大嘘を付きやがった。つうか急に気合入ってるけどどうしたのドナドナ君は、って感じ。異様な気合の入った絶叫であった。

老婆はしばしの間そのあまりの気合に言葉を失っていたし表情も固まっていたが、やがて気を取り戻すと、

「つうかお前だれ」

と、結局何だか話がごちゃごちゃになって収集がつかなくなりそうな流れになったのだった。

やっぱりドナドナは馬鹿だと思う。

何時の間にか僕の隣で後ろ足で首回りを掻き毟っている大型犬状態の、犬少年。僕は彼に向って「なあどう思うよあれ」と言ってドナドナの方へと指を出すと、大型犬の彼は舌を出したまま、うなずくようなことをして、わん、と僕の意見を肯定するような吠えを発した。

「やっぱりそう思うよな」

と僕もうなずき返した。

19

結局、僕も魔法使いの彼女に関してはよく事情もわからぬし、ドナドナがどうせばれるような嘘を付いて事情をややこしくしてしまったこともあって、ナラクは僕らの意味わからなさに憤慨して牢獄を使用した。また牢獄かよっ、好い加減にしてくれと叫びたい衝動に駆られるがそれも控えなくてはならないのでイライラして涙が流出する内に涙も枯れて最後には屍のようになって廃人として無言になる、という悲劇を迎えてもおかしくないが、大丈夫だった。というか正直、ずっと牢獄の中にいたいと思うようになってくる程、牢獄生活が気に入ってしまったために、全然イライラしなくなってきた。何故イライラしなかったのか。その理由は自分でもある程度わかっている。

まず、もう〈顔の無い天使〉と戦いたくない、正直。

いや普通に殴られて痛かったのが、時間を置くにつれてトラウマ化しつつあるというのかな、とにかくもう〈顔の無い天使〉の顔も見たくない。いや、顔無いんだけどね。人面瘤だって右腕に付いてるのは不気味だけど、特に体に悪い影響を及ぼさない気がするし。なんつうのかな、赤ん坊に見えてきたよねもはや。可愛らしく見えてきたよねもはや。だから人面瘤なんて気にならないし、そもそも老婆に従えているからって人面瘤を取り払ってもらえるという話ではなかった気がする。なんか僕は特にメリットもないのに、下僕になったような気がする。そういえば。

僕は一体何をやっていたというのだろう。グミなど渡されて口から刀を出して血反吐を吐き、天使にぶん殴られて、さっきなんて露出狂の女に撃たれて穴だらけにされる所だった。この世界は一体何なんだ。あり得ない化け物染みたのがたくさん。もしかすると無限牢獄で時を忘れ永遠の孤独を味わっていた方がマシだったかもしれない。はぁ、ため息が出ちゃうわー。牢獄から出たらまた戦うこと

になるんでしょ？それってめっちゃ危険じゃん。しんどいじゃん。ため息出ちゃうわー。

僕はぐれた気持ちになったままだが、何の危険もないこの牢獄の安全ぶり平和ぶりに居心地の良さを覚えてきたのは事実だった。危険な方向だとはわかる。安全や平和を求めて一つの場所に止まるのは人間としてはひどい状態だと僕は知っている。人とは変化しなければならない動物だと知識として知っている。変化しなければ、いずれ息が詰まって窒息し、死ぬから。『生きたまま死んでいる状態ほど辛いことはないよ』今、記憶の閃光、みたいなのが走った。誰の言葉だ？まあ以前の世界でどっかの誰かが言った言葉なのだろう。僕は今は記憶のことなどどうでもいい。むしろ重要なのは何時までこの牢獄にいることが出来るのか、だ。できるだけ長くここにいたい。〈顔の無い天使〉と戦いたくない。……だいぶ、疲れているのかもしれない。

そもそも環境の急激な変化は人間に大きな負担を与えるものだ。帰り道もわからぬ見知らぬ土地を彷徨ったら不安になって疲れる。知らない人と一日一緒にいろと言われたら多分、疲れる。急に世界が変わって今まで乙として孤独だったのに、甲を歩き回ることになったら、そりゃ、疲れる。…今まで拒否してこなかったのが不思議なくらいだ。あとどれくらい、この牢獄にいれるだろうか…。

またも、ため息が出た。なさけないことだ。悔しいことだ。しかし危ないもんは危ないし、嫌だと感じることは嫌だと感じる。それが形となってため息になるのは、素直に感情を表現しているということだ。素直に感情を表現するということは溜め込まないということだ。だからストレスを上手く発散できるということだ。今の内にストレスは発散しておいた方が、いずれ来る事になるであろう〈顔の無い天使〉との対峙の時にも、立ち向かうことができるかもしれない。まあ、今はまったくそれが出来る気がしないんだけど……。あののっぺらぼうを、想像するだけで、駄目になる。気分が悪くなる。つまりネガティブになる。それはよくない。

僕は時折、向かい側の牢獄に投獄されているドナドナに声を掛けて暇を潰したりしつつ、時を過ごした。

一度、なんで妻なんて嘘をついたの年齢的に少し無理があったよ、とドナドナに言った。少し尖った言い方をしてしまって悪かったが、彼は答えてくれた。

「あれは、不覚だったんだ」

不覚？よく意味がわからないので聞くと、寂しげな哀愁を漂わせながら、彼は答えてくれる。

「娘がいた。彼女はその娘に、似ていた。……助けたいと思った。だが娘ということには何か抵抗があって、で、戸惑って、出た言葉が妻だった。自分でも思い出すと笑えるけどね。要は、テンパっておかしなことを言ってしまったのさ。……だから、不覚、だったんだ」

ドナドナドナドナ。子牛が僕の頭の中で軽トラックに乗せられてどこかへ連れて行かれていく。どうやら彼の過去にまつわる、深く入り込んで良いものかわからぬ話を尋ねてしまったらしい。申し訳ないことをしたかもしれない。だが、興味も、湧く。

「今、娘さんは？　奥さんとかも」

「いや」

「……」

ドナドナは首を横に振って、目を瞑ると俯いた。それが答えのようなものだった。

何があったのかは聞かなければわからない。ただ、それを躊躇なしに聞くほどの厚かましさは持っていないため、

「そういえば、あの子を止めた時のドナドナの動き、すごく速くて驚きました。あれは、あれですね、あれのおかげで庭の損害は食い止められたし、あの子も気絶するだけで済みましたよ。もしあなたが彼女に一撃を入れなかったら、あの子はナラクの手で殺されていたかもしれなかった。あなたは彼女の命を救ったようなもんですね」

と急くようにして彼の偉業を褒め称えることで、深淵に向うよう

な流れを断ち切って明るい気分をもたらそうと反らした。
しかし、ドナドナは何か思い出したくないことを思い出してしまったらしかった。
「う、ううう、ううう」
苦しそうに頭を抱えて、彼は寝転がった体勢になると、そのまま起き上がらなくなった。
だから会話はそこで終わった。
僕は自らの浅はかさを感じ取りながら、しかしもう取り繕うことはできないなとはわかったから、目を閉じて、寝転がるまではいかないが、壁に身を預けて脱力した。
顔を上げてから目を開くと、蜘蛛の巣が見える。蜘蛛が粘着の糸に虫を捕えている。
僕はあの捕えられた虫のようなものだろうか、と想像してから黒スーツの袖を捲くり人面瘤を眺めた。生まれたての赤ん坊のような顔をしたまま、穏やかにスーハー、と呼吸しているのがやはり不気味ではあるが、嫌いではなくなっている。
しばらく、目線を動かさなかった。人面瘤の呼吸をスー、ハー、と静かにしているのを眺めていたのだが。
〈顔の無い天使〉に怯え、牢獄の外に出て行くことを嫌だと感じる心が、静まった時というのがあった。唯一その時間だけ、心は休まり一時的に勇敢にさえなれた。
それが綺麗な歌の聞こえる時だったということだ。三日間牢獄に閉じ込められていたが聞こえたのは一度だけ。だがその一度だけこそが、凝縮された時間ではあった。幸福の凝縮。勇敢を蓄えさせてくれる、生の象徴みたいなぎゅうと詰まった。
僕はそのぎゅうぎゅうに詰まったのを浴びた日に牢獄から出してもらったから、実にポジティブな心持ちで犬少年の尻と尻尾にくっ付いてナラクのいる翡翠ルームに向かうことが出来たというわけだ。

20

牢獄の中で考えていたことがある。

どうすれば、ナラクの下僕をやめることができるのか、ということ。

少なくともそう簡単じゃない。何せ僕には弱みがある。無限牢獄から引っ張り出してもらえた恩、という弱みだ。ナラクは僕が下僕になることを拒否した時には、この弱みを引っ張り出してくると想像が簡単につく。となるとやはり、そう下僕をやめるのは簡単じゃない。

だが永久に下僕では辛い。つまりどこかで線引きをさせる必要があるのだ。ある程度下僕として活躍したならば僕の弱みは条件として成立しなくなる、というか僕の活躍という強みがその弱みに対抗できるようになれば、僕は下僕という縛りから解放されるはず。

となるとやはり難しい。〈顔の無い天使〉と戦うことを老婆はお望みなのだから、どうにしろあれとの対峙はやり過ごす事の出来ない関門ということだ。また口から刀は引っ張り出さなければならない。あの身体が痙攣する感じはキモチワルイ。嫌だなー。だが嫌と言っていたらおそらく下僕のままだし、下僕ということは無理難題をナラクから押し付けられても断れなくなる可能性が高まるということだ。相手にとって有利で、僕にとって不利な状況が、濃厚に続いていくということだ。そうなれば辛いのは僕だ。理不尽な辛さは本当に辛いことだ。だから僕は、活躍しなければならない。老婆を驚かせ退かせるような活躍を、しなければならない。それこそが活路ではないのか。それこそが希望ではないのか。ならば僕は、やはりそれを目指すべきではないのか！活路活躍希望活路活躍希望活路活躍希望活路活躍希望活路活躍希望活路活躍希望！……うあー。

通路を歩いている途中は、そんなことを考えていた。念じていた。念じている間は犬少年の尻と尻尾をずっと見つめていたわけだが、

犬少年は勿論そんなことは知らなかっただろう。犬少年の尻尾はやけに、くるん、としていて面白い。

そうこうしている内に、翡翠ルームに辿り着くと、ミイラな執事と綺麗な執事がナラクの両隣に位置し、そしてそれとは別に三人の人間が見受けられた。つまり計六人が、その翡翠ルームにて集まっていた。

そしてその別の人間とは、一人は黒のローブ、魔法使いの露出狂女である。

あとの二人は見覚えの無い人物であったが、女性だとはわかる。その二人の女性は片方はナラクと同じ程度の見た目と思わしき老婆で、風貌は占い師といった印象で妖しい。もう一人はその付き人と思わしき雰囲気を放っている、丁寧語が上手そうな女執事と言った所だろうか。その二人が部屋内の入り口から見て右側に位置している。左側には魔法使いの露出狂女。

そして中央にはナラク。浮かんでいる青紫色のキューブに玉座を置いて、全員を見下ろすような高い所に位置している。相変わらず偉そう。

だから、今しがた犬少年に連れられた僕とドナドナが入り口から入ってすぐの所に位置したことによって、その計九人の位置を線で結べば丁度ひし形の形になることだろう。

僕は困窮する。見知らぬ人間がいるというのは想像していなかった。しかも占い師という雰囲気の老婆はナラクと物腰が似ていて一筋縄ではいかない空気を醸し出している。さらには左側にいる魔法使いの露出狂女は、自由に動けないよう拘束されている状態で哀れだ。いかつい拘束具。彼女を辱めているような、不恰好となる拘束。どういうつもりなのだろうか。

そしてナラクはいつも通り枯れ木のような自身を装飾品で飾り付けて、上から僕らを見下ろしている。そして僕らは戸惑うことによって何も言えない気分に追いやられて、早速圧されている感覚だ。

様子見と行こう。

誰かが話すのを待つことにする。圧されている状態ではどうせ駄目だ。

そういう訳で僕の選択は沈黙。だんまりをすることだったが、右隣に突っ立っているドナドナが怒鳴るようにして声を発したのは沈黙の数秒後のことだ。

「あのように尻の痛くなる場所に三日も閉じ込めて！　……イボが出来た！」

僕はそれは可哀想だなとは思うが、何もこんなタイミングで言わなくても良いではないかと感じる。僕はナラクが生意気な口を叩かれたことで不機嫌になるのではないかと不安になった。

しかし大丈夫だった。なんとドナドナは鹿十された。

僕をかつて鹿十したしっぺ返しが彼に訪れたのかもしれない。まあ、僕としても下手にナラクの怒りを買うよりかは、鹿十してもらった方が平和で好ましいので、良かった良かった。

ドナドナは鹿十されて戸惑ったらしく、目を見開いて口をぎゅっと結び体を硬直させている、みたいな奇妙な表情。へっぴり腰。ドナドナらしい弱気な姿勢と化して、口を閉じた。呆気ないものであった。

こうして場は沈黙した。何かが稼動するようなゴォォ、というくぐもった音が鳴っていて、一体これは何の音だろうな、と青紫色のキューブを眺めながら思った。翡翠ルームは相変わらず翡翠色だらけで幻想的。

約一分後。

「はんむ……」

声を発したのは僕らから見て右側の位置にいる、占い師という風貌に見える老婆。小さなキューブの一つに腰を下ろしていたが、立ち上がる。ナラクは枯れ木だが、この占い師老婆は一言で言ってしまうと柏餅というイメージ。ぶくぶくしてるのに葉が纏いついてるみたいな。丸い老婆である。

占い師は僕のいる方を一瞥してから、憎々しげに舌打ちをしやが

った。ちゃっ、という露骨に口の中で鳴らした音が聞こえる。で、ナラクに顔を向けてから言った言葉。

「頼りがいが無さそうに見える。本当にあれに、人面瘤を任せなければならないのか？」

頼りがいがなさそうとは僕に対する評だろう。イキナリ悪口とは、言ってくれる。何かしらの反論を述べたい所ではあったが、ナラクが「頼りなさそうという点では同意するが」と言葉を継いだことによって、二人の会話となってしまった。

僕らは会話を黙って耳にする他ない。

「反対だねぇまったくもって。どういった人間なのかは知らないが、男なんてのは基本的には大概が甘えるばかりの産業廃棄物。…自分で甘えていると気が付くことすらもできない、自覚というのが下手糞な分類に一大事を任せるなどと……」

「まあ、人によるだろう。少なくとも刀を引っ張り出すことはできた。素質はあるのだろうさ」

「だが本性というものはわからない。どんな邪悪をその身に潜めているものか！　アア汚らわしい性を持ったこの連中さ。ならばやはり人面瘤などという手法を選択することは、過ちを導くぞ」

「だがこの男を信用さえすれば、成功の確率は高い。この世界にきてすぐに仲間を作っているようでもあるし、もしやすると人望のある者かもしれん。ならば、信用するに値するかもしれぬ…」

占い師の老婆は、ナラクのその言葉を聞いた途端にアハハハハと大きく笑った。

「…信用？　信用などといった？」

占い師のバアさんの琴線に触れたらしく、ヒステリックな調子で身振り手振りジェスチャー。

ナラクはそれを上から冷静に見下ろしている。

そこで何かナラクが彼女を煽るような言葉を放てば、占い師バアさんは暴発していたかもしれない。だがナラクがあまりに冷静な、冷厳と言っても良いほどの眼付き…そう鷹、鷲。その眼が占い師バ

アさんの感情の激怒を抑え込んだように見える。
　占い師バアさんは左側にいる、拘束されている魔法使いの露出狂女、その目の前にまで歩いていくと彼女の耳元に何かを囁いた。何を囁いたのかは僕らの位置では、遠くて聞こえない。
　が、どちらも幸せそうな顔はしていないので、仲の良くなることを囁いた訳ではないのだろう。
　魔法使いの露出狂は、その紅蓮の両眼で占い師を睨みつけていた。互いに睨みあう女。
　先に眼を反らしたのは、占い師の老婆の側だった。
「この魔法使いは北西の果てにあるノーザンス湖、その都市からやってきたのか？　珍しいな、火あぶりの刑にでもして燃やし、その燃える時に発される異臭を楽しむ。そんな趣味に目覚めて、こんな拘束をしているのかい」
　意味不明なことを言っているなと僕は思った。ジョークか何かであろうか。ナラクはウケたらしく相変わらずの隙間風みたいな感じで、ススーと笑ってから、
「お前ってマジで馬鹿だよね」
　と言った。で、続ける。
「そんなグロテスクな趣味に走るわけないじゃん。そんな女私だって嫌だけどさぁ、そんなグロテスクな行為をすることで鬱憤を晴らすとか、そんなことしないよ。そんな、自分自身が恥ずかしくなって打ちのめされて鬱屈気味になるくらいだったら、うまくその娘を利用する方策を考えて、手取り足取りとしてやる手法を考えるっつーの。あのねえ、世の中ってもっと複雑でしょうが。馬鹿と利口が二極化してると言っても良いよ。馬鹿に辟易させられて、利口に利用される。これが一番損だと思わないかい。私がここでグロテスクに走ったら、それこそ阿呆だよマヌケだよ」
　ナラクは冷静な口調で長々と語っている。静かな怒りというものが滾っているように見えた。
　僕は話し長ぇよ、ということと、娘を利用するって宣言したら娘

の方も警戒しちゃうじゃん、ということを思った。それともう娘を下僕にする為の材料をナラクは揃えているんだろうか、とも感じる。下僕なんて、なっちゃいけないものだ本来は。負けて負けて負け続けて至る、最後の砦みたいなものだ。しかもその砦は紙で出来ていて、下僕の自分自身だけが見張り台に立たされて、砦の数箇所に導火線が置かれていて、支配者から何時でも背後から火を点けられてもおかしくないみたいな。

でも自らが生きる手段を持たないから、下僕になるしかない。なんという不幸であろうか。なんたる理不尽であろうか。いや、理不尽ではないかもしれない。

ただ不平等なだけだ。だが世の中が平等なんて嘘は誰が言った？勝ちを取らないままやり過ごすという選択は一定の負けを認めてもいる。だから不平等は、実は理に叶っている。勝利を掴もうとした人間は、ある一定の勝利を手にできる。それでも一定だろうけど。

そしてそんなことを考えている僕自身は、この世界のことを何も知らないから、敗北し、下僕。以前の世界ではどうだっただろうか。

そこでも下僕だっただろうか。まぁ、誰かしらの下僕ではあっただろうね。一人称が僕だし。

そんなことを考えている間にも、ナラクと占い師のババァは色々話し合っていた。

この二人、ライバル、みたいな関係っぽい。

「お前は相変わらず単純だ」

「貴様は相変わらず他者を利用するばかりだな」

こんな牽制みたいな言葉ばかり掛け合って、一向に会話がもぞもぞしていて、次の展開に進まない。僕は隣にいるドナドナに小声で、「楽しい？」と尋ねた。ドナドナは「つまらん」と答えた。だよねえ、と僕はうなずきを返す。

でもまあ、僕はそんな連中の下僕に過ぎないんだけど。ぬふー。

あ、犬少年の語尾がちょっとうつってきた。嫌だなあ間抜けっぽいじゃん。

で、まあ僕もドナドナも犬少年も左側にいる魔法使いの露出狂女も、占い師の側近っぽい女も、綺麗な執事もミイラの執事も、みんな彼女らに文句を言わず、ただ時の過ぎていくのを待っている。なぜなら彼女らに太刀打ちできないと諦めているからであって、厄介だと理解しているからだが…話している二人は自らが厄介だと思われていると知ったらショックは受けるかもしれないが、その態度を改めようとはしないだろう。人間とは誰しも、意地っ張りで頑固みたいな性質を持っているのはどの世界だって変わらない。見栄張りなこともね。だから勝ち負けを気にするんだもんね、僕みたいに。うほーん。

僕は捻くれるばかりで、

『自らが下僕にならないための交渉』

をすることもなくぼーっとしていた。相変わらずくぐもったゴォォという音のする翡翠ルーム。それがさらに眠気を誘う。老婆二人の話が長びいていて待ってるの気だるいなー、みたいな感じにされる。

その途中、脇に控えていたミイラな執事が、隣にいた綺麗な執事に何かしらの耳打ちをして、互いにうなずき合うのが見えた。ミイラ執事は小刻みに数回首肯してから、翡翠ルームの床を歩きカツカツ、と音を鳴らしてナラクに近づいていく。そして恐々とした様子も見せず、淡々とタイミングを窺っているかと思いきや、会話の合間を縫ってスッと、ナラクに耳打ち。そのタイミングがあまりに完璧だったので、老婆二人は盛り上がっていた長話を邪魔されたというのに怒りはせず、不機嫌にもならなかったようだ。ナラクはミイラ執事に何かを言われたことで納得したように頷いているじゃないか。老婆の機嫌を全く損ねなかった。ミイラな執事は熟練だね。素晴らしい。

さて僕は感心している訳だが、それはすなわち油断をしているということ。だから長話を止めたナラクが首肯を終えてから発した言葉に、戸惑わされたのだ。

「では、人面瘤を持った下僕よ。己の力を証明する機会を与えてやろうか」

証明？機会？

僕が期待していたことを老婆の方から口にした？

それは単純に受け入れていいことではない。僕から提案して老婆に考えさせるなら話は別だが、老婆側から提案するというのは……。だが、僕は拒んでいい立場でもないのも事実。老婆からの提案は全て受け入れるのが下僕というものの劣悪たる環境だ。

「どういうこと、でしょう」

尋ねると、ナラクは萎れている身体の背筋を伸ばすような仕草をしてから、玉座に片肘を付き、ふぅん、と何とも気だるそうなため息を付いた。その後に何かを言うのかと思ったが、案外何も言わず、ゴォォ、という翡翠ルームの嘶きが耳障りに感じられた。

……パチン。

音。それは、綺麗な執事が指ぱっちんをした音、だ。それが突如響き渡り、何かが起こるであろうことを僕らに予感させる。隣でドナドナが身構えてきているのがわかる。僕も周囲を警戒しておく。僕らにとっての不穏な気配が漂い出したのは間違いなかった。何処かしらからの殺意が、僕、に向けられている。そのせいか、見える翡翠ルームの景色が黒の濃霧に抱きかかえられているような…そんな風に感知できる。綺麗な執事による指ぱっちんから沈黙は数秒間、持続し、誰がその静寂を破るのかと思われたが……やがて生じた。変化は、僕から見て左側、その位置より生じたのだ。

左側にあるもの。それは、露出狂女。そしてそれに取り付けられていた物々しかった彼女を辱める拘束具。それが、腐敗色の粒子、そのような姿形へと転じ始めた。固体から気体へ。拘束具はもはや彼女を拘束しなくなったが、その替わりに彼女の身辺に纏い付く、匂いのようになって、漂うオーラとも呼べそうだし、禍々しい悪意だとも呼べた。

一体何が起きたのかと考えれば、綺麗な執事が指パッチンをした

ことから言って、ナラク側の作為であることは明らかだ。魔法使いの彼女が魔法を使って、拘束具を取り外したという事ではあるまい。その証拠に、彼女の紅蓮の両眼には光が映っていないように見える、というのはまさに死んだ魚の目のようであり、意識がないのだ。

だが彼女はこちらに身体を向けた。

（やる気……か……？）

あれは戦いをする構え、だ。眼には意識が灯っていないにも関わらず、彼女の身体は腐敗色に纏われながらも、よたよたともしておらず歩調はしっかりとしている。僕はナラクや占い師の老婆、またその近辺たる連中である執事など、その様子、主に表情などを探った。すると明らかにナラクが楽しんでいることがわかる。ニヤニヤと悪趣味な笑みを浮べていることがわかる。

（憎たらしい……！）

僕はナラクに対する感情として、真っ青な炎を内部で燃やした。どろどろとした粘度のある真っ青の炎。つまりこの状況、やはりナラクにとっての快楽！

奴が主催する奴が楽しむための催しですか！

（いや、占い師のバアさんに僕が人面瘤を持つ者としてどの程度の実力があるのかを示したいということでもあるのだろうが、にしても酷だな、僕はハッキリ言って戦闘に自信なんてねぇんだよ。〈顔の無い天使〉に対するトラウマを簡単にこびり付かせてしまうような、弱者なんだよ。そんな僕に魔法使いなんてファンタジックな奴と戦えって訳？　ナラクは僕にどうしてもらいたいんだ？　占い師のババァの鼻を明かせてやりたいなら、僕は魔法使いに勝たなきゃいけないんだろ？　あんな激しい弾幕を放つ奴に勝てって？　勝てるわけないよな。ハッキリ言って）

そこまで考えて、ソウカ、と絶望した。

（ナラクは僕を負かしたいのか…！　そして、僕のせいで占い師のババアに笑われたということを理由にして、より僕を下僕化させる。そういう思惑……！　奴は僕が勝てないとわかっている……！）

殺されはしなくても負ける可能性は大。負ければナラクに一本取られたね状態になって、僕はより老婆の下僕として頭が上がらなくなってしまう。理、理不尽、だ……。

「さぁ、ゲロ野郎！　お前が勝てば、そのゲロ野郎という醜い名を改めてやろう！　ただお前が負けたならば、私は恥をかくことになる。心底より憎んでいるこの占い好きの単純ババァに私が笑われることになる！　そんなことになれば、ゲロ野郎よりもさらに恥ずかしい名を与えられると覚悟しろ！」

僕は呆然とした。完全に、上から目線のぼこぼこじゃん。

「く、くそったれだ……ド、ドナドナ…そ、そういえばあの魔法使い君の懐に踏み入って彼女を気絶させていたのは、あれはどうやったのさ」

最後の希望。だが彼は首を横に振ってから、お手上げ、みたいなジェスチャーをした。

「あれは騎士としての鍛錬の賜物。悪いが、口で教えられるものではない。すまないが、なんとなくでやってる動きだ、あれは」

「く、くぅ…ば、馬鹿のドナドナに期待した僕が馬鹿でした！」

ドナドナのジェスチャーのせいでむかむかしたが、今はむかむかしている場合ではない。

やるしかないらしい…僕は息を大きく吸ってから、巾着袋を腰から外した。何色が効果的なのかは知らんが、まあまずは武器がなくては勝てない。人面瘤の様子を窺うと、呑気そうに口を、アー、アー、みたいにさせている。に、憎たらしい…。だが、今はそういう憎たらしいとかむかつくとか、そういう感情は邪魔だ！

僕は適当にグミを人面瘤に食べさせてから、前を向いた。

腐敗色を身に纏った魔法使いが、何時の間にか杖を手にしている。ステッキ、みたいな。

あの魔法使いは杖も使うのか。魔法使いらしいけどな、と思っているとナラクが上から声。

「この翡翠ルームに弾丸をぶちまけられても困るからな。遠距離戦

は互いに禁止だ。己の得物を使って、接近戦で決着をつけてもらう。そのステッキはそのためのものだ。当然、刀で一撃でスパッと切れるような柔なものじゃないと、理解しておくように」

むかっとくるなあ。心の奥底の青い炎が滾りそうになるなあ。偉そうに説明しやがって、と怒りたくもなる。

だが重ねて自分に心がけておくが、そういう感情は今は邪魔だ。

『腹の中で何かが造られた』

僕は喉から白い霧を纏った刀を引っ張り出す。血がずぶしゃあと撒き散る。痛みは以前よりも和らいでいる。刀の重さも、軽く感じる。身体も軽くなったように感じる。なんか、思ってるより調子が良い？いけるかもしれない。

あの良い様にされている露出狂魔法使い。意識のないあれを倒すことが出来れば、僕はナラクのために活躍できたということになる。ナラクがライバルである占い師のババァの鼻を明かせてやることになるっぽいから。活躍すれば、僕の権限は高まる。だから下僕から脱することができるようになるはず。良い名を与えられる。ゲロ野郎など、おかしなことだ。

「やってやるしか、ないな」

僕は刀を構えた。素人の構えだろうが何だろうが、勝ちゃあいいんだ。勝ちゃあ！

まずは下僕卒業！

21

と意気込んでみたはいいが、腐敗色を纏ってる露出狂女の紅蓮の眼付き、めっちゃ怖い！

お化け屋敷のギミックみたいな。ただでさえ幻想的な翡翠ルームという背景と相まって、何か予想の付かないことをしてくる感がアリアリ。〈顔の無い天使〉と同じくらい不気味。こりゃ、トラウマ化する可能性が充分ではありませんでしょうか…。

僕は白のグミを食べさせたことによって白霧を纏った刀の柄を、ぎゅっと握り締める他ない。冷や汗が出る。刀を手から滑らせて落としてしまうのではないか、という悪い予感がする。何か緊張のせいかふわふわして、足元がおぼつかない感じ。〈顔の無い天使〉と対峙した時と同じだ。

このままではおそらく、ただでさえ無い実力をまったく発揮できないまま、負ける。

えっ、負けちゃうの、って感じ。自分のことなのに他人事みたいな。なさけないなー、みたいな。

まったくもって、そんな場合ではない。

こんなんだから、下僕になってしまう性分なのだ。

「う、う、うおお」

気合を入れるための唸り声みたいなのを無理矢理出してしまったのを、出してしまった後に、これは滑稽な声を出してしまったと感じる。

本当なら相手の出方を窺うなりの思考をしなければならないのに、自分の滑稽な声だせぇ、みたいなことを感じているのだから、それが遅れを取る要因となった。

「……う」

突き出した、突き。それを軽ーい感じで彼女は、しゃがみ、をすることで避けてみせたのだ。

つまり自分の滑稽な呻き声だせぇ、とか考えながら突きを放ったせいで、その突きのコースが至極単純な真っ直ぐになってしまった。もっとフェイントとか入れた方がいいのに。当然、ただの真っ直ぐな素人の突きなど、簡単に避けられて当然。にしても彼女の動きは敏捷だった。おそらくこの魔法使いの露出狂、なかなかの手練れなのだろう、やはり別に強くもない僕が戦う相手でもなかった。僕は以前の世界で戦闘をしていたのではないか、と〈顔の無い天使〉との初戦の時に思ったが、終わった、こんなに一瞬の間に思考が鮮明ということは、僕は負けるのだ。もしかして死ぬこともありえるんじゃないの？

そう思いつつ視線をしゃがまれた方向に向ければ、瞳に光が入っていない紅蓮の両眼。それと、その下方向から力を込められて差し出される、ステッキによる、……突き。

ずんっ。

岩が昇り上がってくる、そういう重たい衝撃が腹部に走る。

「かはっ」

呻きが吐き出された。

そして気が付いたら地面に横たわっている。

今、一瞬僕は意識を失ったのか、と思いつつ慌てて倒れている身体を起こすと、こちらに無表情のまま突っ込んでくるステッキを構えた魔法使いの姿。その走行の仕方は戦うものの効率の良いそれ。僕の背筋は異様なほど震えた。

向ってくる魔法使いが悪鬼に見える。くるな、と叫びたい。

だが下僕にも下僕のプライドがある。誇りがある。せめて僕はさっきの滑稽な呻き声みたいなのは一言も出さないまま、無言で果てようではないか、と自らで誓う。

魔法使いはステッキを僕に突き出すための構えを取るのが、スローモーションで見える。ナラクが笑っているようにみえる。占い師のババアも。その他の執事たちも。憎たらしく、全てが……スローモーション…。

僕はスローモーションにステッキが振り回されてくるのを、自分もスローモーションであるがために回避することが出来ず、左頬に直・撃。吹っっっっっっっっっっ飛んだ。

ずざざあああと地面と黒スーツが擦れ合うことで背中が火傷したかと思えるほど熱くて痛い。当然背中だけではなく、殴られた瞬間など首の骨が折れたか、つうか顔が吹き飛んだのかと錯覚した。痛すぎる。圧倒的に負けすぎる。やばいよこれ、聞いてないよこれ。

彼女は容赦なく攻撃してくる。攻撃を絶やさない。

ステッキで打たれること一度や二度では済まなかった。全身をぼきぼきにされて、もはや再起不能ではないかと不安にされる。悪鬼は光の灯らぬ紅蓮の瞳で何度もこちらに棒を叩きつけてくる。ステッキというか、普通に棒。撲殺の臭気。腐敗していく自らの身体。繰り返される痛みは電流がほどばしるより遥かに刺激が強く、身が崩壊していくとわかる。電流が流れるたびに身体の組織が崩壊して、ミンチになっていくかのような苦しみを味合わされている。碌でもない経験だ、一度叩きつけられる度に身体が跳ね上がる。跳ねて、静まったと思ったらまた跳ねてる。それが何度も行われる度に、もう自分がどういう存在なのかわからないみたいな哲学的思考に塗り潰されてぐちゃぐちゃなイメージ。全て平らに潰されて、こねられて団子になっていくその過程であるかのような。抵抗が一切もう出来ないのでは料理される食材と同一。思考がまだ続いているのが不思議なくらいだ。何度棒で叩かれた？脳味噌はまだ平らにされていない。でもいずれは……。

おう、おうおうおう。もう僕はまったいらだ。幽体離脱だ。

自分の身体が外側と内側をひっくり返したみたいな様だよ。内臓が全て外側に飛び出ちゃったみたいな様だよ。それを僕が見下ろしている幽霊状態ってのは、きっと魔法使いの彼女が僕を叩きすぎたのが原因。当たり前だの木。ミンチ肉体。うげぇ……。

ドナドナが間にようやく入ってくれた。どうやら時間的にはさほど、経過していないらしい。ほとんど一瞬のことだった可能性もあ

る。僕はあっという間にミンチだったに違いない。
　そのミンチとなった僕を僕が見下ろしている。不思議な感覚だが、どうやら夢ではないのは残念でドナドナが悲しそうな怒りそうな吐きそうな顔をしながら、錆付いた剣で魔法使いが僕の身体をそれ以上臓器塗れにすることを防いでくれた。ガキン、と良い音。血管が浮き出ているドナドナは、すごいね、彼女と拮抗しながら大声を張り上げた。
「俺はこの方に恩を返すと決め、そのためにこの方の刃となることを誓った者！　故に、私がこの戦いに手を出すことは、このお方の代理として振う刃である！」
　僕は感動した。ドナドナなんて良い奴なんだ！　しかしナラクは嫌な奴だ！
「代理などは認められない。今すぐ下がれ。お前の刃は所詮お前の身体より、お前の力によって、振われるものだ。私が見たいのはその下僕、人面瘤を持った下僕の芯なる力。まだ決着はついておらん、私刑にされたくなければ、今すぐにその身を退くことだ！」
　ナラクは何を言っているのだろう。
　どうみてももう僕は再起不能。死としか言い様の無いほどに肉体を朽ち果てさせているし、意識である僕自身はこのように空間に浮遊し、僕を見下ろしている。芯なる力などもう出しようもない。身体は外側と内側がひっくり返り、人の同情を誘うグロテスクな有様。この世界では死んでもこのように幽体となるとは知らなかった。八十年周期で再生されるまでずっとこの状態か…。
　そんなことを考え退屈なる時を想像してくよくよする僕であったが、しかしそう退屈な時間が簡単に訪れる訳ではないようだった。
　ナラクの一差し指が、僕。幽体離脱している僕に、向けられていた。
「さあ、下僕よ。もうちょっと頑張ってみろ」
　そう言われた瞬間にクイッ、と下に引き摺り込まれる。
　うわわ、と慌てている内に、もう身体の中に意識がすっぽりと入

り込んだことを知る。
　内側と外側がひっくり返っているまま、僕は復活し立ち上がって、刃の柄を握る。心臓も小腸も大腸も膀胱も食道も肺も肝臓すい臓も筋肉もその他全ても、僕は剥き出し状態であるというのに生きていた。痛みも無い。間違いなく生きてる。身体が動いてる。全ての臓器を剥き出しにしているのに僕は、生きてる……。こんなの嫌だ。こんな姿で生きていきたくない。人体模型を百倍気持ち悪くしたものを作ろうという企画の元作られた肉人形みたいな。何これ。
「●△☆＃％●●〇＆＄％＄＃△■＄＃＆％”％」
　声がろくに形にならない。めちゃくちゃだ、怪物だ。執事とか占い師のババア、さらには犬少年やドナドナとかも僕の姿を唖然と眺めて、明らかにどん引きしている。どん引きなんてもんじゃない、この世の最たる不愉快に出会ったとでも言いたげに、頬を引きつらせて、身体を強張らせている。当たり前だ。こんなの僕だって不愉快だ。
「●△☆＃％●●〇＆＄％＄＃△■＄＃＆％”％」
　こんな姿嫌だ。まっとうな姿に戻して欲しい。泣き叫ぶようにしてそう主張したいが、わけがわからない感じになるばかりで、感覚が混乱してくる。いやだ、外側と内側が何でひっくり返っているんだ。殴られて普通こんなんになるか？そうか魔法の杖ということか。ステッキで殴られたからこんなに素敵なことになってしまったのかステッキなだけに。ありえねえありえねえ。
「お前がどうにも気合が足りないみたいだから、遊んでやったのさ。さあ、頑張らなかったらお前はずっとその姿のままだ。それが嫌だったら、白の霧纏う剣で、腐敗した匂いを纏ったその魔法使いの女を、見事倒してみせよ。さすれば、すぐにまともな姿に戻してやろうぞ」
　はいやっぱりそういうことね。ナラクの差し金ね。はいはいなるほどね。
　いつか絶対に……。

僕の中で粘度の強い青い炎が青い火炎と呼べるほどに燃え上がってきた。

「●△☆＃％●●○＆＄％＄＃△■＄＃＆％”％」

言葉にならない言葉しか叫べないし、その叫びによって皆を怯えさせてしまっているが、気合を入れるには充分だ。なるほど魔法のおかげか五感も鮮明だ。痛みもない。

「だ、だいじょうぶなのか……」

ドナドナがそんなことを言っている。大丈夫なわけないだろう。だがこんな姿僕だって嫌だ。ナラクの思い通りになるようで悔しいが、どうやら、そういう理由で自分の全力を発揮できそうだ。

犬少年が背後で吠えた。それを契機にして僕こと人体模型のひどい感じにしたバージョンみたいな見た目の肉人形、走行を開始。こんなの怖くて普通なら相手に出来ないだろうが、光の灯ってない無意識の魔法使いは、当然そんなことを気にもしない。ステッキを振り上げてくる。だが今の僕はひどく冷静だ。青い炎を胸内で滾らせているが、とても落ち着いたものだ。翡翠ルームのくぐもった音が鳴る中、勝負は一瞬でついて静寂が広がる。そしてその後に撒き起こったのが、ナラクから発された賞賛。

――お見事、お見事。皆、拍手を！

前も聞いた気がするこんな言葉。パチ、パチと執事たちの拍手。占い師も渋々拍手をしている。倒れているのは魔法使いの露出狂。服が裂けそうになっているがぎりぎりセーフみたいな。ドナドナと犬少年も背後より拍手。ぱちぱちぱちという賞賛の元、超不気味な僕の肉体は皆の賞賛に応えて、両手を挙げて大きく手を振る。で、手を振っている間に僕は元通りの姿に戻った。黒スーツの下僕の姿。で、勝利者には新たな名が与えられる訳なのだが、その新たな名というのが、

『テンガ』

という名だったので僕は何だか微妙だなと思ったので、やっぱりゲロ野郎でいいですと申し出たが、駄目だと即座に否定されたのだ

った。僕は今日からはテンガである。ふぅん、みたいな。

不運、みたいな。

22

数日が経過。

『ゲロ野郎』から『テンガ』に昇格させてもらった僕ではあるが、下僕として扱われるという点では以前と何ら変わらない。下僕として昇格した結果、館内での雑務を任せられるようになったのが意味わかんない。理不尽だと思う。黄金の食卓の残飯ばっかり食わされるし（まぁ、めちゃくちゃおいしいんだけど）、基本的には黒スーツ以外の着用が認められないし、ナラクの命令が無い限りは自由に館外へ勝手に出掛けることも許されない。嫌な感じだ。鉛色の感情。鈍くなる感情線。眼を瞑れば見える黄金色の粒子が、心無しかくすんでいて色落ちしているように見えてきた。

だがそんな感情の時にも、僕の部屋と化した牢獄内で時折聞こえて来る、あの歌。希望の歌。綺麗な歌。それを耳にすれば途端に感情は鉛色から清清しい青色へと転じていく。数日の内に一回聞こえるか聞こえないか。時々一日に数回聞こえて来ることもあるのだけれど、僕とてずっと牢獄にいるわけではなく雑務をこなさなくてはならないので、歌声の全てを耳に出来ている訳ではないのが残念、だ。

で、ある日僕は気が付いた。この綺麗な歌声はどうやら、僕にしか聞こえないらしいんだな。

他の人には聞こえない歌声らしい。ドナドナがね、不思議がったのだ。僕が歌のことを話してみたら、何ソレ、と隣の牢獄にいる彼にも歌は聞こえておかしくないはずなのに、リアクションは悪かった。で、おかしな人を見る目でドナドナは僕を眺めたのは間違いない。

僕は歌声のことを他者に伝えるのは控えた方がいいと察した。僕にしか聞こえない歌声。幻聴？いや確かに聞こえる。どういう理由

で僕にだけ聞こえる？さあ……。わからないが、歌が聞き惚れる代物だということはわかる。僕にしか聞こえないなら独り占めできるということだし、文句は無い。良いことだね、ははっ。

「……なぁ…お前には聞こえるか……」

深夜に小さな声で人面瘤に尋ねた。人面瘤はスー、スー、と寝息を経てている。いつものことだ、食事をするか眠りこけているか。僕の身体に寄生している人面瘤は怠け者。最近は〈顔の無い天使〉討伐を命じられないから、グミを食べさせていないが、大丈夫なのだろうか。その分僕の体力が奪われていたりとか、するのだろうか。自覚症状は無いから、平気かな。

僕は袖を元に戻して人面瘤を隠してから、布団に潜り込んで朝日が昇り上がるまで眠りこける。そして朝になれば下僕としての雑務をこなし、残飯を平らげて、一日を終える。歌声を耳にするとテンションを上げる。ドナドナもそんな僕と同じような生活を送っていた。彼は下僕にならなくても良いというのに、律儀なことで、恩人である僕にとことん付き合うつもりらしい。僕と同じ下僕生活を送っていても恩を返すことにはならないと思うのだが。

犬少年は時々話し相手になってくれる。ただ彼にも歌声のことは言っていない。うほーん、うぬーん、などと語尾にくっ付ける彼に、幻聴が聞こえる馬鹿な奴だと思われるのは嫌である。

ナラクの館での下僕生活の間、魔法使いの姿は見受けられなかった。彼女はどうしたのだろうか、僕は重傷を負わせてしまっただろうか。姿は見えない。ただ彼女がナラクの館から解放されたわけではないと、なんとなくわかっていた。

ナラクが何かの準備をここ数日進めていることが関係していると思えた。忙しなく見知らぬ人間がナラクの館に訪れてきては、ナラクと翡翠ルームで話しをしているらしいと、他の執事が言っているのをよく耳にする。僕を〈顔の無い天使〉の討伐に向わせないのも、その準備のことが関係しているのではないかと想像できる。

その準備が終わった時、僕は再びナラクの館の外へと出ることに

なるのだろう。
それまでは歌声を楽しみにして過ごす下僕生活を送る、ということだ。
そうして、僕の下僕生活は一週間くらいは続いた。
その終わりは唐突で、
「テンガ、お前の出陣の時だ。庭にて既にお前のための旅の準備は完了されている。今すぐ庭に向うように」
とミイラ執事に坦々と言われて、雑務を他の者に任せて庭に出てみた所、あら驚くことにそこにあったのは馬車。あるのは馬車だけではない。ナラクやその他大勢の執事たちが庭に集まっており、今まで見当たらなかった露出狂魔法使いの姿も、あった。彼女は先日庭を荒らした時のような興奮した様子と違い、平静を取り戻しているように見える。紅蓮の目付きに光が灯っている所を見ると、ナラクに操られている状態からは脱したらしいとわかる。
綺麗な執事が僕に向って叫ぶ。
「下僕よ、呑気に道を歩くものでない。ナラク様は随分とお待ちだ。そういった失礼を下僕であるそなたがすることは、恥であると感じることだ」
たしかにのろのろと歩いていたとは思う。だが、だからといって一々小言を挟まれるのはうざったいというもの。僕は少し機嫌を悪くされながら、既に壊された形跡など一つも残っていないくねくねとした庭の道を、急ぎ足で進み、ナラクたちの前に立つ。
別の場所で雑務に励んでいたはずのドナドナ、犬少年も庭にやってきていた。どうやら僕が一番到着するのが遅かったらしく、皆を待たせていたらしい。のんびり歩いていたのが悪いのだ、とでも言いたげな執事の険しい視線が痛い。ただナラク自身は待たされたことにイラついているわけではないらしい。だが、何か、何処か、表情が険しいのは間違いない。
やはりこれから大きな事を為そうとするつもりなのだろう。その為に、数日間準備をしていたということだ。大事を為すからナラク

の表情は険しいに違いない。その大事、つまり計画、それがどのような代物なのかは僕にはわからないが、僕がその計画の一端を担っているのは間違いない。人面瘤を持つ僕は鍵（キー）の一つなのであろう。

そう考えてみると怖くなってきたので、空を見上げる。

今日は実に良く晴れている。快晴だ。雲ひとつ無い。太陽が顔を出して、僕らに陽の光を降り注ぐことで暖かな空気を作り出してくれている。陽気な青の空。その麓で大事のために真剣な顔つきをしているナラクや執事、そして計画を知らないがなんとなくヤバイ、大変なことを為さなければならないのだろうな、と感じて滅入りそうな気分になる下僕の自分。ドナドナや犬少年は呑気そうな顔。魔法使いの露出狂は、まだ彼女の性格がわからないので、その表情が何を表しているのかはわからないが、晴れやかそうには見えるが。天気のおかげでそう見えるだけかもしれない。空が晴れていてくれてよかった。僕に、いや皆に、鬱屈が湧くのを防いでくれるから。

「この馬車を下僕たるお前に貸し与えよう。この馬車の造りは堅牢であり、またその車輪を引っ張る馬二頭の力も強大である。馬二頭の名はパトリセアとナツウロロ。努々、お前たちを目標の都市に運ぶまでの力添えとなってくれる大切な仲間の一員だということを、意識するように。どんな悪環境の道でも突き進もうとし、そして実際に突き進んでみせる屈強たる選ばれし馬だ。お前たちはその馬の活躍に劣らぬよう全力で、私の配下として、私の願いを叶えるために尽力を発揮するのだ。さすれば、自ずと良い結果も生まれよう」

ナラクはそんな言葉を僕らに告げた。

僕らとは、僕、犬少年、ドナドナ、露出狂魔法使いの四人だ。あ、魔法使いの彼女の名はクローヨナウと言うらしい。長々しい名前だ。あとであだ名を考える必要があるだろう。

ナラクは僕に太い巻物を渡した。とても長そうな巻物だ。開けばそこには長々とした文章、つまりナラクが僕らにして欲しいこと、つまり指令が書かれているのだと推測できる。巻物は銀色というナラクらしい高級さを感じさせる色遣いをしていて、快晴である本日

の日射を浴びて、キラキラと輝いていた。僕は巻物を開こうとも思ったが、

「馬車の中で開くといい。折角の豪奢な作りの巻物を地面の土で汚すのでは、愚かしい」

とおっしゃるので開くのを控える。

「正直に言わせてもらうならば、突然過ぎて心の準備も出来ていなければ、何を目的として行動すれば良いのかも僕にはわかりませんが」

と遭えて尋ねてみる。綺麗な執事とミイラ執事が生意気な口を叩いた僕に対して鋭い視線、殺意に近い気配、を発しているのが横目でもわかったが、ナラク自身は坦々としている。

「巻物を読めば大体のことはわかる。だがまあ、大雑把に、簡潔的に説明するならば、お前たちにやってもらいたいことは〈顔の無い天使〉から赤、緑、青、白、オレンジ、黄の六色の液体を収集するということと、あともう一つ、これが重要なのだが、私のもっともの敵と言える連中であるノーザンス湖に住まう魔法使いの保守派の連中に交渉を持ち掛けてきてもらいたいということだ」

交渉？魔法使い？〈顔の無い天使〉の液体を人面瘤に飲ませるということは以前より言われているが、魔法使いの街に関しては僕は一切理解していないのだが。その僕に交渉に行けとナラクは言っている……おかしいではないか……？

「交渉の材料となるものを、僕は一切持ち合わせていませんが」

尋ねてみるが、ナラクはやはり坦々と答えを返してみせる。

「そう。お前たちには交渉の材料である代物を集めてもらう必要がある。また、ある程度向こう側に不利となる材料は、既に私の下僕となってくれた魔法使いのクローヨナウに持たせている。後で確認しあうと良い。クローヨナウは魔法使いでありながら革命という良き行いを促進しようと試みる者であり、私たちと志を共にする者だ。彼女は保守派の魔法使い連中を恨んでさえいる。故に彼女は魔法使いではあるが、私たちの仲間であると認識するように。お前たちに

集めてもらいたい交渉の材料に関することは、全て彼女、クローヨナウに私から情報を伝えてある。よって、交渉の材料について知りたく思った時は、クローヨナウに尋ねれば良い。さあ、テンガよ。他にも私に尋ねておきたいことはあるか？」

テンガという名が呼ばれる時、執事たちが顔を見合わせてニヤッと嘲笑っているのがわかるが、それに怒りを感じるのは面倒だ。他に尋ねておいた方が良さそうなことを思い浮かべてみることにする。

僕はしばしの間、静まり返っている空気の中、考え、そして思いつく。

「交渉に失敗した時には、僕らの扱いはどのようになるのでしょうか」

尋ねてみてから、愚問だったなと感じる。

ナラクは返事をするまでもないと首を左右に振ってから、ジェスチャーを放ってみせた。

そのジェスチャーの意味とはすなわち。

ＤＥＡＴＨ。

23

馬車内のド真ん中に設置されている”水晶玉”が、危険を伝えるための暗めな紫色に染まった。

馬車に危険が近づいていることの知らせだ。

今日はこれで二度目。朝にも一度連中が現れた。その時はウヨク（クローヨナウのあだ名）が眠っていたので、きつかった。やばかった。犬少年が懸命に彼女を起こしてくれたので何とか助かったものであるが、彼女が戦闘に入るのが後少し遅かったら、殺されていたかもしれない。

で、やばいのは今回も同じ。またウヨクは寝ている。魔法を使うと眠くなるのだそうだ。彼女はだから頻繁に寝ている。馬車内に置かれている朱色の革ソファーで横たわってすーすー眠るのだ。僕は再び犬少年に彼女を起こすことを命じてから、「とにかく時間を稼がなきゃ駄目だな。なんかこの人、寝起き悪いし」とぼやくドナドナに首肯することで同意して、馬車の外に出た。「どこだ、天使さんは」。

〈顔の無い天使〉は既に降臨していた。馬二頭は警戒し停止している。進路を塞ぐようにして現れた〈顔の無い天使〉の数は四体。点滅している色は赤、オレンジ、青、白。

「やり辛い組み合わせの連中だな…。赤を食わせれば青には有利になるが赤には不利になる。弱点を付こうと思えば、別の奴と同調してしまう…こいつら狙ってこういう構成なのか……」

となると、無難な選択をする必要が出てくる。緑もしくは黄のグミを食べさせれば、どの色にも有利にはなれないが、不利にもならない。

僕は腰につけている巾着袋に手を掛けようとするが、上手く袋を掴めない。二、三回ほど空を掴んだ。相変わらず〈顔の無い天使〉

と対峙するとふわふわとした感覚に囚われてしまう。だが少しずつ慣れてきてはいる。

緑か黄のどちらかが食べさせる候補だが、緑を選択した。理由はある。どちらかというと派手な色は攻める時用で、そうでない色は防御用に使用するといいのだ。赤、黄、オレンジ、白、緑、青の順に色の派手さというのは決められている。つまり赤、黄、オレンジは攻めの時に食べさせたい。対して白、緑、青は防御時に食べさせたいということである。今はウヨクが起きてくるまでの時間稼ぎをしたい。そのために防御を固める必要があるから、緑のグミを人面瘤に食べさせるということ。

『腹の中で刀が造られた』

ずぶしゃあ。グロテスクを鳴らしながら緑の霧を纏う刀を取り出して、比較的刀身は厚く重めではあるが強靭な堅さを持つが為に、盾代わりにもなると期待できる緑。さて、準備は完了。

緑ならばどの赤、青、オレンジ、白、いずれとも因果関係がないために安定した戦いが出来る。

「ドナドナ、いける？　守りの姿勢で行こう」

一応聞いてみたが、やはりというべきか、ドナドナはどうやら人質にされた時の〈顔の無い天使〉に対するトラウマがこびりついているらしく、へっぴり腰。「い、いけるさ」と呟くが、持っている剣の切っ先がダウジングでもしているかのように、あっちにいったり、こっちにいったりしている。当然宝探しをするのではなく戦闘をするのだから、ダウジングなどしなくて良いし、剣はダウジングをするための武器ではありません。相手を斬るための武器ですよ。

（ドナドナがウヨクを気絶させてくれた時ほどの動きをやってくれるなら、時間稼ぎも余裕でできるのだろうけど……こう、へっぴり腰では期待できないんだよな……）

対人戦のドナドナには期待して良いのだろうが…この状況の彼はどうしようもないとしか言い様が無いッ。僕が彼を手助けすることになるだろう。実際、何度か彼は命を落とす危険な状況になったも

のだ。おかげ様で僕は人を助けたという自信を身につけることが出来たが、ドナドナは僕に自信をつけさせる為に僕の仲間になったのではないというのに！まあ、彼には対人戦時に期待だ！交渉先や、交渉のための代物を集める時に、おそらく人と戦うことになるだろうし。その時にはドナドナにはレイナードになってもらおう。

「キャアアアアアア」

「キャアアアアアア」

「キャアアアアアア」

「キャアアアアアア」

悲鳴が四つ。〝墓標荒野〟にて鳴り響く。あと少しでこの荒野を突破し、北側に近づくことが出来るというのに、連中と遭遇してしまったのだ。墓標荒野はとにかく広くて、北側の門からＨＯＭＥＴＯＷＮを出たというのに、北側にも跨っている〟墓標荒野〟を抜けるためにもう三日程度は馬車での旅を続けている。主にＨＯＭＥＴＯＷＮの東側に広がっている〟墓標荒野〟だが、北側にまである程度伸びているのだ。ある程度伸びているに過ぎないはずなのに、もう三日をこの荒野で過ごしているのだ。パトリセアとナツウロロの体力が心配になるというものだが、今は心配している場合ではない、〈顔の無い天使〉は既に悲鳴を上げながら身構えていて、拳を振り上げながら、まずは赤色の天使が近寄ってきた。僕を殴り殺すつもりなのだろう。

〈顔の無い天使〉が放つ攻撃は、たしかに直撃すれば痛手を負う、重みのある拳だ。

だが当たらなければどうということもない、のも事実。僕は剣を盾替わりにすることで振り下ろされてくる拳を、受け止めた。

ガキンッ。

重たい衝撃が剣越しに圧し掛かってきて、その重みはどんどん増してくる。〈顔の無い天使〉は腕力が凄まじい。緑の霧を纏う剣だから防御余裕、とはいかない。だから僕は一瞬だけ片手を剣から離し、用意しておいたもう一つの黄のグミを、人面瘤に食べさせる。

黄のグミを食べさせたその瞬間に、阿呆みたいにもぐもぐしていた人面瘤の目が、カッと見開かれて。

衝撃波が僕の身体より発生。〈顔の無い天使〉を吹き飛ばしてやった。

緑のグミを食べさせた後に黄を食べさせたことによって人面瘤に生じた影響とは、反発。

本来反発しあう緑と黄を時間を置かずに食べさせたことで、人面瘤は拒否反応を起こす。拒否反応は衝撃波に形を変えてくれて、僕の周辺に近づいてきていた〈顔の無い天使〉と赤色の〈顔の無い天使〉、そのどちらも纏めて吹き飛ばしてくれた。一旦間合いが開く上に、衝撃波を受けると麻痺するらしく、さらには警戒もしてくれるので、〈顔の無い天使〉たちは様子見をしてくれるようになる。つまり拒否反応から転じて衝撃波を発生させるこの手段は、時間稼ぎには持ってこいの戦術なのだ。

グミを一度に二つも消費するが、馬車内のグミ瓶にストックはたくさんあるから、数のことは心配する必要は無い。また、人面瘤にグミを大量に食べさせるからと言って問題が発生することもないらしい。ナラクから渡された銀色の巻物にそう書かれていた。だから僕はこの戦術を三日前から多用している。他にもグミの食べさせ方はあるらしく、人面瘤は様々な反応を起こしてくれるようなので試したい戦術はあるのだが、四体という数が多いこの状況では、余裕を持って戦術を試すことなど出来るはずもないので、無難に時間稼ぎの戦術を選択している。

剣の霧色は黄色に変わった。

〈顔の無い天使〉は次々に襲い掛かってくるので、次は緑のグミを食べさせて、拒否反応からの衝撃波で距離を再び引き離す。近づかれたり次は黄色のグミ。また近づかれたら、緑。と、繰り返すことで、巾着袋内の緑か黄のグミが無くなるまではこの時間稼ぎは有効だ。

（そろそろ限界か……）

巾着袋内の緑と黄のグミ数が0となり、ウヨクはまだ寝ているのかと焦りを抑えられないが、もう〈顔の無い天使〉の拳は振り上げられている。ガキンッ、と剣で防いでから、最後のグミを人面瘤に食べさせて、衝撃波を発した。繰り返すほど〈顔の無い天使〉もイラつくらしく、再びこちらに向ってくる頻度は早まっている。もう相手は殺る気満々だ。

グミを補充してくるしかないか、と思いドナドナに時間稼ぎを頼もうかと思い周囲を見渡してみたら、既に僕の背後辺りで気絶していた。

「……」

唖然としたくなる。何時の間に彼はやられたのか。それとも僕の衝撃波に巻き込まれたのだろうか。

僕はこれは危機じゃないか、と冷や汗を掻き、巾着袋と人面瘤を交互に見比べる。だが見比べた所で策など浮かんではこない。〈顔の無い天使〉がスーッとこちらに近づいてくる……。垂れる汗の水滴。やられるっ。

スバババババババババババッ。

色鮮やかに四色の魔法弾が、何百発と僕から見て右側から飛んで来て、左側に抜けていく。

まさしく一網打尽であった。丁度、真横に並んで僕の側に近づいてきていた〈顔の無い天使〉が灰色のローブを撃ち抜かれて穴だらけになり、次々に痙攣し、その撃ち抜かれた所で立ち止まった。

「チャンスですよ」

と右側の方からウヨクの声。言われるまでもない。穴だらけにされたことで身動きの取れなくなった〈顔の無い天使〉に接近して、美味しい所取り。トドメを四体に刺して、液体を体外に排出させる。噴出した液体全てを人面瘤は自然と吸い取ってくれていく。四色の液体全てを、満遍なく、一滴も残さず、人面瘤が吸収していき、全てを吸い終わった頃には、〈顔の無い天使〉は皺くちゃな皮のようになって地面に倒れて、荒野の風に吹かれて砂に塗れた。

戦いが終わったので、剣は霧のようになって散る。無事、やられず、終わった。

僕は気絶しているドナドナを叩き起こそうとするが、完全に気を失っているので仕方無いので背負ってから、黒のローブをはだけさせたまま遠くよりこっちに戻ってくるウヨクに、

「お疲れ様」

とだけ言った。ウヨクは小さく頷いてから、

「作戦勝ちだねー」

と薄く笑った。

馬車内に戻ったら、犬少年が怯えた様子で丸まり、縮こまっていたので、

「もう終わったよ」

と告げると、嬉しそうに跳びはねた。

気絶している重たいドナドナをウヨクは使わない向かい側のソファーに寝っ転がしてから、”水晶玉”が青空色に戻っていることを確認して後に、パトリセアとナツウロロに口笛を吹いた。

馬車の車輪が回転し、僕らは再度出発する。

北西の果てにあるノーザンス湖を最終目的地点として、まずはこの墓標荒野を切り抜ける。

巻物によれば、本日中には抜けられるとあるので、気分が落ち着かないものであった。

〈顔の無い天使〉の数は、墓標荒野を抜けてツララ氷森林に入れば減るそうなので、まあつまり戦いの回数が減ってくる訳だが楽できるということだ。まだ〈顔の無い天使〉に対するトラウマが抜け切っていない僕としては当然、墓標荒野を早く抜けたい気持ちになってくる。

まあ、早く抜けたいと思う時に限って、時間の進み方は遅く感じるものなのだけれど。

24

しかし改めて感じるが、この馬車はすごい。というより、魔法の力というのがすごいのだろうが、とにかくすごいなぁと感心して、眼を瞑ってみると僕の感心に呼応して、黄金の粒子がいつもより多くわななないているのだった。閉じたまま数秒間呼吸だけする。そしてふたたび目を開けてみてもやっぱり、相変わらず、馬車はごいすー。魔法の力ってすごいんだなぁ、と感心が強まる心。感心が新鮮たる感情を誕生させてくれて元気が湧き出るということ、すなわち歓びのほどばしり。情動、情動、情動！と高揚したくもなっちゃいますよ。

「ふぅ……」

と一息ついてから、〝水晶玉〟が青空色であることをチェックしておく。少なくとも今までは平均、五時間置きで〈顔の無い天使〉は現れている。まだ三時間程度しか時間は過ぎていないので、仮眠を取っても良いかもしれない。まあ、かといって油断していると怖いので、超大詰めのグミ瓶の蘇芳色の蓋を開けて、巾着袋にグミを補充するなどの、戦闘の準備はしておく。

で、一通り準備を終えてから馬車の中で立ち上がり、三百六十度を見渡してみて、ふと気が付く。そう言えば、僕が寝れる分のソファーはもう無いじゃん、余って無いじゃん、と。ソファーは残念ながら二つしか設置されていない。まあ、布団はあるんだけどね。はぁ、床に近いと振動を感じるから眠り辛そうなんだけどな……とは思うが、文句を言ってはいられない、馬車内でこれだけ快適に過ごせるんだから、愚痴れるものでもない。

この馬車は本当にすごい、と三度目くらいだけど、やっぱりそう感じる。僕は眠りこけているウヨクを見下ろしながら、魔法使いってのは皆こういう力があるのだとしたら超手強いんじゃねえのかな、とトンデモな相手と僕は将来的に交渉しないといけないわけであっ

て、ああ、気苦労しそうな予感。魔法ってのは何でもありだ。何でもアリの連中に立ち向かうなんて真っ当な神経で出来るはずないじゃない？気を狂わせるか、耐え忍ぶか、下準備を念入りに済ましておいて相手をぐぅの音も鳴らない状態に仕立て上げるかしなきゃ……ああ、そうかだから交渉物を集める必要があるんだよな……で、ウヨクの持ってる交渉物とは『水』だった。五個の水が入った瓶を見せられて、「ただの水？」と尋ねたら、当然のように首を横に振った。首を横に振って後に、彼女はこう僕らに教えたものだ。

「これはね、湖の水。ノーザンス以外の湖の水は、全てナラク様が回収済みだったみたい。とりあえずこれは大切な交渉物だから、私が常にロープ内の広域空間に収めておきますので、紛失の心配はありませんから、そこのところは心配しないで大丈夫」

湖の水。この世界の根源である湖の水。この世界にある六種類の内の五種類が、すでに揃っている、と。それが交渉物になるの、と尋ねたらウヨクはスラスラと答えてみせた。

「やっぱり下僕のテンガは世界のことを知らないんですね。ええとね、じゃあちょっとめんどっちいけど説明しますね。簡単な話です。要は、湖の水が五個ここに揃っているということは、六カ国ある内の五カ国がナラク側、つまり革命側、と意見を共にしているということなんです。この水を見せれば、魔法使いの国、保守側は、完全に世界から孤立していると気が付かざるを得ません。ですからこの五個の水の入った瓶を見せれば、彼らは、まあ、焦る訳です。つまり交渉の材料にはなります」

そこまで聞いた僕には、当然疑問が湧いたものだ。

「五カ国が革命推進で、保守派が一カ国のみ。もうそれって、革命派が完全有利じゃないの。保守派に対する交渉の材料って、もうその瓶だけで充分じゃん」

だがウヨクは、そう簡単にも行きません、と不機嫌そうな表情を作って両腕を組んだ。身体が小さいからか腕を組んだのに偉そうに見えない。ウヨクちいさっ。

「この馬車を御覧になってもらえればわかるように、魔法というのは何でもアリです。魔力を使用しすぎると体を壊したり、すぐ眠くなったり、などの弊害はありますが、基本的には学べば万能の力となってくれるのが魔法です。この世界の中ではもっとも優れた人間の知恵、発明、と呼べるでしょう。それほどに優れた魔法という技術でありながら、ナラク様は何故か多少心得ていたようですが、普通は、ノーザンス湖で栄えてきた魔法使い集団しか利用することが出来ません」

「何で？」

「ノーザンス湖に住まう魔法使いたちは鎖国をしているからです。閉鎖的だからです。何故、鎖国をしているかというと、魔法があるからで、そして彼らは他国に魔法の技術を絶対に教えようとはしません。その技術の鱗片でさえも、漏らすまいと徹底的な情報閉鎖を行っています。その徹底ぶりは凄まじく、魔法の技術を得るためにこれまで他の五カ国は様々な手段を駆使してきましたが、魔法の技術は広がりません。ノーザンス湖に住まう人々だけが、その技術を保有しています。ナラク様は魔法を多少扱えたようでしたが、あれはほんの触りで、まあアノ程度の魔法だったら、使える人が他国にいてもおかしくはないのですが、技術、発明、と呼べるほどに熟練した魔法を扱えるのは、唯一ノーザンス湖を根城にするあの国の魔法使いだけです。魔法という技術の独占をしてきた彼らに他の五カ国は当然、良い思いをしてはいません。だから……」

「こうして、五カ国が足踏み揃えて革命を訴えるような状況が生まれた、ということかな」

「はい、そういうことですね。はい、大体はそれで合ってます」

「大体なの？」

「大体です。そんなもんです。で、つまりノーザンス湖の魔法使いたちは強敵なんです。五カ国が戦力を束にしても、勝てるかどうか怪しいんです」

「そんな強いんだ」

「ええそうなんです。だから、もっと交渉の材料を集める必要がある。そのうちの一つには、液体を適量集め終えたあなたの人面瘤、も含まれています。ですから、〈顔の無い天使〉を倒して液体を収集すること自体も、交渉の材料を集めているということに当たります」

「人面瘤が交渉材料…なるほどね、僕はおまけで、こいつは本体ということだな」

「ですが切り離すことは出来ませんから、どうにしろあなたも本体みたいなもんですよ。テンガ、そこは油断しない方がいいよ。という訳で、ちょっともう眠くなってきたんで、寝ますね。次に〈顔の無い天使〉が現れた時に備えて、魔力を溜め込まなくちゃいけないんで。では、おやすみー。くかー」

「僕はテンガじゃ……。あ、テンガか。嫌違う…あ、ていうか、ね、寝るの速いなー」

ソファーでぐったり。揺さぶっても涎を垂らすだけだった。

そんな会話をしたのが三日前。で、この三日間は北西に進みつつ、ツララ森林を目指しつつ、ずっと〈顔の無い天使〉と戦闘を繰り返していて、液体も結構収集できた感じ。ウヨクが魔法弾で敵を瀕死に追い込んで、僕はトドメの一撃だけ貰うというおいしいポジション。まあ彼女が起きて準備が完了するまでの時間稼ぎをするという役割はキツイけれど。まあ、ウヨクもドナドナと違って頼りになるので、飛躍的に戦闘は楽になった。おかげ様で、〈顔の無い天使〉に対する恐怖感は日が経つに連れて薄れてきている。僕がこうして大丈夫になってきたのだから、ドナドナにも早くトラウマを克服してもらいたいものだ。へっぴり腰状態でなければ、ドナドナも強いのだろうし……。

さて、そうやって考えたり思い出したりなどしている内に、三十分くらい時間が経過していた。

ド派手なピンクっぽい紫、の壁、に取り付けられている鳩時計から、小鳩が飛び出してクックルポッポーと馬鹿みたいに鳴いている

のだった。
　改めて、馬車内を見渡す。本当にすごい馬車である。魔法の力とはすごいね。ちょっとすることが無いので具体的に説明してみるよ。馬車内のすごさをね。誰に言ってるんだ……ここは僕の脳味噌の中…誰も聞いていないだろう……あ、あの綺麗な歌声の人に話しているという勝手な設定を作ってその人に話しているという感じで、説明しよっ……。あれ、これ、狂人だろうか……。
　まあ、気にせず行こう。暇つぶしは大切だ。
　馬車内の光景を、綺麗な歌声の人に喋ってる感覚で、説明して暇潰ししますよー。準備は良いですかー。あーゆーれでぃー。
　ええとね、まず初めて僕が馬車内に足を踏み入れた時の、その印象を説明しようかな。いやぁ、とても驚かされたのは、まさにそのド派手さで、ファンキーなぬいぐるみ好きのお嬢さんのお部屋って比喩できる感じだったんだ。しかも外から見る馬車の大きさと比べてみて、明らかに部屋の大きさはその四倍は広いんだよ。これも魔法の力だろうけど、違和感がすごいよね。外見はただの馬車で目立たないように作られてる。白の厚布、馬二頭、ぎしぎしと鳴る車輪。でも一歩中に入れば異次元空間。
　ピンクっぽい紫の、輝度明るめな壁。天井には電灯。電気を引っ張りようもないはずなのに、明かりは煌々。至る所にお人形、ぬいぐるみ、が置かれていて普通の見た目をしているのがあれば、明らかにゴスロリチックだったり、ホラーチックだったり、みたいな人形もあって、例えば片目が溶けてしまっている小熊の人形、爆弾を抱えてニヤニヤしている子供の人形、〈顔の無い天使〉にそっくりな天使の人形。あるのは人形やぬいぐるみだけではない。様々な、どこの民族が使っていた代物ですかと問いただしたくなる奇抜な置物、明らかに〈腑抜けた悪魔〉から奪い取ったと思える仮面が戦利品のようにたてかけられていたり、また冷蔵庫やバスルームなど、生活に欠かせない用品も一通り揃っている。要は、一つのリビングだよね。もはや。キッチンもあるし。

黒と朱のソファーが一つずつ置かれていて、そこに挟まれるかのようにしてある黒光りのテーブルには、大きなグミ瓶や、水晶玉、銀色の巻物、あとおやつの入ったバスケット、などが置かれていてリモコンもある。テレビが一台壁に取り付けられていて、ニュースとか見ることが出来る。暇つぶしもある程度はこのテレビで出来るだろう。部屋全体に漂う雰囲気と、あと匂い、が何処か妖艶とでも言えば良いのかな、ちょっと雰囲気あるよねみたいな。でもちょっと、という程度で、まあやっぱり総合的な印象は、ファンキーな女の子が住んでそうな部屋、ってかんじ。

……こんなところかな。説明、終了。

時間はあまり潰せなかったけど、残りの時間は黄金の粒子でも眺めていようかな。

そう思って瞼を閉じて粒子を想ふ。わらわらとしている。今日も見える。

キラキラ眩いている粒子たちは、今日も夢遊していて瞼の裏を跳び回っているではないか。

この夢遊を眺めるという遊びをするだけでも、案外、テレビを見るよりも楽しかったりする。心が静まって無限牢獄に居た頃の孤独を思い出す。あの無限牢獄に居た頃の孤独、まだ僕が乙として甲を歩き回っていない独りの時間。たしかに停止していたはずなのに、それを心地良く思っていた頃。まったく、一人を好むなど贅沢なことだった。あそこにいた監獄者の仮面の人は、僕を逃がしてしまったわけだが、何か処罰を受けたりしたのだろうか。だとしたら可哀想、申し訳ないことをしたような気がする……毎日、面倒を見てもらっていた…まあ、彼の場合、仕事だったのだろうけど……。

僕は毛布を頭まですっぽり被って、瞼の中に光がわずかでも入ってこないようにした。こうした方が金色の粒子がハッキリ見えるし、気分も落ち着いた。落ち着いている内に、幻覚とも現実とも付かない映像が浮かんでくる。……〈顔の無い天使〉がわずかに浮かび上がったと思いきや……犬少年に姿形を変える……大型犬の彼が投

棄されて小さくなっていく姿が……錯覚……黄金の粒子が犬少年の骨となった姿に纏う……骨……骨……墓標荒野に建ち並ぶ木製の十字架……吹き荒ぶ寒風……歌が聞こえて来る……いつもの歌声……遠くから響く……人面瘤がスースー寝息をたてて……〈腑抜けた悪魔〉の仮面が割れた瞬間…血したたるルーピックキューブ……ナラクの邪悪な微笑み……テンガと名づけられた時の衝撃……嘲笑う執事や占い師の老婆の顔……再び骨……Ｂａｂｅｌの影……テスタ兄妹……湖……墓標……以前の世界……白衣を纏った人……泣いている人……笑っている人……硝煙の匂い……。笑っているのは僕じゃない……僕はどの立場……この戦いの場所で高笑いをしている憎たらしい奴と…泣かされている人……ああ、憎たらしいな……戦乱の跡……記憶……！

うとうとしている最中に、思い出しそうになった！

「……記憶がッ！」

僕は毛布を捲り上げながら叫んだ。頭まですっぽり隠して横になっていたので、電灯がひどく眩しく感じられて上手く目が開けられなくなる。それほどの速度で起き上がったので、何時の間にか起きていた三人に何事か、みたいな眼付きで見られた。思うのだが、もうみんな僕のことをマトモな人間だとは認識していないだろう。最近、醜態ばかり晒しているような気がする。

「ハ…ハハハッ……」

と頭をぽりぽり掻いてから、

「みんな起きてたんだ。いやあ、恥ずかしい、恥ずかしい」

と再び布団に潜り込もうとしたのだがウヨクに、

「ちょっと起きてください」

と言われた。うとうとした寝起きの状態なので少し機嫌が悪く、

「え……」

と戸惑った声を発したのだが、ウヨクの紅蓮の瞳による無言の威圧が結構凄まじかったので、うわ怖ッ……と眠気も吹っ飛んで二度寝は止めて、その場で胡座を掻いた。

だが、今にして思えば、この時僕は無理矢理にでも寝てしまうべきだったのだ……！

25

クラッカーが彼女の手元に突如として現れる。
かと思うと次にはそれの栓を引っ張っていて、パァン、と小気味良い音が打ち鳴らされたのだった。
なになに、何が始まってしまうの、という不思議。クラッカーの中からパァンと共に発射された一枚の紙が、ひらひらと空気中を舞い落ちて黒光りのテーブルに着地する。その紙には文字が書かれていて、こう読むことが出来る。
『交流会』
でかでかとした文字。黒字で書体が厳粛のある感じ。何、何、どうなってるのと僕はすっかり眼を覚めてしまってウヨクを眺め見ると、彼女のドヤ顔がそこにあった。クラッカーを打ち鳴らした程度のことで何ゆえにドヤ顔をしているのか。不審に思う僕をウヨクは不審に思ったらしく、
「読めないのこれが？」
と怒りを露わにするので、おお怖いな…。まあ、脅されたので「こう・りゅう・かい」とハッキリ発音してみた所、「はい、お利口さんです」と、何処か喧嘩腰な雰囲気で、不機嫌な様相。あまり刺激したら噴火を起こしそうな気配がしたので、僕はとりあえず様子見をすることにする。
黙る。水晶玉を見ると青空色。〈顔の無い天使〉はまだ来る気配を見せない。
ドナドナが次々に口の中に入れて消化していった饅頭みたいなオヤツの空き袋がたくさん転がっている黒光りテーブルのド真ん中に『交流会』と書かれた紙が、堂々と存在感を放っていた。
口の中を餡子やらでもぐもぐさせた状態のまま、ドナドナは紙を手で拾い上げてから、
「にゃんじゅごうるあ」

と言った。饅頭みたいなのを頬張ったまま喋るから翻訳不可能な言葉が紡がれてしまうのである。全部飲み込んでから話しをしろと言いたいが、その隣でガツガツと手当たり次第でオヤツを貪っている犬少年の方が断トツで下品なので、ドナドナの下品さが気にならなくなってくる。不思議。

ウヨクは紅蓮色ではあるが冷えた瞳、で二人を眺めながら、

「さっきのは、なんじゃこりゃあ、って言ったの？」

と、よくぞ聞き取れたものであると感心する。にゃんじゅごうるあ、と、なんじゃこりゃあ。まるで接点が無い。

ウヨクはもう一本、またもクラッカーを空気だった空間から発生させると、パァン、と小気味良く打ち鳴らす。出て来た紙に書かれていたのはまたも『交流会』。何だ、強調したいのか？同じことを二回言うなと叫びたいが、僕は様子見をすると決めたばかりだ。黙っていよう。

ウヨクは背後よりピンクの薬中熊（ラリってる）のぬいぐるみを鷲掴みにして、『交流会』と書かれている紙をぬいぐるみのおでこに貼り付けてみせる、という謎の行為をしてから、またもドヤ顔した。まったく意味がわからない。『交流会』をおでこに貼り付けたラリッてる熊のぬいぐるみは、まさにキ〇ガイで怖い。おぅ、怖い。僕はやっぱりこの空気の中では何も言えないよ。

ドナドナと犬少年の二人の馬鹿みたいにうるさいおやつを貪る音が、しばらく馬車内で響いた。ウヨクも案外、『交流会』をぬいぐるみに貼り付けてからは何も喋らず、僕のように様子を窺っているように見える。もしくはおやつばかり食べる二人に呆れて喋り出せないのかもしれない。知らんけど。とにかく、空気が変に重い。薬中の熊ぬいぐるみの見た目怖い。ウヨクの冷めた紅蓮の眼つきも怖い。どんどん空気が重たい鉛に沈められて、深い腐海の底に沈んで窒息するかのような。悪環境と化したこの部屋で、三発目のクラッカーが打ち鳴らされた。

そこに書かれていた文字は、今度は交流会ではない。

『第一種目』
と書かれていた。何か運動会みたいなノリだね、と心の中で思ったが口には出さないでいる内に、もう四本目のクラッカーが打ち鳴らされていて、そこに書かれていた文字が、
『セックス』
だった。見間違いではない。性交である。僕の頭の中は真っ白になって、口があんぐりと開いてしまって、思わずウヨクに顔を向けると真剣な顔つきである。その次にドナドナと犬少年に顔を向けると、おやつを食べる手の動きが完全に停止して、唖然とした顔がそこにあった。部屋はただでさえ静かだったものだが、おやつを貪る音すら止んで、馬車の車輪の軋む音とパトリセア&ナツウロロの走る音だけが聞こえる。僕はもう一度クラッカーから飛び出した文字を見た。『セックス』やはりそう書かれている。しかもその手前には『第一種目』と書かれた紙。ウヨクは露出狂どころのレベルではなかったということだろうか。とにかく、開いた口が塞がらない。
僕はもう様子見をしてるのに耐えられなくなり、
「色の濃い冗談だね、これ」
とニヤけながら人差し指を第一種目セックスに示してみた所、紅蓮の眼つきの鋭いのに睨みつけられて、
「冗談？」
と厳しい口調で言われたのでまごまごさせられた。こいつ、マジなのか…魔法使いってみんなこんなに大胆なのか、と生唾飲み込みそうになったが、いやそんなナサケナイ様でいていられるかっつうことで、ごほんと咳をしてから、
「いやいやいやいや」
とごまかしてみた。何をごまかしたのかよくわからないけど、ごまかしてみた。で、そのまま場がまた沈黙するのが怖かったので、笑ってみた。大声をあげて、蛙が田んぼで騒がしく鳴くのよりも騒々しく鳴いてみた。すると、共鳴が生じた。犬少年とドナドナも大声で鳴き始めたのである。ゲコゲコとはいかず、だはは、という感

じだったが、僕達は蛙が集団で鳴き喚くよりも五月蝿かったことであろう。だが共鳴は三人だけでは終わらない。ウヨクも共鳴し始めて、彼女も大声を上げて笑うのだ。だははははっ、だははっ、ははっ。馬車内は、さっきまでの腐海へ沈み行く暗さが嘘のように明るく変わった。わけわかんないけど僕らは笑いまくった。これが笑いというものの本質なのかもしれない。わけが分からないけど何かもう楽しいというね。

「いや、笑ってる場合じゃなくて、マジですから」

唐突に楽しさは終わりを告げた。めっちゃ笑ってたウヨクは急に真顔になって声付きも真剣そのもの。僕らはまたも呆然とする他なくなり、だはは……は……は……という風に田んぼでの共鳴は終焉し、車輪の軋む音が聞こえる静寂が再度訪れてしまった。なんという状況だろうか……。沈黙が痛いので、僕はとにかく思いついたことを喋る。

「…どういう理由で？」

彼女は即座に答える。

「いや、したいから。やりたいから」

鼻血出そうになったわ。やはり彼女は真剣な眼差しでハッキリ、キッパリ、言うのだ。僕はそのあまりの物言いに何を言えばいいのかわからなくなってきた。すると数秒後、彼女は、

「いや、魔力を溜め込むのに効率が良いんだよ、性交は。それが本当の理由です」

などと言った。からかわれているだけの可能性もあると疑っていたけど、こう理由を答えられるとマジな確率が上がってるとわかる。まあ、露出狂のウヨクからすれば、まだ知り合って数日しか経っていない性病を持っているか持っていないかもわからない、しかも一人は犬少年、と性交することなど何てことは無いのかもしれない。大物でしょうか。それとも阿呆なのでしょうか。

こんな言葉で戸惑わされている僕ら三人は、小物かもな。

そう思いながら、これから大きな事を成さなければならない使命

を背負っていることを思い出して、小物という性質を持ったままでは大事を成すことなど不可能ではないか、という気持ちになった。だから僕は怖がっている場合ではない、唖然としている場合ではないと思い。

「なるほど、なるほど、なるほど」

と三回言ったが、『よろしいでしょう』、という言葉が出てこない。やはり小物じゃないか、と自らの心の中で自らを戒める。よろしいでしょうと、口が裂けても言えそうになかった。僕は記憶がないが、もしかして童貞なのだろうか。それとも記憶が無いだけで、経験済みだろうか。まあどちらでも良いけど。今確かなのは、今僕があまりにナサケナイ状態だということ。

ドナドナと犬少年も、何か言えばいいのにずっと黙ってる。ドナドナは何か驚きの感情のまま思考停止でもしてしまったみたいに石像化してるし、犬少年は鼻血出してティッシュで鼻を拭いている。ぶっ、何たるパーティーであろうか、もうちょっと男らしい男がいなければ大事など成せる訳がない。恥を知れって奴だな。

そんなことを思う僕自身も恥を知らなければいけない側だけどね。はぁ……。

ピンクの壁に取り付けられている鳩時計から、小鳩が飛び出してクックルポッポー。間抜けな僕らに似合いな、馬鹿みたいなクックルポッポー。

部屋はやはり静まり返った。鳩時計が静まった後の沈黙は、針で刺されるかのようにチクチクとするのだった。

ぷ……ぷぷ……

ぷぷぷ……ぷぷ…

ぷぷ……ぷぷぷ……

ウヨクが笑っている。笑いを堪えている。

彼女はセックスと書かれている紙を手に取ると、その紙の一部分に爪を引っ掛けるという仕草をしてみせた。そしたら、爪によって何かがペロンと剥がされた。シールのように。剥がされたのはセッ

クスという黒文字それ自体だった。そして新たな文字が紙に書かれていて、こう読むことが出来る。

『騙されたなエロ男ども。本当の第一種目は料理対決だ。もっとも上手に料理を作ることが出来た者が、料理当番の役割をこなすことになる。それを決めるのが、第一種目だ！！！』

やけに長文だったので読み終わるのに時間がかかった。でも読み終わってからも、微妙に意味がわからない。騙されたせいで頭が麻痺してるのかもしれない。

ドナドナが大きな笑い声を上げた。ははははは、と今まで石像だった分も声を発している感じ。彼の笑い声は轟きとなって部屋中を突き抜けていて、うるさい。

彼はどうやらノリが良いらしく、また気持ちの切り替えも早いらしい。

「言っておくが、私の料理は人を殺すとまで評されたことがある。私を料理当番に出来るなどと、思うなよ」

どうやら新たな戦いの火蓋が切って降ろされたということらしい。料理を一番上手く作ってしまった者が料理当番。

すなわち、いかに料理を下手に作るかが戦いに勝つための条件…

……！

ウヨクにからかわれた直後のこの状況。流れは彼女にあるかもしれないが、これ以上彼女を調子に乗らせては、男子の面目がまったく無いというもの。

糞のような料理を、作らなければなるまい……！

26

「みんな異論とかは無いんですね？　じゃあ、やりましょうか。料理対決」

「構わないよ。一番上手な料理を作った人が、料理当番を担当するってことだよね？」

「そういうことかな。どうせなら旅の道中、おいしい料理を食べながら進んだ方が、心も休まると思うし……」

「俺はもう随分やる気だぞ…。二度目だが、俺の料理は殺人兵器と呼ばれたこともあるからな」

「自慢できることではないと思いますよ。うひゃー」

「自慢してるわけじゃない。ただ、俺と争うならば、それ相応の覚悟をしておけってことをな…」

「ちょっとムキになってる気がしますよ。うっほほ」

「鼻血、まだ垂れてるぞ、エロ犬」

「あうあう」

「……ま、ドナドナも犬少年もやる気みたいだし。僕も別に異論はないよ。料理とか、上手に作れる気しないし……」

「それは私もそうですけどね。女だからって、料理が上手いとは限りませんよ」

「…ふふふ、全員燃え上がってきたな。では始めるようじゃないか」

「ドナドナに仕切られると…」

「そういう言い方はよしなさい」

さて、何故僕達がウヨクという魔法使いに頭があまり上がらないのかと言えば、彼女が〈顔の無い天使〉戦において圧倒的な戦力となってくれていて、つまり僕らと比べて活躍しているから頭が上がらないのであるが、その為に突如として交流会第一種目料理対決などと提案されてそれを拒否することが出来ないのである。はい、や

りましょう、という流れになってしまうのである。
そうここまでは僕らは押されっぱなし。負けっぱなし、と言える。
だからこそ、この料理対決、負けるわけにはいかないということ。
僕はナラクの下僕ではあるが、ウヨクとてナラクの下僕という立場なわけである。つまり同等の立場。ライバルということ。遅れを取り過ぎれば舐められるのは当然。彼女から見て僕に対する評価はおそらく、人面瘤という交渉物の一部分、パーツ、と言った所だろう。半ばそれが間違っているとは言えない状況なのが困ったことだ。現実、僕自身とて戦力と呼べるほどの活躍をこなしてはいない。
なればこそ、超絶に糞な、うんこな、吐き気を催し二度と食べたくなくなってしまうような、史上最低最悪な料理を作り出し、料理当番などという役割を他者に押し付ける必要が……あるのだ！犬少年かドナドナ、できればウヨクに押し付けたい！料理当番を押し付けることが、僕が下僕としてのランクを上げるためには、必要なのだ……。
僕は布団から立ち上がると、冷蔵庫を開けて中身を確認する。がちゃがちゃがちゃ、と面白い音が鳴ったかと思うと、冷蔵庫が左右に大きく内側から広がって、僕からの視界百八十度全てが食材の色鮮やかに染まる。これも魔法の力だろう。
「ここにある一ヶ月分以上の腐ることのない食材。ここにあるのは全て、使って良いんだよな？」
「うん、ルールはそんな感じでいいでしょう。冷蔵庫にある食材を使って、一番上手、うまい、料理を作った人が優勝。優勝した人はもれなく料理当番の役割を与えられるってことで」
「おっけー……」
そのルールにどこか穴はないかと想像するが、特に思いつかない。
犬少年とドナドナも立ち上がり、ドナドナは、よっし、などと言って意気込みんでから、
「自分の料理に魔法を使って味を悪くするのは禁止だぞ、ウヨク」
と言った。

僕はなるほどドナドナの言っていることはもっともだ、と自らが不孝だったと思い知る。ウヨクが魔法を使うことは充分に考えられるのだ。

「そうだね、それは禁止だ。当然だけど」

と言ったが心の中では（危なかった）などと思っている。心の声なので聞かれてはいない。だがそこでハッとする。例えばウヨクは人の心を読み取る魔法などを覚えているのだろうか、と。魔法の力は一体どんな所まで利用可能な代物なのだろうか、と、うすら寒い思いになった。

（だから魔法の力を独占しているノーザンス湖の都市の連中は、他の都市の反感を買うのか。魔法がどんなことをしでかすのか、その技術が隠蔽されている限り、予想もつかない。心を読む魔法なんて、普通にあってもおかしくはない。そういう不気味な力を持った連中が、魔法使いだよな！）

そんな連中と交渉をしに行かなきゃならないのか、と思うと　嫌気が刺してきた。

だが、だからこそ、この交渉を成功させれば見返りは大きいと考えることも出来るとも言えるが……。

「何をむっつりしてるんですか。そんなに警戒しなくても、ずるなんてしませんよ」

背後からウヨクにそう声を掛けられて、びくっとしてしまう。今、心の中を読まれた訳じゃないよな…ただ単に塞ぎ込んでたから、気にかかれただけか…？…。

「いや、何でもない。よし、はじめよう。誰から作り始めるんだ。それとも〈顔の無い天使〉を倒してからにした方が安心して調理が出来るんじゃないかな。キッチンは一つしかないし……」

「そうだな。その方がいいかもな」

ドナドナが僕の意見に賛同する。

ウヨクは首を横に振って、魔法の力は便利なんですよ、とまたドヤ顔した。

ぱちん。

彼女の指が鳴らされると同時に、馬車内の様相が一変し、キッチンが部屋の中に四個完成させられていた。やはり魔法の力は凄まじいんだな、と僕は息を飲む。

「〈顔の無い天使〉に襲撃される前に料理は完成させましょう。そうだ、時間制限を付ければいいかな。四十五分くらいにしましょうか。丁度良いんじゃないですかね。どうですか」

〈顔の無い天使〉は最低でも後一時間は襲撃してこないだろう。その間の時間を潰すという意味では、四十五分という制限時間は丁度良いと思えた。だから僕は異論を唱えず頷く。それは他の二人も同じだ。

第一種目、料理対決が、そういった事前の決め事の元、開始されました。

東西南北、四方向にて向かい合い、小鳩がクックルーと十五分置きに小さく鳴く瞬間を、全員で向かい合ったまま待つ。それぞれのキッチンに冷蔵庫が一台ずつ設置されているのだが、その中身というのは全員で共有している。どういうことかというと、誰かが冷蔵庫内から、一つしかないわさび、を取り出したとしよう。すると全員の冷蔵庫から、一つしかないわさび、が消える。中身の何を取り出すかは、早い物勝ちというわけだ。北に僕。南にウヨク。西に犬少年。東にドナドナ。四方向で向かい合う僕ら全員が、火花を散らしたまま、小鳩の鳴く瞬間を手に汗握りながら、待つ……！

そして。

――クックルー。

鳴き声が響いた瞬間。全員の動きが眼で捉えられない程に素早く動いたが僕も負けてはいられない。速攻で冷蔵庫開けて何を取り出そうかと迷うこともせず鷲掴みで手当たり次第でいくつか取り出してやろう、としたが考えることは皆同じ、僕は空を掴んでしまった。一瞬が命取り。どうやら他の誰かに僕が鷲掴みしようとした食材を、先に取られてしまったらしい。ちっ、と舌打ちしつつも手は止めて

いられない、もう片方の手で何かを掴んでやろうと、適当に手を伸ばし食材を掴もうとしたが、またも失策。やけに表面がトゲトゲしているハリセンボンみたいな食材を鷲掴みしてしまい、

「うぎゃあああああああああああああああああ、ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ」

と絶叫しなければ耐えられない激痛。痛い、痛い、と喚きながら冷蔵庫から一旦後退。絆創膏が欲しいがそんなものはキッチンには無い。手は血塗れである。さ、最悪だ、と泣きそうになりながら東西南の様子を窺ってみる。

東、ドナドナは大量の調味料を、ぶっちゃ、ぶっちゃ、と一匹の魚に容赦なくかけまくっている。

南、ウヨクはキャベツをガスコンロで直接熱して、消し炭に変えている。

異様な光景だった。僕は手がハリセンボンによって大出血していることも忘れて、その光景を眺めてしまっていた。キャベツを消し炭にしたら消し炭が誕生するだけだよ？茶色の液体なんて色遣いがかなり汚いよ？そんなに調味料を魚にかけたら、魚さんは窒息死してしまうよ。もう死んでるんだけどね？

「ま、負けるわけには、いかない……」

僕は閃いた。グミ。巾着袋に手を突っ込んで、腰から外し、中身を逆さにして一つの皿に全部ぶちまける。〈顔の無い天使〉の液体が凝固されたグミ。人間が食べても問題は無い、と以前にナラクから聞かされた。その味が苦痛に歪むくらいに最悪だということも。

（ふ、は、ははは……そうだ、僕は既に最悪の食材を手にしているんじゃないか……！　この勝負、もらった……！）

勿論、グミを使っていることをバレるわけにはいかない。端っこに寄せられた黒光りのテーブルに乗っているグミ瓶を他の三人に使われてしまえば、この対決どころか、〈顔の無い天使〉戦にも差支

える。
　僕は三人から見えない位置に大量のグミを乗せた皿を寄せると、余裕をアピールするための口笛を吹きながら、冷蔵庫を呑気にまさぐって、あとはまずそうな食材を適当にかいつまみ、ぐっちゃ、ぐっちゃ、にしてやってグミ皿の上にドロドロになったそれをブチマケタ。これによって、グミは完全に隠蔽された。三人はこれでグミのことには気が付けない。
　――クックルー。
　小鳩が二回目の鳴き。残り時間は三十分ということだ。いやー、余裕が出来てしまってたね。東西南の連中の様子でも、窺ってみるとしよう。暇つぶし、暇つぶし。
　東、ドナドナはミキサーにさらに食材を詰め込んでいて、茶色の液体を何故か虹色に変えているという逆にすごいことをやっていた。
　西、犬少年は、どういうつもりなのか、調味料を掛け終えてもはや姿が完全に見えなくなった魚を皿から手探りで取り出すと、それを水洗いしてから火で炙っていた。で、炙り終えたらまた調味料の液体山に魚を再度ぶっこんでいた。
　南、ウヨクは消し炭になったキャベツを、粉のようにして、生肉にそれを振りかけていた。まったく意味がわからない。その生肉をどうするのかと思えば、薄切りにして、軽く火で炙ってるなと思ったら、それも最終的には消し炭になってしまっていた。どうするんだろう。消し炭を大量に生産してしまって。
　まったく、それぞれが激マズそうな料理を作っている。
　だが僕のグミミックスにはそのどれらも勝利できはしないだろう。ナラク曰く、たやすく人を気絶させることが出来るくらいに不味いらしいのだから。
　僕は残りの三十分間、料理を作ってはいたが、それは僕に余裕がないように見せるためのフェイク。実際には余裕綽々で、三十分間を待ち、暇だなぁ、と思いながら皆の激マズ料理が完成されていく様を遠目で眺めて、どんどん異臭が溜まりこんで来た部屋内で、吐

き気を催し、この嘔吐も食材として入れれば最強じゃねえかな、とふと閃いたが、それをやってしまったら人間としてオシマイだと思ったので、自ら封印、やめる。だが、

「オエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ」

ドナドナの声だった。まさか、彼は人間をやめてしまったのだろうかと顔を東に向ける。

彼のお皿に嘔吐物がソースのごとくに降りかかっていた。あいつ、終わってる。

不愉快極まりない光景を目の当たりにしながらふと閃く。この激マズ料理、誰が食べて、どれが一番不味いのかを判定するのだろう、と……。死人が出るぞ……と。

鳩時計は遂に四十五分の経過を告げる、四回目のクックルーをやった。時間、だ。

全員の手が止まる。

そしてウヨクは自分の完成品に蓋をすることでみんなに中身が見えないようにした状態で持ち上げて、

「こうすることで発表の時まで、自分の作った料理を見せないようにしよう」

と言った。まあ、その方が対決っぽい雰囲気は出るだろう。蓋を開けた瞬間に恐ろしい異臭が放たれることが恐ろしいが、もう馬車内は異臭で一杯だ。もう吐きそうだ。

まあギリギリまでグミのことがバレないのに越したことは無いので、僕はウヨクの意見に従い、料理に蓋をする。ドナドナ、犬少年も彼女の意見に従い、自らの四十五分の成果に蓋をした。

ぱちん。

ウヨクの指パッチンが鳴らされると共に、四つあったキッチンは消え失せて、一つの大きなテーブルがどかんと中央に設置される。

そのどでかいテーブルに、東西南北、四者の料理が四方向に、蓋を置かれた状態でスタンバイされる。そのすぐ背後に、鼻をつまん

だ僕達が位置する。
「最悪の出来だぜ。殺戮兵器だ」
嘔吐物をぶちまけていたドナドナが得意気に語る。
「悪いけど僕の作品もとんでもない出来ですよ、うぎゃふ」
犬少年なんかめっちゃ顔色悪いんだけど大丈夫だろうか。
「私も正直、負ける気はしませんよ。頑張りましたから」
そういえば何が勝ちで何が負けなのかわからなくなってきたような気がするが、まあ僕も負ける気は一切ない。僕も一言いってやろうと思ったが、あえて無言というのも雰囲気あるかな、と思って、
「……」
と黙っていたら、皆から空気読めよみたいな感じで睨まれたので、焦って言葉を探して、
「まぐまぜんどぉうおう」
と吐き気と焦りのせいでまったく意味のわからない言葉を言ってしまった。く、悔しい。
「負けませんよ、って言ったんでしょうね」
ウヨクは相変わらず翻訳上手だが恥の上乗せをされたような気分で悔しさはより増す。
だが蓋さえ開けられれば……。グミの力であり僕の努力の成果ではないが、これは幸運だったということだ。運も実力の内。四十五分の努力の成果が、十五分で作られた閃きと幸運に破れることもあるのが、人生なのさ、ふふふ。勝つのは北である僕、乙である僕……。
「一斉に開けましょうか」
ウヨクの言葉に、全員が頷く。
「では……オープン！」
東西南北、四つの蓋が開かれ、天下一激マズ料理決定戦のその選手が、今姿を現す……！

27

眩い光が北の側、つまり僕の目の前より放たれた。
黄金の色。それが、僕の方向だけ、から。
今日、僕は何度驚かされるのだろうか。またも唖然とすることになってしまった。
蓋が四者から開かれる時、馬車中には異臭が放たれるはずだった。だけど、何故か僕の蓋の中身だけは光り輝いている。黄金色に。さらには素晴らしいほどに食欲をそそられる匂いたち。湯気がそれらの料理より立ち昇り、僕らの胃がぐるると食を欲求することを促進させる、ってのはどういうことかという黄金の食卓だよこれ。ナラクの館で出されるクラスの料理が、僕の目の前にある。何、どういうことですか、ドナドナと犬少年も唖然として僕の黄金色の皿を見ている。鼻をつまみながら。彼らの皿上には彼らが作っていた最悪な代物、努力の結晶が臭そうな匂いを放っている。そしてウヨクの皿上には……。
「お、おい……そ、それ……」
わなわなと震えながら、その南側の皿に人差し指を突き出した。突き出すしかない。だってその皿上に乗っかっている料理は……。
「ぼ、僕が作った料理やないかー！」
そして叫んでみてから僕はハッとして全てを瞬時に悟った。そして自らの皿上に展開されている黄金の食卓を見下ろし、もう一度だけ僕が作ったはずの料理が南側に展開されているありえない状況に、唖然とし、魔法の力の凄まじさを思い知った。ウヨクの奴、交換しやがった……。
「ルール違反じゃん！　魔法使わないって……！」
「言ってません。禁止されたのは自分の料理に魔法を使ってそれを

不味くすること、だけです。魔法は禁止ね、なんて話ではありませんでしたよ」

「それは、言葉の捕え方であって、僕はあれは魔法は禁止だという意味で……」

「いえ、そういう意味ではありませんでした。ドナドナが発言したことで禁止となったことは、これだけです」

ウヨクは空中にスピーカーを出現させた。そのスピーカーが宙に浮かんだまま、ドナドナの声で音声を発した。

『……自分の料理に魔法を使って味を悪くするのは禁止だぞ、ウヨク……』

録音していたとか、どんだけだよ……と僕は口をあんぐり開けてしまって、本日何回目のあんぐり？って感じ。確かに言っている。そしてそれを禁止でいいね、と頷いた僕自身の姿は覚えている。

ウヨクはスピーカーを空中から消すと、ふぅ、と息をついて、やれやれ、みたいなジェスチャーをしてからこう言った。

「あなたがズルをしなければ、こんな酷い手段は取らなかったんですよ」

僕は驚く。

「ずる？」

少し心当たりがあったので心臓が高鳴る。まさか、心を読まれていたのだろうか。

だがそういうわけではないようだった。

「急に目を輝かせて巾着袋を大きく持ち上げて、満面のにこやかな微笑みで皿にグミをぶちまけてる行為が、目立たない訳がないじゃないですか。犬少年とドナドナは調理に夢中で気が付かなかったみたいですけど、当然私は見てましたよ。あんな目立つ行動。冷蔵庫に入っている食材以外の使用は禁止だって、事前にルールで決めていたはずです。よって、あのグミを使用した時点でテンガの反則負け、という訳です。だからまあ、ちょっと魔法で小細工して、あなたは最高に美味しい黄金の食卓を作り出したので、まあ今回の料理

対決、勝者はテンガってことにしてあげました。だから料理当番はこれからテンガです。反則してなければ私も正々堂々、魔法なんて使わずに決着を付けましたけど、卑怯な奴を見逃す訳にはいきませんでしたので。はい」

よくもまぁ、舌が回るものである。

だが完全にロンパされた感じでもある。

もう僕はぐぅの音も出なかった。ドナドナと犬少年が鼻をつまみながら、僕を哀れんだ眼つきで見ている。何か僕が臭いみたいだから、鼻を摘みながらみるのは止めて欲しい。でも止めろと発言する気力すらもう無い。僕は勝者。つまり負けである。反則負けである。僕は閃いた時にめっちゃテンションが上がっていて、冷蔵庫の食材しか使っちゃいけないという取り決めを忘れていたのだ。なんたる間抜けであろうか。また負けてしまった。完全に下僕。下僕らしいみっともなさ。もう恥ずかしくて外を歩けない。もうダメだ死にたい恥ずかしい。黄金の食卓を最期の晩餐にしようかな。おいしそう。でももうすぐ〈顔の無い天使〉も来るだろうから食ってる暇は無いかな。あ、〈顔の無い天使〉に殺されれば丁度良いじゃん。下僕らしい終わり。うんうん、もう参りましたよ、はいはい、負け組万歳。なんたるナサケナサ。

そういう訳で、僕は寝込んだ。〈顔の無い天使〉に殺されに行くという気力も、何だかぐにゃぐにゃしている内に失せてしまって、布団に潜り込んで、黄金の粒子と遊ぶことで、ふへへ、と塞ぎ込み状態を楽しむという有様に陥ったのである。

「ちょっと起きてくださいよ。人面瘤に液体吸わせないと」

「何時まで落ち込んでるんですか。たかが料理当番じゃないですか、うほーん」

「俺だけじゃ時間稼ぎしんどいからさ、おきなって。もうテンガとか言わないから、おきなって」

「って、それもう言ってますよドナドナ。ぼほほ」

「あ、ほんとだ。てへっ」

「てへっ、じゃなくて。本当に出てきてくださいよテンガ。ひきこもりですかあなたは。今回のことはこれから先、交渉先の魔法使いもこれくらいの小手先はやってきますよ、ってことをあなたに伝えて起きたかったということでもあるんです。料理当番なんて本当はどうでもいいですから、魔法で何とかなりますから、出てきてくださいよ。ねっ？」

「もう意気地無しだなーテンガは。あ、テンガってまた言っちゃったよ。のほー」

「お前、おい、テンガがまた落ち込んじゃうだろテンガって言ったら。やめろよな、本当」

「テンガって言ってるじゃないすか。ひどいのはどっちですか、ぬぬ」

「お前らどっちもひどいですよ。テンガ、これは多分、布団の中で泣いてますよ。咽び泣いていますよ。きっと悔しいんでしょう。そんな落ち込んでる人にテンガなんて呼んで、あ、言っちゃった」

「ウヨクもひどいなぁ。わざとでしょ、今の。テンガにも聞こえましたよ今の。ね、テンガ？」

「おーい、テンガ、出てこいよー。野球しようぜー」

「それはジャイアン。……今のは置いといて。テンガをのび太と一緒にしちゃ可哀想でしょ？」

「そ、そうだった。テンガはテンガだった。のび太じゃない。テンガ、お前はテンガだ」

「テンガ、テンガ！」

「テンガ、テンガ！」

「テンガ、テンガ！」

「いい加減にしろおおお

し蹴りを放ってから頭突きを手当たり次第に放って、人面瘤にグミを食べさせて刀を口から吐き出してから、血を見てぇようだなぁ、と低くうなりながら馬車内のそこら辺に逃げ回り出した三人の姿を追いかける。鬼ごっこ。僕はマヂギレしている鬼。三人がキャー、キャーと逃げ回る。

そのうちに三人は馬車の外に逃げ出していったが、その程度で僕が追いかけるのを諦める訳がない。テンガと呼ばれ捲くった怒りを湯気として全身から立ち昇らせたまま、刀という凶器を持ち墓標荒野に飛び出る。

そしたら三人が、逃げるのではなく、パトリセアとナツウロロの両隣辺りで立ち止まっていた。その背中に思いっきり斬り付けてやろうか、とも思ったが、様子がおかしい。

どうしたのだろう、と思って、どうしたの、と声を掛けるが、返事が無い。その代わりに、ドナドナが指を突き出したので、その方角に目線を合わせる。

「……」

僕は、もう、唖然とするのはこれで最後にしたい、と思った。

〈顔の無い天使〉が百体ほど、馬車の進路のその先で、立ち塞がっていた。

28

開いた口が塞がらないまま、あの”蜂の巣”を眺める。

〈顔の無い天使〉の群生、とでも呼べば、いいのだろうか。

赤、青、緑、白、オレンジ、黄、の六色が不規則な形で集まっていて、それぞれの色が、点滅している。

チカァ、チカァ、と目に眩いがＨＯＭＥ　ＴＯＷＮのような暖かみのある街灯の安らぎは持ち合わせていない。点滅の色遣いと、背景が、荒野と、さらに向こう側のツララ氷森林の黒い影であることなどの影響が相俟ってか、実に〈顔の無い天使〉の群生が恐ろしく見えるが、それは当然。当たり前だ。暴力によって破壊を行う天使なんてね。

何なのあれ、並び方のせいかなんか蜂の巣みたいに見えて、色鮮やかな幼虫が巣の中から餌を欲しがって点滅しているみたい。ここにあっしがいるぜ、みたいな可愛らしい幼虫のアピールみたいな。と、それならば実に問題は簡単で、幼虫たちのアピールに気が付かないフリをして口笛吹きながら馬車を通過させてしまえば済む話。幼虫が毒針を突き出すわけじゃあるまいし。だが、蜂の巣の幼虫というのは比喩に過ぎず、あれは間違いなく〈顔の無い天使〉という敵であり、僕らが四、五体で苦戦していた破壊の象徴。

今までの二十五倍程の戦力が。破壊衝動の塊が、あそこで群がっている。

明らかに僕らの足止めをしている。僕らを標的にしている。何せ、点滅の全てがこちらに向けられているのだから。チカァ、チカァ、と点滅を繰り返しているのだから、今すぐにでも百体全ての群生が僕らを馬車ごと呑み込んで、殴殴殴殴と僕らを抹殺してもおかしなことではない。

全員が『死』ぬんじゃないか。

僕は、悪い子はいねぇがー、みたいなテンションで馬車内から出

てきた時、テンガ、テンガと呼ばれながらも気分は高揚していた。乙として甲を楽しんでいて、孤独から離れていて、僕はお祭りで皆と楽しみを共有しているような感覚を味わっていた。でも一瞬で、それは冷えてしまった。固まりついて、もう上手に動けない。僕はギコチナクなって、巾着袋を上手く掴むことが出来ないのは、握力が出ないから。喉が詰まってる。息苦しい。刀を握ってる感じがしない。心臓の鼓動。無限牢獄に帰りたい。こんなところにいるのは、おかしいことじゃないか。

「パトリセア、ナツウロロ！　方向転換だ、今すぐに、逆向きへと走るんだ。方向転換しろっ！」

　ドナドナが全力で叫んだ。暗闇の中でもわかるほどに、血管がびききっ、と額の辺りから湧き出ていた。それ程に強く叫んでいた。こんなドナドナは初めて見る。記憶がないから正確にはわからないが、こんな彼は滅多に見かけるものじゃない。ウヨクも見るからに焦っていて、

「私が魔法で足止めくらいは出来るからッ」

　と僕らに向って言ってくれているし、犬少年は懸命に吠えている。僕は犬少年の頭を撫でながら、

「これは死ぬのかもな」

　と、これは僕にだけ聞こえるように呟いた。みんなに聞かせてはいけない言葉だという自覚はある、後ろ向きな呟きだったが、これが僕の本心でもあった。そして『死』について考えたく思う。死んだらどうなるのだろう。死んだら僕はどうなるのだ。僕は僕じゃ無くなるのか。それともまた次の世界が僕を待っているのだろうか。それならいい。死ぬなんて、きっとたいしたことじゃないんだ。だからここで不様に果てることも、案外……。

「……」

「テ、テンガ……？」

「いや、なんでもない。よし、逃げよう。ひとまず退散しよう。朝辺りにはあの蜂の巣も無くなっているかもしれない」

「蜂の巣……ああ、そう見えなくもないかもしれないですけど…大丈夫？　うふふん」
「問題ない。よし、馬二頭の方向転換は終わったな」
パトリセアとナツウロロが蜂の巣とは逆の方向に足を向けてくれた。馬も焦っているらしく動きに落ち着きがなく、足がもつれるのでは、と心配だが転びはしなかった。
「急ぎましょう。ステルスを発生させているので、まだ〈顔の無い天使〉には私たちのことが見えないはずですから」
「さすがだなウヨク。便利なことだ！」
「ふふっ、才能あるんですよ」
「自分でいうもんじゃない。格が下がるぞ」
そんな会話を交わしながら馬車内に戻った二人に続いて、僕と犬少年も馬車内に入る。まだ少し思考がふわふわとしているが、ぼーっとしている場合じゃないと頭を振る。
「よし、急いでくれ」
馬二頭にそう告げ口笛を吹くと、彼らは急加速を付けて駆け出す。今までと違って乗り心地が悪い。ひどく揺れ、人によっては吐き気を催すだろう強い振動。僕は揺られながら、頭の中でさっきの蜂の巣の光景を思い返す。身震いがする。〈顔の無い天使〉は得体が知れない。あれだけ密集されたらミミズが土の中に千匹くらいいたかのようにキモチワルイ。のっぺらぼう。色彩だけの点滅するのっぺらぼう…。
「何か様子が変じゃないか？　あいつ」
「まあ、怒りが治まってくれたと思えば構わないんですけど、黙られると逆に怖いかもですね」
「りゅーしと遊んでるんですよ、ぐふふ」
「りゅーし？」
「ええ……テンガは……」
三人が僕の背後辺りで会話をしている音量が、どんどん遠ざかっていく、小さくなっていく。そんな中、会話をする気にならず、聞

こえない振りをして立ち上がって、水晶玉に目をやった。青空色。どうやら、連中を撒く事が出来ただろうか。…よかった。

と思った途端に、

危険を伝える紫色が生じた。それも濃い、濃密な紫。

「やばいんじゃないのか……！」

僕が唸るようにして声を発した途端に、照明が消えて馬車内が暗く……。

光を発しているのは、蛍光するグミ瓶と、紫色の水晶玉だけ。それらの仄かな光に当てられて僕らは暗闇の中でわずかに浮かび上がる。静寂。静かだ…、僕ら四人は互いに見合って、しかしお互いに何も言わないまま様子を窺う。馬車はもう停止している。

僕はガタガタと全身が震え始めるのを止めることが出来ない。「百体なんて、魔法でだってどうしようもないだろ……？」声が悲痛を纏っているのが自分でもわかるのに、その悲痛を抑えることができない。みんなが悲痛を抑えて息を飲んでいるが、冷静でいられるか、今すぐ、〈顔の無い天使〉が馬車内に雪崩れこんで来るかわからない…。天井を潰して現れることもあるかもしれない…死んでも次の世界があるかもしれないから、いいんじゃないか……さっきまではそう思っていたが、僕は蜂の巣の点滅を思い出してジッとしていられなくなる。

「逃げよう。ここにいても、危険なだけだ」

「待て、方策をまとめてから…」

そんな方策をまとめている時間があるわけがない。もう囲まれているのだ。囲まれているから、馬は足を止めたし、馬車内は暗闇に包まれたし、水晶玉は濃密な紫なわけであって。急がなければならない。だがドナドナやウヨクが戸惑っているので、まどろっこしい。

「逃げながら方策を練ればいいさ……」

一応そうやって告げると、二人とも渋々、というか何事か迷っている様子だったが納得してくれたらしい。じゃあ行こう、って流れになるんだけど、ソノ前にウヨクが魔法を使用する気配を見せた。

「ここにいたら周りの状況も窺えない。だが、魔法の力で馬車を透過すれば、ここにいても周囲三百六十度の景色を確認することは出来ます！」

そう叫びながら彼女は、魔法の発動のためと見える仕草。それによって馬車の壁や天井、床がみるみる透明となり、外の景色が透けて見えるようになった。

そして状況が明らかになった。

見えてきた光景。

「……」

僕達は逃げることさえ出来ないことを理解させられてしまって、絶望に瀕する。これは四人とも同じ気持ちだったと思う。だって、百体が僕らの上空も含めて、三百六十度全ての逃げ場を防ぐようにして、浮かんでいた。ぷかぷか、とのっぺらぼうが六色に点滅して……！

パトリセアとナツウロロが、殺されている。首と身体が分離して、首を〈顔の無い天使〉が収穫物とでも言いたげに誇らしげに持っていて、首の切断面から、ぼた、ぼた、と血が垂れているのが透過越しに見える。パトリセアとナツウロロはもう殺されてしまった。だとしたら次に殺されるのは誰だ？次に『死』ぬのは誰だ。

それは当然、僕達だ。

「終わりだね」

僕は独り言のように、でもハッキリとした発音でそう呟いた。そしたら気が付いたら、ナラクに首元の襟を掴まれていた。おお、怖ッ。

「簡単に終わりなんて言わないで下さい。まだ手段が、……」

ウヨクは口ごもってしまった。紅蓮色の両眼は怒りに染まっていて力強い。でもその火が少しずつ弱火に変わっているのがよくわかる。少しずつ彼女も諦めているようだ。そりゃそうだ、彼女は魔法使いなのだろうが、何せ数が、ね。百体。僕達は不幸の星の下に生まれたのだろう。運が悪かったんだきっと。だから、諦めるしかな

いんだと思えばいい。
僕はウヨクの力が弱ってきたのを見計らって、彼女の両手を僕の襟から離させる。その両手は随分と熱い。僕の手が冷えているから、余計にそう感じたのかもしれない。
ドナドナが、座った。犬少年も、それを見てから座った。
ウヨクは透過の魔術を止めてから、座った。僕は最後に、座った。
しばらくみんな黙り込んでいたが、沈黙に耐え切れなかったのか、ウヨクが声を発した。
「魔力を暴走させて自爆するという手法もあるんです。そういうことをすれば皆、巻き添えになって死にます。ですが、〈顔の無い天使〉に殺されさえしなければ、本当の意味での『死』にはなりません。八十年周期のこの世界で、また零からやり直しとなった時に〈腑抜けた悪魔〉の手によって再生させてもらえます。ただ、問題は、もしかしたら八十年周期の世界はもう今回限りで、終わりになるかもしれない、ということなんです」
「どういうこと？」
あまり意味がわからなかった。
ウヨクは続ける。
「革命への希求は各地で広がりを見せ始めています。そして革命派は、この八十年周期の繰り返される世界という仕組み自体を変えてしまおう、という目標を掲げている。今、私たちのように、唯一の保守派であり革命派のもっともの敵であるノーザンス湖の魔法使いたちに交渉を持ちかけたり、あるいは滅ぼそうと準備をしている人というのはたくさんいるんです。それほどに、革命派の意識は高まっている。おそらく、この世界での革命が成功する確率は、五割程度は、ありえると私は思います。革命が成功すれば『再生と破壊』の八十年周期のこのルーピックキューブは、仕組みとして崩壊することになるでしょう。つまり、私が今ここで皆を巻き込んで自爆しても、みんなは本当の意味では死なないのがこれまでですが、革命が成功すれば、再生されないんです」

「でも、それってつまり、〈顔の無い天使〉によって『死』ぬよりは、再生の確率は五十パーセントである方が生き延びる確率としては高いってことだよね」

「そうですね。革命が失敗すれば既存の世界は続くことになります。となれば、もし私の自爆によって死に、本当の意味で『死』ぬことを回避さえすれば、保守派が勝利した場合は私たちは既存の世界の恩恵で、復活することになります」

「なら。そうしようよ。生き延びる確率は高い方がいい。保守派が勝つことは革命派の僕らにとっては悔しいことかもしれないけど、でも今『死』ぬよりはきっといいよ」

僕は本当は革命が成功しようが失敗しようが、どちらでも良い立場なのが心の内での声だった。僕は所詮下僕に過ぎず、世界がどう変わろうが、それはそれで甲であることは変わらないのだから構わない。僕は甲乙の関係性の中で生きていけるなら、死ぬよりはマシだ。死んでしまって、また次の世界が現れてくれるとは限らないのだから。僕はそう心の中で思っていて、とにかく死ぬよりはマシだ、という考えだ。

だが、ウヨクはまったく違う考え方をしているのだった。自爆について提案したのは彼女だと言うのに。彼女は僕の言葉に首を横に振った。

「私は『死』んでしまった方がいいと思っています」

何を言っているんだと耳を疑った。死んだらそれでおしまいじゃないか。

だが彼女は続ける。

「革命派の敗北を前提にして、まるでそれを願いかけのようにして自爆をするという選択は、提案した私が言うのはおかしく感じられるでしょうが、それは二人にそれを提案される前に先手を打っておこうと思って言った言葉であって、その選択を選びたいと思っての発言ではないのですよ。私は革命派の勝利を信じている。世界が変わると信じている。この八十年周期で全てが滅び、再生されるとい

う世界のシステム。それは変わらなきゃいけないんです。魔法使いの国だって、革命が起きれば変わる他ありません。魔法使いの国が変われば、この世界には魔法の力が広まっていくのです。そうすれば世界はもっと発展する。著しく発展すると私は思います。餓死をする人もいなくなり、無益な争いをする必要だって、無くなる。そういう大きな大きな人間にとっての益が生まれる、絶対的に成功されなくてはならない革命が、今起きている革命なんです。だから私はそれが成功する未来しか信じない。ゆえに、それが失敗する未来を願うような行為をわずかでもしたくはない。つまり、自爆をして保守派が勝利し五十％の確率で生き延びることを願うのなんて糞食らえ、だったらさっさと『死』んでやる、というのが私の意見です。考え方です。これは変える気はありません。ですから三人は、死ぬなら自分たちで勝手に自害してもらえるとありがたいです。これは言っておかないと駄目なことだと思ったので、長々とですが、言わせてもらいました。私の決意です。随分と前から、決めていることです。この修羅場だからこそ、これを宣言しておきたかった。長々と、ごめんなさい」

彼女は頭をぺこりと垂らしてみせた。本当に長々と語ってくれたものである。その途中で〈顔の無い天使〉に襲われて殺されてもおかしくはなかった。彼女からすればそれでも問題はないのだろうけど、僕はまだ決心など付けられたものじゃない。

僕には彼女のような一心不乱さは無い。

生きてこそ人じゃないのか。死んだらそれでオシマイだって知らないのか、ウヨクは。

「理屈じゃないんだな、ウヨクは」

ドナドナがそんなことを静かに述べてから、錆びた剣を取り出し、そして僕に向って真剣なる瞳を向け、剣の切っ先を僕に向ける。

「俺はあなたの恩に報いるために、この旅に参加した。道中あまり活躍は出来なかったが、今ここであなたが自害をすることを戸惑っているというのなら、俺が介錯しよう。……痛みは少ない方が

いい」
そして彼が放った言葉で、その行動の意図を掬った。
僕は全身に冷や汗を掻く。たしかに自害をする勇敢さはすぐには湧き出てこない。だが今ここで彼に介錯をお願いすれば、錆付いた剣で多少は痛そうだが、おそらく自らで自らの腹を貫くよりは痛みも少ないだろう。ならば、お願いをするべきなのだろうか。彼に、介錯を。そして五十%での再生を願うか。僕はウヨクとは違う。下僕なのは同じだが、その価値観がまでが同一なのではない。僕は僕の考えとして、そうだ、そうだな……。
「どうした？　どうする」
「……」
「テンガ。頷いてくれるだけでもいい。もしくは首を横に振ってもらってもいいが…俺は恩人であるお前に、どうせならば生き延びてもらいたい。それが俺が恩を返すということにあたるのならば、猶の事」
「……」
「迷っているか」
「……」
嫌な空気が、沈黙を続ければ続けるほど見えない霧となって周囲を纏っているのがわかる。犬少年はもう死を受け入れているかのように目を瞑っている。彼はそうだった、自らの命が消えることを素直に受け入れているのだろう、犬少年は。そしてドナドナ、ウヨク、の目線は僕に向けられている。少し冷やかさが混じっているように見えてきて、そんなに見ないで欲しいと思った。みんなはみんなの信念のような、生き方のようなものを素直に受け入れている。
それに対して僕は、何だかよくわからなくなってしまっている。どうしてだろう。さっきまで『死』んでも良いかと思っていたり、馬車の内で少し楽しんでいたり、逆に逃げようと思ったり、自害を怖がったり。いろんな考えが浮かんでは、また別の形となって僕は優柔不断とはこういうことかと納得し、舌打ちを打ちたくなった。

チッ、と言いたくなってきた。この切羽詰まった状況が嫌だ。誰かにどうにか、してもらいたい。

僕はずっと黙り込んだままだった。何も決断できぬまま、時だけが過ぎていった。

やがて、長い時間が過ぎた。でも、馬車は潰れなかったし、僕らの命は誰一人としては奪われない結果となった。二頭、パトリセアとナツウロロだけが、犠牲となった。

結局、〈顔の無い天使〉は僕らを殺さなかったのだ。

ただその代わりに僕らは拘束される。

百体の統一された動きをしていた〈顔の無い天使〉たちは、魔法使いたちによる差し金だったから、見事なほどにコンビネーションで僕らの逃げ場を無くしたということだった。

保守派の魔法使い。圧倒的な力を持つ、六カ国中でもっとも閉鎖的な国の連中。

圧倒的な魔力をその身に携える旧制部隊（アンシャン・レジム）の隊長、ドリュメサ。僕が後に心の中でサドとあだ名を付けることになる男に、墓標荒野の隅っこで僕らは捕えられたのだ。

29

暗い水の底に半身だけ浸かり続けたような、底冷えの寒さを感じる。

倦怠というべとべとした煩わしさを纏う湿った空気が、感知できる。

何かをされたのだろうか。或いはこれから、何かをされるのだろうか。

息詰まっていて苦しい。だが目を”開けさせられた”。

耳に歌が入り込んでくる。あの綺麗な歌声ではない。不協和音をふんだんに取り入れている苦痛や不安を呼び込む、或いは追い込む、負の音程の連鎖。錆びた鉄鎖となって、これが僕達四人を拘束する手枷や縄の代わりとなっているようだった。身体、筋肉などにも全く力を込めることが出来ないのはこの不協和音の鎖のせいだろう。気持ちが鬱屈するのも、多分。倦怠を感じるのも。

身体は自ずでコントロールできない。何故こんなことに…？ああ、そうだ。

そうだ、捕えられた……。〈顔の無い天使〉を従えていた魔法使い……首を切り取られ、血がしたたる白眼を向いた馬二頭……パトリセアとナツウロロ……蜂の巣…点滅していた天使ののっぺらぼう……。そして、顔の全部分に刺青を彫っていた華奢な男……茶色のローブを身に纏った細めの影。刺青男の魔術によって、そう、捕えられた。

そして、意識を取り戻してから、眼を開かされた先では。

ウヨクが破壊されているのが目に付いた。

――紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……

どのように破壊されているのか。まず、当然のように服は着てい

ない。脱がされて、裸になっている。
その状態で破壊されていた。彼女は。
発狂しているような、感情の込められていないような、言葉の断片が、何度も繰り返されている。少し遠い向こうから耳に聞こえて来るのは、この屋内が広々としたホール。そのような作りになっているから音が反響している。
――紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……
顔全体に刺青が彫られている男の声。
それと僕らの三百六十度を取り囲むようにして建ち並んでいる、百人超えの人間たち。歌を歌っているのはそいつらだとわかる。ゴスペルを集団で歌う人たちのことを思い出させられる。そういう光景だ。茶色と黒のローブ。百人超えが纏っているのは暗めのローブ。黒か茶かのどちらか。
顔全体に刺青を彫っている男は、茶色のローブを着て、裸身のウヨクに表現できない痛々しい行為を連続で行っている。躊躇無しに、止めることなしに、ウヨクは破壊されていた。言葉を発することも出来ないのか、床に叩きつけられたり、身体を裂かれたりしても、彼女は悲鳴を上げることもままならないらしく、黙ったままその大男に振り回されている。八つ裂き。
モザイク処理をウヨク全体に施したいと思えるほど、彼女の有様はひどいことになっていて、肉塊と言っても良かった。べちゃり、と床に打ち付けられる。
あれはもうウヨクとは言えなかった。打ち付けられることを繰り返すことでぐちゃぐちゃになった肉や皮や骨の、ミンチだった。
耳に聞こえる歌は悲劇的な調子で、それも終わることをせず続いている。百人以上の人間たちは左右に身体を揺らしながら、餌を欲しがる鯉がパクパクするかのように大きく口を開けて、音の反響する広いホールに歌を響かせる。ここはひどく寒い部屋だ。照明も冷淡な藍色で、全てが薄まって見える。実際、気温も低いように感じ

る。なのに空気は乾燥していなくて、じっとりとしていて、不愉快な重たさを含んでいる。不愉快な空気。不愉快な歌。暴力的な光景。ぐちゃぐちゃのミンチ。刺青を顔中に施している大男。

立ち上がることも声を出すこともできない。顔を動かし、視線を動かすことが出来る程度だ。

身体中が麻痺している。だが、何もしない訳にもいかないのではと思うから、痺れを堪えて周囲の様子を窺い、まずドナドナと目が合う。その隣に犬少年が死人のように横たわっていたが、呼吸しているようではあるから生きているのだろう。ドナドナも身体を動かすことは出来ないらしいので、僕らはとりあえず目を合わせる以上のことはできない。ドナドナもウヨクの惨状には当然気が付いているらしく、苦々しそうに眉を潜めている。

――紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……

乳房が花びらのように開かされていたし、腸が引き裂かれているお腹から垂れ落ちているのがへその緒のよう。指が切り落とされて血が噴き出していて、最終的には肉片へと堕ちる。腫れ上がった赤みを帯びた肌、魔法によって焦がされた皮膚、魔法の刃によって斬り裂かれる身体。

紛れも無くウヨクだったものだった。

今はただの肉片と言って違いはなくても。

魔法の力によって何度も、何度も何度も、肉片に変えられた後に、元通りの裸身に戻されていた。戻された後には傷一つ形跡として残っていなかったが、また壊されるから関係がなかった。

痛覚はあるのだろうか。意識はあるのだろうか。あるのだとしたら、恐ろしい、世にも地獄という言葉がそのまま当てはまる、苦しみばかりの拷問だ。そこには、他に何の感情も無いように思える。ひたすらに苦しみが与えられる。あの刺青男は彼女を繰返し繰返しなぶり続けて、彼女は繰返しなぶられ続ける。

「うぇ、ええ、ぇえええ」

不愉快さが頂点に達して僕は嘔吐していた。身体のコントロールがほとんど利かない割に、こみ上げてくるものを堪えることが出来ず、吐いてしまった。

その嘔吐物を撒き散らす音が、びちゃ、びちゃ、と不協和音の合唱や、拷問の音、に混じりながらもホールで大きく反響して響いた。だからか、刺青の魔法使いは拷問の手を止めて、僕の方へと顔を向けた。ウヨクの肉片をべちゃり、と床に落としてから、

――おい、おい、おいおいおいおいおい。

と考えられないことをしてるねと驚愕しているような、或いは、心底から呆れているような。そんな声を発しながら、ホールの向こう側より歩いてくるのが嘔吐のせいで霞んだ僕の視界からでも見える。来るな、と生物の本能みたいな感覚が胸奥で騒ぐ。来るんじゃねえよ、狂人が、と。

魔法使いなどではない。

あれは魔法使いに召喚されたサタンか何かだろ、と考えてからその男のことを眺めると、刺青が刺青に見えなくなってくる。あれが元々のその男の皮膚の色なのではないか、と思えてくる。ここは悪魔の部屋なんだ、と僕はわかった。そのプライドの高そうな悪魔の部屋の一部に、僕は嘔吐をしてしまったのだ。

取り返しの付かないことをしてしまったと悟った時には、宙に浮かされていて、片腕を捻られていた。ボキュッ、普段聞かない内部の骨が折れたであろう音、鳴った。ああっ、と僕は思ったがしかし訪れるはずの痛みは無い。またボキュッ、と取り返しの付かない音が鳴ったが、やはり痛みが無い。彼は無表情で僕を折る。捻る。痛みは一切無い。どんどん意味がわからなくなっていく生きているのか死んでいるのか。ここが何処なのか、何時なのか何時何時何時なのか、痛みがほどばしって脳味噌が溶けていく、あるいは、砕かれていく。粒子が全身に行きかってキラキラと眩い、だが同時に血流もほどばしっていて粒子と共に混じって、体外に排出されていくのが痛みが無くともわかる。キモチワルイなんだろうこの感覚は全て

が体外に排出されていき、破壊されていくと共に、諦めという感情、諦観という奴が湧きあがってきていて気が付くと僕は裸体で、元通り傷一つない状態で、悪魔の部屋の床、嘔吐した辺り、で横たわっていた。

そんな僕を刺青男が見下ろしていて、

「……どうよ？　痛くないだろう、見てるよりもやられる方が、気持ちが良いだろう？」

と言った。

僕らはとんでもない奴に捕まったのだと、その一言だけでもよくわかった。

ゴスペルが止まっていた。歌が聞こえない。身体が自由になっている。だから声を出せるとわかった。

臆病さに包まれて何も言えないかと思ったが、案外、口は開いた。

「なんで、こんなことを？」

間抜けな質問のような気がした。だが尋ねたくて仕方がなかった。周囲を見渡せば何時の間にかドナドナや犬少年も肉片と化している。多分、僕も他のみんなが拷問されている時は、肉片だったのだろう。魔法の力、ということだ。一つ疑問なのは、まず、何ゆえに痛みを与えない拷問などをするのかということ。肉片に変えては再生させるなどという、まるでこのルーピックキューブの仕組みのような行為……。

刺青男は、くっ、くっ、くっ、と堪えるような笑いをしてから後には真剣な顔付きになる。そして口を開く。近くで見ると、身長が高いのがよくわかる。二メートル、あるかもしれない。

「…教えて欲しいのか……。そりゃあ、そうだな…こんな所に連れてこられて、肉にされちゃあ……痛みがなくとも…辛いだろうよ…生きてるのか死んでるのかもわからなくなるか……」

この男は恐ろしい存在だと今、ハッキリわかった。

だがかといって震えるばかりで何もしないというわけにもいかない。教えてもらえそうな情報は出来るだけ引き出すに限る。僕は頷

いた。なるべく恐れが表出しないよう、慎重に頷く。
刺青男は僕の頷きを見て、「そうか」と言葉少なに返答してから、また僕の骨の、何処かしらを折った。痛みはやはり無い。ボキゥッ、という不可思議な音だけ。彼は僕の骨を折りながら、うわ言のように、
「紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……」
とウヨクに対してやっていた言葉を繰返し始めた。
そのうちに僕は肉片になっていたような気がする。意識があやふやになっていた頃には、何もわからなくなっていた。
だが一つだけ、拷問の途中に教えられたことがある。
「…これは、儀式だよ…」
儀式にしては手荒にも程があるんじゃないのかな、と肉片になりながら僕は思ったのを、よく覚えている。後に聞かされる所によると、僕らは三日間ほど、この儀式を受けさせられていたらしい。
儀式が終わった後に僕に与えられた部屋は、やっぱり、牢獄。
牢獄の造りは今までで一番、不思議。
魔法で形作られた脱出不可能な監獄だと、入れられた時に説明された。
「僕の下僕生活は本当にどうしようもないな」
と牢獄の中で、人面瘤に話しかけてみた所、スー、スー、という寝息。
案外人面瘤のこととか、切り離されたりなどの処置をされるかと思ったが、何もされなかった。
保守的で、しかも魔法という力の過信があるから、情報収集を怠っている連中なのかもしれない。だから人面瘤が革命派の交渉物だとも知らない、とか。
そんなことを考えながら一人、牢獄の中にいるとき、綺麗な歌声が聞こえてきた。
僕はそれに耳を澄まして、穏やかな寝息をたてた。

何処にいても聞こえて来るこの綺麗な歌声。どういう幻聴なのだろう。

頭がおかしくなったのだろうか。

30

「…出ろ。……お前にちょっとした自由を、体験させてやる」

偉そうな態度、というよりは完全に、お前なんて何時でも殺せる雑魚に過ぎないんだから俺の命令に従ってろよ糞、みたいな感じで舐めきっている態度という風に見える。僕が僻んでいるのか、実際に彼がそういう感情を持ち合わせているからそう見えるのか。舐められているのは間違いないと思うが、僕に拒否権が無いのも、確かだ。

立ち上がり、歩き、牢獄から久しぶりに出してもらう。

刺青の男は僕を背後に付き従えた状態で、下手に動いたら簡単に殺しちゃうから気をつけろ、と忠告してきた。

本当に殺されそうなので、僕はおとなしく彼の背後に付き従うことにした。

通り過ぎる人々は全て、何か良く聞き取れない発音だが、彼に挨拶らしき言葉をかけていく。彼もその聞き取れない発音の挨拶らしきを、返す。魔法使いたちは茶色のローブ、もしくは黒のローブ。男性が茶色、女性が黒色、で分けられているらしい。

顔に刺青を入れている者は多いのかと思ったが、さすがにこの国でも珍しいのだろう、そんな人間は僕の前を歩いているこの男以外にはいなかった。

世間一般で言う”魔法使いらしい”格好をしている連中ばかりで、ローブにトンガリ帽子に魔術の本らしきを抱えている。そんな人間が数多くいる中で、僕は一人黒スーツ。明らかにみんなが注目していた。どうせならローブを一着、着せてくれれば目立たなかったのに。紛れることが出来たのに。

『オセロが一人お通りだ』

そんな意味の言葉の文字を、宙に浮べて光らせている奴がいた。金髪で、いやらしい微笑みを浮べている。四、五人で束になってこ

ちらを見て、ニヤニヤしているのだ。
『オセロが一人お通りだ』という言葉の意味はわからぬが、あの、金髪がリーダーっぽい四、五人に馬鹿にされているとはわかる。僕は連中に睨みを返しながらも、下手に動けば前方を歩いている鬼畜刺青男に殺されてしまうので、睨み返すだけだ。
そんなこともありながら歩いている内に、エレベーターらしきのに乗って、下降、いわゆる地下駐車場、みたいな所に連れてこられた。で、魔法なのにこんなのあるんだね、って感じのイカツイ車の助手席に乗せられて、刺青男は運転席に。
鍵などを取り出すまでもなく、車がエンジンを稼動させて動き出す。
「ま、楽にしなよ。これ、飲む？」
意外すぎることに、刺青男がきさく。ジュースらしきを僕に渡してくるが、拒むことも怖くて出来ないので、あ、どうも、などと言って受け取る。でも途中で、受け取ったジュースの容器をただ持っているだけなのも、隣からの視線が痛かったので、仕方なく意を決して飲んでみると、おお、案外にもフルーティーで上手かった。
僕がフルーティーなジュースを半分くらい飲み終えた頃に、発進した自動車は地下駐車場らしき無愛想な空間を抜けて、高架橋らしきところを走るようになった。
空が広く、様々な色の……〈顔の無い天使〉が飛んでいるのが見えた。僕は思わずジュースの中身を噴き出しそうになったが、それを堪えて、尋ねて良いものかと一瞬迷ったが、尋ねたいという欲求に勝てない。
「あの、あれは〈顔の無い天使〉では……」
刺青男は、んん、と低く唸ってから、
「あれは〈飼われ天使〉だ。我ら魔法使いの魔力によって服従した〈顔の無い天使。お前たちを捕らえる時にも使っていただろう？つい最近のことなのに、もう忘れたのかぃ、オセロな坊や」
「その、オセロってのはどういう意味ですか」

「白黒ハッキリするばかりで、その中間のことを考えることのできない単純野郎って馬鹿にされているってこと」
「そういう意味ですか」
「さっき城内で『オセロが一人お通りだ』書かれていたが、失礼だったと謝るよ。……最近、革命派の連中のことを単純オセロ野郎だと侮蔑するのが流行っていてね。気を悪くしたなら申し訳なく思うが、だが、実際君達が単純馬鹿野郎なのもまた事実だろう？　……ま、当然、君達はそのことをわかっていないのだろうが…」
「……気を悪くはしませんよ。ただの挑発ですよね、保守派側の」
「……いや、ある程度事実も内包しているさ……。今の革命派は、単純馬鹿だ」
「ただ馬鹿だと言われても、挑発以上の意味は為しませんよ」
「……その通りだ…悪いね、ははは…っ」
「……」
チッ、と舌打ちがしたい。この男、僕をイラ立たせるためだけに……。
嫌な気分になり、車内は暗い、会話の無い空間となって無言が続くようになった。僕から話しかけるつもりは当然無いので、窓の外に見える〈飼われ天使〉等が見える、魔法使いの都市の、その景色を眺める。風景。光景。
この都市は、すごいのは確かだ。保守的、とか言ってるからもっと質素な感じ？そういうのをイメージしていたが、ドが付くほど派手で……ＨＯＭＥＴＯＷＮとは雲泥の差だと言っていい。雲がこの都市で、泥がＨＯＭＥ　ＴＯＷＮ。そう呼べる程に、ここは発展している。ＨＯＭＥ　ＴＯＷＮもあそこはあそこなりに都市部は治安も良く、雰囲気があって良い都市だったが、ここはまた別物。
プリンとミカンくらい違う。刀と斧くらい違う。犬と猿くらい違う。山と川くらい違う。雲と泥くらい違う。これはさっき言った。ヘッドホンとイヤホンくらい違う。緑茶とウーロン茶くらい違う。

巨大たる都市。
高架橋を渡りながら眺望し、やがて目に付いたのは、その中心部に聳え立つ巨城。
明らかに何度も増築を繰返したと思わしき部分が多々見られ、構造に欠陥があるような外観をしている。重力を無視したように横に突出している部分だとか、どうみても宙に浮いているようにしか見えない部分だとか。
（これが魔法による文明の発達ということか）
あの居城を見ていると、魔法の凄まじさを改めて実感できる。
魔法という代物の凄みを見る者に伝える、象徴だろう、あの巨城は。そしてこの都市も。
僕がそういうことを考えている間、車内の後部座席の方から、ずっと、寝息のようなものが聞こえていた。スハー、スコー、という呑気な代物なのだが、僕が考え事をする邪魔をずっとしてくれていた寝息だ。
どうやら、後部座席で誰かが寝ているらしい。
誰が寝ているのか。どんな奴が寝ているのか。気になって後部座席の方に顔を向けると、ヘソが見えた。丁度ヘソ。そのヘソ辺りが、呼吸によって膨れたり、萎れたり、繰り返しているのが見えたのだった。
前の座席から後ろに振り向いて見えるのはそれだけなので、僕はヘソが後部座席にいるということだけ認識して後に、また景色を眺めることにした。
（これから何処に連れて行かれるのだろう）
と考え、不安に包まれながら。
しばらくすると、何の前触れも無しに刺青男が自己紹介を始めた。
意味わかんなかった。
「俺は旧制部隊（アンシャン・レジム）の隊長で、名はドリュメサと付けられている。現在我ら、ノーザンス湖を縄張りとする魔法使いの都市は、厳戒態勢を敷いていてな。その原因は勿論、お前たち革命派の数ばかりが多い

連中のせいで、旧制部隊（アンシャン・レジム）は今大忙しだ。で、捕えたお前たちに対する儀式も終え、様々な事務手続きも終えた。それでお前をあの牢獄から引っ張り出してやった訳だが……」

ドリュメサ。またこういう何というか、覚え辛い名前だ。あだ名を考えよう。よし、サドに決定。

そんなことを考えていたら、

「……わかってくれたかな？」

などと、何もわかっていないので困ったが、ここは適当でも大丈夫かもしれないと見当を付けて、

「はい、それなりに」

とごまかすような雰囲気を忘れないまま、首肯した。

ドリュメサは僕の首肯を見て、驚いたらしく刺青の中で唯一まともなその両目を、大きく開いたと思うと、

「本当に良いのか？」

と重ねて問うてきたので、僕は首肯は失敗だったと悟り、

「あ、冗談です」

と訂正した。人の話はちゃんと聞かなければ駄目だな、と思った。

31

「実は、お前にはどうしても一つ、言っておかなきゃならないことがある」
「はい？」
「実の所を言えば、というかさっき言った通り、俺が手助けをしたのはお前だけだ。他の連中はこれから、おそらく死刑。死ぬことになる。そしてお前にも一人、殺してもらうわけだが……」
「いや、え、ちょっと待ってください」
「なんだ」
「さっき聞き逃した話ですか……？」
「聞き逃した？」
「い、いえ。何でも。え、ていうか、え……こ、殺す……し、死刑は、聞き逃したかもしれません。や、やるんですか……そういうことを？」
「当たり前だ。保守派の我々は通常、革命派の侵攻を許さない。歯向かう者たちは全て我らの儀式を経験させて後に刑の執行にて殺す。それが通常の、我々旧制部隊（アンシャン・レジム）の仕事だ。本当なら、お前も殺すところなのだが……俺はお前の命を救おうと思っている」
「……何を……」
言っているのか。まったく、意味がわからないので、先ほどの会話を脳内で繰り返してみた。車内、しばらく沈黙が走るが、僕の脳内は嵐のごとくに荒れ狂い、情報の整理を行おうとするが上手く働かない。殺す。死刑。僕だけが手助けをされた……助かった？……だが残りの全員は死刑……そして、僕にも一人、殺させる、と言ったか……？
どういうことなのか。運転席のサドに顔を向け、とにかく何かし

らを尋ねようと思った時に、ポン、と背後から肩を叩かれたので驚きながら振り返ると、振り返った直後に顔面にパンチ。ぐべっ、僕の顔面にヘソだった奴のソレと思わしき拳が、めり込んだ。

「う、うぐ……」

「こいつ、僕がまったく全力を出していないヘナチョコのパンチですら避けられないみたいだけど、本当にこいつなの……？　ドリュメサがずっと探してた……」

「ああ。儀式の時に、あの人特有の粒子のパターンを発見したからな。そろそろ現れる頃だとは思っていたが、やはり現れてくれた……これで我々保守派、魔法使いの国の安泰は確定的だ。……まあ、記憶を失くしているようだが……リロロペ、この人が記憶をなくしていて良かったな。この人の覚醒が達成されれば、どのような戦力もゴミと化す。この人は何せ、全てを虚無に還すほどの圧倒的な力を携えた、最強の戦鬼、いや違うな、そのように表現してはならないトンデモナイ輩であって、本当は俺たちが平気で話しかけていい存在じゃない！　まあ、今は記憶を失くしているし、変な人格になっているようだから、馬鹿にしたって大丈夫だけどな！　ばーか」

「あ、そうなの。じゃあ僕も馬鹿にしよっと。ばーか、ばーか」

「……」

「あ、怒っちゃった？　もしかして、怒っちゃった？」

「おい、リロロペ。あまり調子に乗るな。お前は寝てろ。腹を壊さないように毛布を被ってな」

「もう充分寝たよ。それに、そろそろ付く頃だよね？　処刑場にさぁ！」

「まだ付かない。お前がいると話が脱線する。いいか、寝てろ」

「ううう、つまらないなぁ」

ツインテールでヘソ出しで幼くて名前がリロロペ。こいつも覚え辛いな。

うん、あだ名はロリペロでいいだろう。

何という、狙ったような存在だろうか。彼女はぶすっと不機嫌に

なりながら後部座席にもたれかかって、そして本当に寝始めた。魔法使いはみんな良く寝るのだろうか。そういえば、ウヨクもずっと馬車の中で寝ていた。

僕は馬車の中での、〈顔の無い天使〉に怯えながらではあった、その日々、のことを思い出してしまって、思い出してから、思い出さなくて良いのにと思えた。何かこみ上げてくるものさえあった。

死刑……？このままでは、皆、死ぬ……。

何とかしたいと思える、のだが。でも、隣と背後には魔法使いという屈強な相手。巾着袋は腰につけてあるが、刀一本で勝てる相手とは、とてもとても、思えない。まだ試していないグミの組み合わせの中でこの二人を同時に相手し、なおかつ倒せる方法はあるだろうか、と想像してみるが思いつかない。それに、この二人を仮に倒せた所で、死刑が中止されるとも限らない。むしろ魔法使いたちの火に油を注ぐようなものか……。だがこのまま何もしなくても、この隣している刺青男の言ったことが嘘でないならば、死刑は執行されるだろう……。

僕は巨城を見上げながら、泣きそうになるのを堪えた。鼻腔がぐーっと熱を帯びてきたのがわかる。

自分はひどく無力だ。仲間を救うこともできない。

だが僕が自らの無力を自覚して打ちひしがれた所で、何が変わるのか。僕がどうしようもない人間だと自分自身で自覚した所で、仲間たちの死刑は中止にはならない。例えば少年漫画、そこには熱い友情があり、どんな苦難をも乗り越える熱い勇気、みたいなのがある。見てる側が気恥ずかしくなるような熱さ、ポジティブさがある。僕が少年漫画の主人公であるならば、仲間が死刑にされると言われたこの状況でも、理屈でこうして不可能だ、無力だ、と打ちひしがれたりはせず、どうやれば彼らを救えるだろうと、必死に考えるだろう。

おそらく、必死で考えられるようになること自体が、この事態を突破できる鍵なのだと思える。

だが僕は少年漫画の主人公ではない。下僕である僕はただの理屈をごねる人間だからだ。そのことは僕自身でよくわかっている。

だから僕はおそらくこの車内の中、後どれくらいで状況が変わるのか、死刑が執行される時が訪れるのかはわからないが、僕は彼らを助ける手段を思いつくことは出来ないだろう。必死さが足りないから。彼らをなんとしてでも助けようと情熱を燃やすことが出来ないから。何故そういう人間なのかはわからないが、そういう性格だから、急に性格を変えたりなんかできやしない。

何も喋る気分にならず、思考も停止したくなってひたすらに気ダルイ。

ドッと疲れた感じに陥って、身体が重たく感じられて、サドとロリペロの息遣い、車のエンジン音、流れていく景色、所々に見受けられる魔法の都市らしい光景。

車と同じ速度で走る人間の姿。空中にプカプカと浮いている道路標識。箒に跨っているローブを纏った魔法使い。〈飼われ天使〉と一緒に空を遊泳している者の姿。透明な壁になっていると思わしき高架橋の透けた壁。うっすらと薄い青空。走る車。

ドリュメサ。サド。旧制部隊（アンシャン・レジム）の隊長。いわば革命派のもっともたる戦闘要員のはず…その仲間らしきリロロペも戦闘能力は高いとみて良いだろう……。

その二人と共にいる僕の方が、実は危険な位置にいるんじゃないのか……？僕を助けるとか言っておいて後で嘘でしたー、と言って僕を悲しませるつもりなんじゃないのか……？つまり、僕は仲間を助けるような余裕のある位置にいるのではなく、僕だって助けて欲しいくらいな訳。

……こんな弱気な人間に、顔全てに刺青を彫っている二メートルの大男を殺せるはずがない。

むりょく。こんなむりょくな思いをするなんて下僕というのは辛いところだね。むりょく、むりょく、むりょく。

「何を考えているんだ？　記憶を思い出せそうか？　覚醒してくれ

るなら、ありがたい話なんだが。あの頃のことが懐かしい……。もう何百年も前のことになる」

「……何百年？」

「そうだよ。今はお前もただの内気な餓鬼に成り果てたようだが、これより以前の世界、まだお前に人面瘤すら備わっていない時。お前は戦乱の世の中で、異彩を放っていたではないか」

「戦乱の世？　僕が記憶を失う前のことを知っている、ということですか」

「そうだよ。だから俺は、お前を牢獄から連れ出し、お前の命だけは救おうと思っているというわけだ。勿論、まだお前はまるで目覚めていないのだから、現在はただの餓鬼だ。覚醒が出来ないとわかれば、お前のことは殺すが、覚醒の可能性が高いようならば、お前を生かそうと思っている。生か、死、か。お前の別れ道、って所だ。その選択の自由は与えてやる。もうすぐその時間はやってくる。この車内の中で、せいぜい考えを纏めて置くと良い……。何、難しく考えることはない。生きるか死ぬか、それだけのことだ」

「……僕の正体を知っている。無限牢獄に囚われている以前の僕を、知っている……？」

「ああ、そうだ。俺ことドリュメサは、以前の世界ではお前と共に戦乱を駆け回っていた経験のある戦士だった。パワードスーツＢａｂｅｌを身に纏ってな。今では、こうして魔法使いになったわけだが」

「僕が……そしてあなたが……」

「まあ、異彩を放っていたお前は、あの激しい戦場の中でパワードスーツも無し、生身で戦っていたがな。ああ、懐かしいことだ。何せ、何百年も以前のことだ。前世から今の世にやってきてから、あまりにも月日が流れた。だが俺は、お前の異彩をいまだ覚えている。まあ、今となっては魔法を身につけ、何百年も戦い続けた俺の方が戦闘力は上かも知れんが……それでも過去を懐かしませてくれるものだ。お前はいまや姿形こそわずかに違い、牙が取れたような腑抜

けた様になってはいるが、覚醒さえすれば自ずと以前の姿に戻ることだろう……それにしても……」

（……饒舌、だな……こいつ、喜んでいる……）

僕は袖を捲くって人面瘤を眺めた。無限牢獄から出てよりずっと、右袖の中で寝息を経ててグミを貪ってきた瘤。それが僕の身に付く以前、記憶のあった頃、前世とでも呼ぶべき場所にて生きていた時。僕はやはり犯罪者だったから、無限牢獄に捕えられていた。だから人面瘤が付いている。覚醒?覚醒をすれば、どうなるのだろうか。力が身に付くのだとしたら、覚醒を望むべきかもしれない。そうすれば、むりょくとか言って下僕生活を悲しむ必要もなくなる?

だとするならば……いや……はあ……何だかんだ言って、僕はまた考え事をしていて理屈染みている。今考えるべきは、みんなをどうやって助けるかであって……でも、助ける手段は思いつかないのであって……覚醒の仕方なんてわからないし、その覚醒をしてみた所で魔法使いの連中に勝てるかはわからないし。

試しにサドに対して問いただしてみる。それとなく、という雰囲気を装って。

「どうすれば、僕は覚醒できると思いますか」

「いや、わからん」

即答だった。あまりの素早さに腹正しさが胃辺りでムカムカした。再び車内は沈黙した。スガー、ズゴー、と背後からの寝息が鼾に変わって、うるさい。

やがて自動車は、高架橋を降りて、比較的一般道路と言った雰囲気の道を走るようになった。

もう一時間くらいは車に乗ったままだ。ソノ間、何だかんだ気だるかったり、身体が重たくあったりしたが、思考を続けていた。理屈をごねていた。だがそのどれらも、仲間達を救う結果となりうる確証のある考えではなかったし、無茶な行動を取る気持ちにもならなかった。なれよ、仲間達を思えよ、と自分で自分に釘を打ちたくなるのだが、やはり僕は何処か冷静で、臆病であり、勇敢になれる

気がしない。
思索が堂々巡りのような感じを繰り返していて、同じ場所を行ったり来たりしているような。
進展の無い、突破口の見つからない、迷路。迷宮。
このサドという男が僕の前世で、僕の味方だったというならば僕の仲間を救ってくれてもいいだろうに。ていうかそれ以上にショックなのは、僕がかなりヤバイ側の人間だったらしい事実だ。まあ、サドという男が妄想狂という可能性も零じゃないが……パワードスーツＢａｂｅｌのことを知っている辺り、彼の言っていることがただの妄想とは思えない。僕の記憶にもＢａｂｅｌの情報は組み込まれている。あれは確かに戦乱の世にて、使われた、人にとっての兵器だった。
そして僕はそんな戦場で、生身で戦っていた戦闘狂だった、と？
笑える話であり、と同時に背筋が寒くなる話でもある。
元がそういう人間だから、仲間を本気で救いたいと情熱を燃やすことが出来ないのではないだろうか。
僕はここにいるサドのような、何処か逝っちゃってそうな狂人、そういう側の人間なのではないだろうか。
ウヨクやドナドナや犬少年。三人は、良い奴だ。良い仲間だ。
馬車の中で僕ら四人は、わずかな時ではあったが共に戦い、共に笑った。
でももうあれは過去のことなのだろう。僕は彼らの仲間たりえない。いや、仲間でいたくないのかもしれない。冷静に彼らを見捨てるような人間だから。なら、元々こういう狂人の側の人間だからと認めて、彼らと自分は別の人種だとわかれば……。
（僕は何を考えているんだ！）
やはり自分は冷たい人間なのかもしれない。
彼ら三人を見捨てて自分だけ助かるという、結論を出そうと、した。
今、間違いなく。

32

生きるか……死ぬか……生きるか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……

考えている内に身体の凍え。冷凍された魚が目を真っ黒にするように凍結して、迷宮と化した脳味噌の中で何度も行ったり来たりする生死。右と左に分かれた脳味噌に二文字はこびり付いていて、ソノ中に様々な事柄が内包されている。

もう考えたくないような事柄が、勝手に浮かび上がってくる。自分で選択する云々じゃない。勝手に湧き水みたいにボコボコ浮き出てきて、考えろ、考えろ、と強要するような。過去。今。未来。生きる。死ぬ。

それら全てが浮き上がってくるに伴ってまるで厳寒の地でシャツ一枚で佇んでいるような不安、純粋な冷たさ、どうしようもない感覚。それら全てが脳味噌を取り囲んで三百六十度、サラウンドで毒針を突っついてくるような気がする。毒針によって脳は麻痺。腫れ上がり、やがて膿むだろう。つうか、もう膿んでいるかもしれない。

魔法の都市には似つかわしくない、墓標荒野の乾燥地帯と似ている場所に自動車が入り込んで、走行、物々しい雰囲気の魔法使い連中が屯する、人の数は多いのに厳粛である空気の荒れ地にやってきた。つまり、処刑場なのだと思う。

広く開かされた、人の一人も、枯れ草さえも生えていない土だけの空間が中央にぽっかりと空いていて、ドーナツの穴のよう。その周辺には大勢の人間たちの群がり。

ドーナツの穴の部分には何も無いが、僕から見て奥側には一つだ

け、簡易な作り、鉄の高台らしきが一つ置かれており、誰かが演説などするのだろうかと思える。死刑を執行する前に盛り上げるための言葉でも打つつもりなのかもしれない。悪趣味だ。

処刑されるであろう三人の姿は、まだ、見当たらない。

「はは。人殺しを覗きにきた悪趣味な野次馬だらけだな。よし、降りろ……リロロペ。お前も起きて、外に出るんだ。旧制部隊（アンシャン・レジム）の副隊長として、大衆に恥を晒すんじゃない」

「んー、んんぅ」

「起きろっつってんだろうが」

ぼぎゃァっ。いい音が鳴った。めり込んだんじゃないか。

「いてー」

「起きないから悪いんだよ」

骨とか折れててもおかしくなさそうな衝撃を与えられたのに平然としているロリペロを見て、やはり魔法使いは常人の感覚で計れる相手じゃないなと再認。

「あーよく寝たッ」

などと伸びをしながら車内から出てきたロリペロと、その一・五倍ほどの巨大さを誇る刺青男のサド。その身長差の激しすぎる二人には、手を出したら君なんて瞬殺しちゃうんだから大人しくしててくださいよね、みたいな静かな殺意つうのだろうか、僕に対して妙な真似をするなとただ突っ立っているだけなのに忠告されている気がする。

僕がびびってるだけかもしれないが。

（にしても……）

処刑場の様子を窺うと、気分がより鬱屈させられる。

野次馬？五百人ほどは、いるような気がする。黒と茶が入り混じってごちゃごちゃ。

ゴキブリのように見える。

ゴキブリ。群がってわらわらと人の気も知らずにいい気なものだ。

処刑という行為は見世物の一つ、つまり娯楽の一部として考えてい

る連中で、下卑たるこういう様を楽しみたく思うのはその性根が下卑だからだろう。普段から下卑な行動をしていてそんな自分が嫌いなんだよとか口ではいいながらも、毎日毎日、という生活に伴う苦痛に簡単に押し潰されて下卑たる行動をしないと気がすまないから、こうやって下卑たる空間にやってきて、ぺちゃくちゃぺちゃくちゃ、汚ねぇ唾吐きながら死刑の執行の時を待っていやがるんだろう、この腐れ野郎ども。ゴキブリならゴキブリらしく日の元に出てくるんじゃなくて陰りの中で一生を過ごし、しがみ付くかのようにして笑顔も作らず真顔で辛そうにしてろよ。で、ゴキブリホイホイで殺されそうになった時だけガサガサ音を鳴らして素早く逃げるみたいな、そういう逃走劇みたいな、常に気分が落ち着かないみたいな感じでいてくれればいいよ。

それがこんなにたくさんの数で集まってワラワラしてるの、ムカツクんだよね。意味わかんないんだよね。今すぐここから消えろよ。この世から消えろよ。〈顔の無い天使〉に殺されろよ。再生せずに滅亡して生物やるのをやめろ。死物になれ。

鬱憤を晴らすために長々と悪態を心の中で付いている内に、ドーナツの穴ぼこの位置に到着していて、大勢の野次馬のぺちゃくちゃという雑音に囲まれながら、ロリペロとサドに何がどうなるのか、何時処刑は始まるのか、などの仔細を尋ねた方がいいのだと思うのだが、口が開かない。この空き地のある種異様な空気感に呑まれているようだった。緊張すると起きるあのふわふわ感が、僕の身に生じていた。

地に足が付いていないと表現できるこの状態。

巾着袋を掴み辛くなると思ったので、もしもの時に備えて、今の内にグミをいくつか握りとっておいた。赤、二つ。白、二つ。計、四つ。

それから後、しばらく立たされたまま待った。

空が曇り始めた。雷さえ鳴りそうな悪い天気に変わってきていた。何者の呪いのせいだ、と漠然としたことを考えたりした。

時間が合わなかったのだろうか、誰か遅刻している人を待っているなどしているのだろうか、場はしばし何事も起こらぬまま、雑音のぺちゃくちゃという喧騒だけが五月蝿かった。
「大衆が暇そうだな。余興の一つくらいをしてやろう」
「あーいいね。僕もちょっと退屈だと思ってたんだよねー」
「別にお前の退屈を凌ぐためにやる訳じゃないがな」
「言い方が冷たいんだからぁ」
「……はじめるぞ」
サドとロリペロがそんな会話をしているので二人が何をするつもりなのかと眺める。
眺めている内に、小道具みたいなのが宙から現れて、荒涼の地を華やかに変えていく。どうやら、つまり、ショー、で人々の暇を潰して差し上げるつもりらしい。
親切を働かせて聴衆を味方につけるなどというやり方だな。そんな皮肉な見方をしながら、死刑を執行する場所でやるとは思えない、魔法による自由闊達で豪華なショー。をゴキブリな聴衆と共に眺めることとなった。イラ付かせられるが、この状況を突破できる可能性を見つけ出すための方法、を考える時間にはなるだろう。だが一つ困ることには、死刑されるであろう僕の仲間である三人が何処に配置されることになるのか、正確にわからないということ。このドーナツの穴ぼこのどこかに配置されることになるとは思うが、助けるための対象の位置くらいは、ハッキリと理解しておきたい所。
やはり分が悪すぎる状況なのは確かだ。だが今の僕には、人面瘤があり、グミもある。
そして仲間。人面瘤。前世で僕が戦闘狂だったからって、今の僕は僕だ。気に病む必要は何処にもない。うるさいこのゴキブリどもがいくら熱狂しようが、死刑をショーと勘違いしている連中を喜ばせるわけにはいかない。こいつらを冷たくしてやらなかったら、僕は僕を許していいはずがない。少年漫画の主人公のようにはいかなくても、そうだ、僕は理屈で物を考えるのだから、理屈でこの状況

を切り抜ければいい。
皆が生き延びる確率の高い方法を見つけ出し、こいつらの手から逃れてやる……。
現在は夕方。
ドーナツの穴のような位置にいる僕とサドとロリペロ。
五百人ほどの野次馬が輪のようになっているせいで、僕の逃げられそうな場所すらほとんど無い。野次馬も一般人というよりかは、それぞれがローブを身に纏っている所から見て、魔法使いと見て間違いないだろう。
二箇所ほど、比較的密度の薄い、逃げやすそうな箇所がある。いわば一口くらい齧られたドーナツみたいな感じで、その二箇所だけ欠けている。逃げるとしたら、あそこに逃げ込めば確率はわずかに上がるだろう。わずかに。
仲間を拘束から外さなくてはならないし、しかもその三人が意識を失っていたら、僕が三人を運ばなければならない。また、そういう行為をするためには魔法使いたちの足止めの必要がある。どうにしろ……頼みは、グミ……これ次第だな……。
（意識がない場合は、目を閉じるように合図をする必要もないからな……。好都合な部分もあるが……赤の効果でどれだけ力を発揮できるのかも、まだ試したことはないからな……）
自分の能力でさえも銀色の巻物でその効果を確認した程度で、実戦で使用したことはない。副作用が強いとも書かれていたから、その点も心配だ。
魔法使いたちの実力も未知数で、下手に自分の殺気などを察知されれば、簡単に殺されてそれで終わりだろう。
白のグミ二つ、赤のグミ二つ。それによって発される特殊な力。
それをいかに、うまいタイミングで利用するかが、もっとも重要なポイントのはずだ……！
（あとは三人がどの位置に配置されるか……。二箇所あるドーナツの脆いところの近くに配置されてくれれば、近ければ近いほど、勝

率はわずかに増えるはず……。それでも確率で言ったら高くは無いだろうが……人面瘤とグミの能力に期待するしかない……頼むぞ）

僕は袖の上から人面瘤の、オデコ辺りを、頼むぞ、という意図でさする。

他の皮膚よりもわずかに浮き上がっている人面瘤。

サドはこの人面瘤のことを知っているようだったが、にも関わらずこの人面瘤を除去しなかったのは、どういうつもりだったのか知らないが、馬鹿だ。

これのおかげで僕はまだ絶望することなく、仲間を助けるという意志を持つことが出来る！

ショーは時間を置くに連れて派手になっていた。

炎の竜が舞い踊り、氷の虎が空を駆けて、色とりどりな花火のような輝きが空気中で点滅を繰り返す。スライム状の人間の形をした変なものがプニプニしながら踊り回り、中には楽器を持っている奴もいてそいつらが音楽を掻き鳴らす。

僕はそのショーの中、真剣な顔つきになり過ぎて作戦を疑われないよう注意しつつ、時が過ぎるのを待った。

仲間がこの処刑場に運ばれてくる時間を、何度も作戦のシミュレーションしながら、待った。

33

演説をする為に置かれているらしき高台に、一人の老人が立った。黒ぶちの眼鏡を掛けていて身に纏っているローブはここにいる他の魔法使いたちの誰よりも細かな刺繍がされていて、派手。小柄な老人であるから、その派手なローブの印象が濃くなり過ぎていて、まるでその老人自体がローブのパーツ、アクセサリーで、ローブが本体であるような錯覚が起こされる。

頭頂部から禿げていて、頬は、たっぷん、と垂れ下がっていてまるで水風船が埋め込まれているかのように見える。どこと無く気だるそうで、口の中で何かをもがもがさせている。飴を舐めているということではないだろうが、とにかくもがもがさせている。喋り辛そうな感じ。

そんな老人が演説台の上に立ち、十字を切るような仕草をすると、彼の目前の何も無い空間からマイクが出現した。それで悪趣味な演説を行うつもりなのだろうか。

ショーは彼が現れたことによって終わり、龍も虎もスライム人間も花火も消えて、ぺちゃくちゃあれだけ騒いでいた聴衆が静まり返った所から見るに、偉い人物なのだろうあの老人は。もがもがの下に仕えるぺちゃくちゃ共ということか。はっ、保守派の魔法使いってのは、魔法が使えるからっていい気になっているが、民度の程度が知れるって奴だよな。ははは、いらいらしてきた……。

もがもがの老人は演説を始めた。

「もがもが、もがもがもがもが、もがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが」

もがもがしすぎているせいで、何を言っているのかまったくわからない。

だが聴衆は真剣な面持ちで、もがもが老人の話に聞き入っている。お坊さんの大切なお話をお寺で神妙な顔つきで聞いているけど実際は何も頭に入っていない、みたいな感じで聞き入っている。どう見ても何もわかっていない。もがもがが特別な魔術によるカモフラージュを掛けられていて魔法使いにしか内容がわからないようになっているとかでなければ、常人には聞き取れないもがもがっぷりを老人は発揮してくれている。

「もがもが、もがもがもがもが、もがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもが、もがもがもがもがもが、もがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもが」

あながち暗号ということも、ありえるかもしれない、と途中思えてきた。あまりにもひどすぎる。これで皆に言語として通じていると思っているのならば、この老人はもう駄目だ。客観性というものが著しく欠け過ぎているんじゃないか……。

近くにいるサド、ロリペロの表情を窺うと、真っ直ぐな瞳、純粋そうな瞳、で老人のもがもがに付き合っているのがわかる。もしかすると本当に魔法使い同士にしかわからない暗号なのかもしれない、と冷や汗を掻きそうになった。掻かなかったが。

阿呆らしい、という気持ちになりながら、もがもが演説、を聞くこと十分程度のこと。

老人の入れ歯が取れた。

だがそれでも、老人は演説を続けた。というより、入れ歯が取れたという緊急事態に気が付いていないみたいだった。

「もが、もが、もがもが、もがもが、もっが、も……が……もがもが……もがもがもがもがもがもがもがもがもが……もが……もがもが……も……も……が……」

入れ歯が無くなった途端、元気がなくなったように窺える。わ、わからない、もしかすると入れ歯が取れたこと自体も計算の内なのかもしれない……。演説が山場に差し掛かったので、私はこんなに

も興奮しているのだ！という演説手の場を盛り上げるための工夫で入れ歯が取れてしまったかのように見えたが、実のところは魅せるための演技……！あの老人を入れ歯を落としてしまったのではなく、わざと取った……！それに気が付いていないフリをすることによって、私はこんなにもこの死刑が執行されることで興奮を覚えているのだとアピールしている……。

そんなわけがない。

この演説、皆、どうでも良いのだろう。

形式的という奴。中身なんてほとんどどうでもいい。体裁だけ整っていればいい。

入れ歯が取れて、もがもが、と言っているだけのソレが体裁を整っていると呼べるかどうかは怪し過ぎるところだが、保守派の連中は自らたちの定めた形式に形式を重ねる内に、別にしなくても良い演説をしたり、儀式をしたり、しているに違いない。

これが保守派の悪い所だ。その行為が本当に必要なのか、不必要なのか、という本質的なところを考えず、昔から定められているキマリだから、という理由だけで演説をしたり、儀式をしたりする。みんなこれが必要ないのでは、とお互いに薄々気が付いているから、もがもが、とかいう適当過ぎる演説、中身がまったくともなっていなくても、みんな真剣な表情をする。

真剣な表情だけしてれば、ＯＫ、みたいな。

畏まってればＯＫ，みたいな。

革命派の僕としてはこのような状況、やはり許せたものじゃない。死刑？軽々しく仲間の命を奪わせるつもりはない。

もがもがというＢＧＭとしか思えない音の連続を聞きながら、僕はグミをギュッと潰れない程度に握り締める。グミを潰しちゃうなどの単純なミスを犯すつもりはない。もがもがなどという保守派の形式に惑わされるつもりもない。

心の準備は出来ている。後は、三人が配置されるのを待つだけ……！

「もがもが」

そして呪文のごとくに、老人が短いもがもがと共に、マイクの前で十字を切った時。

大衆たちは事前に示し合わせていたらしく、一斉に、うおお、と歓喜のような雄叫びを上げた。その雄叫びは天を衝くかのごとくに声量が大きく、僕の鼓膜をひどく震わせた。処刑場にいる僕以外の全員が同時に雄叫びを発したようだった。何故雄叫びを発したのかと言えば、盛り上がってきたからであって、盛り上がった原因は勿論、処刑場に死刑囚が姿を現したからに他ならない。

老人が十字を切ったことによって、今まで隠されていた三人が突如として現れたのだ。隠されていたのか移動してきたのかはわからないが、それはどうでも良い。

処刑場は熱狂に包まれた。ゴキブリどもが騒ぎ立て、老人がそれを壇上から眺め下ろしている。サドとロリペロは、ぱち、ぱち、と熱狂こそはしていないが拍手をしていて、困惑の表情を浮べているのは僕だけだ。

犬少年、ウヨク、ドナドナ。牢獄の中では顔を合わせることは無かったから、みんなに会うのは久しぶりだ。

あれ、こんな顔をしていたっけ、と三人に対してふと感じる。

牢獄生活のせいで三人ともヤツレタのかもしれない。そのせいだろうか、三人に対してふと、奇妙な感覚が走る。だがそれは一瞬のこと。瞬きを何度かすれば、そのギロチン台に括り付けられているのは仲間の三人だと、わかる。

僕が救う三人。死刑にさせるわけにはいかない。

(寝ている……いや、違うな)

三人は意識を失っているらしい。ギロチン台に首をセットされている状態で、意識が無い。

彼らの頭上で夕陽を反射させて朱に煌く首を刈り取るための刃が、物々しい。

あれが振り落ちる前に、三人を救い出さなければならない。斜陽

の差す処刑場にて彼らを救うことが出来るのは僕しかいない。僕と、人面瘤。これだけしか、いない。彼らはおそらく首を撥ねられて後に〈顔の無い天使〉に破壊されるのだろう。或いは、あのギロチン自体にそういう、〈顔の無い天使〉と同様の破壊の力が備わっている可能性もある。〈飼われ天使〉などという存在があるのだ、そういうギロチンがあっても何らおかしなことじゃない。

「もがもが、もがもがもがもが、もがもがもがもがもがもが、もがもがもがもがもがもが、もがもがもがもがもがもが、もがもがもがもがもがもが、」

演説はまだ続いている。

緊張してきた。下手をすると緊張のせいで何時になっても救出作戦を決行できない可能性が……怯えたまま時をやり過ごして、それで三人を見殺しにしたら……それこそ取り返しがつかないことだ……。

故に、僕はタイミングを決めることにした。

それは、もがもがが、演説を終えた時。演説を終えた時、ゴキブリたちは老人に対して意識をもっとも強く向けるだろう。ようやく終わった、などと思いながら。

決行の時のタイミングは、ゴキブリたちのある種、安堵の瞬間……。

タイミングは決まった。後は時が過ぎるのを待つだけ。

三人がギロチンによって固定されている位置。丁度、二箇所の脆いところの内の、片方に、至極近い位置だ。幸運だ。これで勝率はわずかに上がった。三人を救出してからは、すぐにあの脆いところに突撃し、ドーナツを突破、グミによって向上する肉体を頼りに荒地を駆け抜ける……。姿をくらませれば、魔法使いと言えどもすぐには僕らを追ってはこれまい。

ウヨクが意識を取り戻せば、おそらく僕らの勝ちだ。彼女はこの都市の地形に詳しいだろうし、もしかしたら魔法によって一気に逃げることも可能かもしれない。……いける。

いける、はずだ。

（そう思わなかったら、こんな大胆なこと、できるはずがない……！）

可能性で言ったら、二十、三十％と言った所だろう。こんな分の悪い、命がけの行為、普通はやらない。だが僕は戦闘狂なんかじゃない。サドみたいな狂っている奴に崇められるような狂気の人間ではない。僕は、冷たい人間じゃない。やれる。甲を歩く乙の下僕。それが僕だ。僕なら、やれる。例え緊張していようが、怯えていようが、できるから、できる。やれるから、やれる……。

少年漫画で行ってやる。そういう気合で、この場面を乗り越えてみせるって感じで。

「もがもが……もがもが……もがもが……」

ゴキブリたちの喚き声が鳴りを静めてきた。もうすぐ終わるのかもしれない……。

老人が十字を再び切った……。

それに伴ってギロチン台周辺に、頭までローブを被り、般若の面を付けた魔法使いが三人出現する。なるほど彼ら三人はそれぞれが薄い紐を握り締めている。あの紐が手離された時、あの刃がストンと落ち、仲間の首もスポンと抜けるということだろう。そう推測できる。

（執行の時は間近だ……）

いつもの悪い癖が出てきた。緊張するに伴って発動してしまう浮遊感と、身体全体の感覚が麻痺してくる感じ。自分が地に足をつけているのか不明になってきて、自分の心臓の、ドクン、ドクン、という鼓動が聞こえてくる。次第にその鼓動がやかましくなってきて、もがもが、を聞いていたいのに、ドクン、ドクン、が邪魔してきてもがもがが聞こえなくなってくる。

やばい、と思うと余計にやばくなってきた。悪循環だと自分でも理解できるが、自分で自分をコントロールできるなら問題などあるはずもないが、器用な人間ではない。不安を静めることが出来ない。

思考を止めることが出来ないのと同じように。やばい。

もうじき、演説は終わると思えた。

老人がゴキブリに向けて、両手を振るようなことをしている。何様なのか。

僕は怒りを利用して不安を静めようと思い、老人に対して怒りのオーラを滾らせてみるが、しかし不安の方が勝ってしまい、全身を緊張感が包み込み、ガタガタと手足が震えそうになる。怒りでも静めることができない。どうする、どうする……。どうすればいいのか。

歌だった。

綺麗な歌だった。

僕の緊張が最高潮にまで高まった瞬間に今、聞こえてきたのだった。喧しい心臓のドクンという音も、老人のもがもがという声も、ゴキブリのざわめきも、全てを弾き飛ばして脳味噌に直接届いてきたのは牢獄やＨＯＭＥ　ＴＯＷＮで耳にした、あの綺麗な歌声、だったのだった。

全てが逆転した。不安は静まり、高揚だけが胸奥で滾り、気合が全身にみなぎって力が入ってきた。血流が指先にまで勢い良く流れているイメージが走り、自分がしっかりとこの処刑場に足をつけて存在していると、認識が、来た。確かな認識が。

それとほぼ同時だった。

老人が演説を終えて、ゴキブリたちに頭を垂らした。どうして頭を垂らしたのかはわからない。それは彼らの社会的慣習みたいなもので、僕にとってはどうでもいい。ただ僕の視界は鮮明で、その頭を垂らした瞬間の大衆の安堵たる息遣い、それを間違いなく察知した。演説は終わったのだ。

僕のすることは決まっている。シミュレーションはショーの間に何度も繰り返したからな！

まずは赤のグミを二つ人面瘤に一気に食べさせる。『強調』。同じ色のグミ二つを食べさせる事で特殊な能力が自身に起きてくれる。

赤を二つ食べた場合は、全身が後々に一日ほどは動かせなくなる副作用があるそうだが、数時間、すさまじい筋力、運動神経の発達、鉱石よりも硬い骨、とにかく何事にも屈しない強靭なる肉体を得れる、と銀の巻物に書いてあった。

『腹の中で何かが造られた』ずぶしゃあ。

赤い霧を纏う剣を握り締めてから、僕は構える。そして、まずは作戦の開始の、その狼煙となる初手、剣の投擲……！

『炎刃！』

そう叫ぶことで投擲はより力強い代物になる、という直感があった。

そして実際に赤い霧纏う剣は、炎の刃そのものとなって、演説をしている魔法使いの老人。

その頭部を眉間から、見事に貫いて、彼を燃やした。我ながら驚くしかない勢い、そして凄まじい炎だった。もがもがの老人の頭部はすぐに燃え尽きて灰になり、演説台の上にはもう派手なローブだけがあって、それも宿主を無くした身体がすぐに地に伏したので、汚れてしまい、炎が燃え移って灰になりはじめた。

ゴキブリたちは静まり返っていた。処刑場の沈黙は、痛々しいほどだった。

連中は何事が起きたのか、まったく理解できていない様子だった。場が固まるとはこういうことを言うんだと思いながら、僕は、やってやった、という感覚と、やってしまった、という感覚が同居する中で、自らの繰り返したシミュレーションのことを思い起こし、次の行動に移るべく白いグミを人面瘤に食べさせる。白の『強調』。それによって発動されるのは周囲の人間たちの知覚を麻痺させる、強力な発光。光を直視した相手を数分、五感を完全に麻痺させるので意識を失っているような状態に出来る。と、銀色の巻物に書いてあった。副作用は次の日の一日、吐き気にずっと悩まされることになるとあった。が、次の日のことなどさして重要ではない。重要なのは今。この救出作戦さえ成功すれば、ウヨクやドナドナや犬少年

を頼りにすればいい！

僕は光を発動する直前に大声を張り上げることで、ゴキブリやサドやロリペロの視線を僕に集めさせる。ただでさえ演説台にいた老人が突然炎の刃で灰に変えられた直後だ、もう僕が犯人だと理解した輩は僕を見ているが、大声を張り上げるに越したことはない。

言葉の内容は、すでにシミュレーションで考案済みだ。

「ゴキブリどもめ！　オセロをする脳も持たない、糞馬鹿野郎ども！　その足りない脳味噌で、こっちを見てみろよ！　そんな簡単なことも、できねえか！」

単純な罵りだったが、状況が混乱していることと、言われて腹正しかったのだろう、一気に僕に視線が集まったのがわかる。笑いを堪えるのが大変だ。こうもシミュレーション通り、いや、それ以上に上手くいっていると面白くて仕方がない。

『白光！』

全員の視線が集まると同時に発された、五感を麻痺させる光は想像以上の効果を見せてくれた。光光光。処刑場全て、ドーナツの全て、に行き渡った。光速で。誰がこの攻撃を回避できるものだろうか。全員にしっかりと効果を見せてくれたと、周囲を見渡せばそれがわかる。全員が石像のように固まっていて、呆然とし、瞳に光が灯っていない。眩しすぎる光を当てられて全てが麻痺しているということだ。サドやロリペロに効果があるのかが不安だったが、彼らも人の子ということだろう、しっかり麻痺してくれている。

この時間を利用してこの二人を殺してもいいのかもしれないが、そこまで時間の余裕はないし、正直、五感を麻痺させているにも関わらずこの二人は殺せる気がしない。刃で貫いても生きてそうな気がする……し、〈顔の無い天使〉で殺さなければどうせ『死』ぬことにはならない。なればこそ今この二人に刃を突き立てれば保守派の戦力をダウンさせることにはなるのだろうが……。

（ためしに……）

優先するべきは逃走だが、二人を倒しておけば、という気持ちが

上回り、赤の霧纏う剣で二人を斬った。案外、簡単なもので野菜を切るかのような感覚で、斬れた。血が噴き出た。光の灯ってない二人の身体が、地面に血のたまりを作った……。

（……逃げるか）

死体を見下ろして安心している時間は無い。急いでギロチン台へと向かい、今にも紐を手離してしまいそうな般若の面に注意を向けつつ、赤によって強靭化している体を使うことで、三人を解放する。想像以上にグミの効果が凄まじい。三人の救出はたやすく済んだ。三人を背負っても身体はまったくその重さを感じず、自分が風となったかのような錯覚さえ覚える。万能感。ゴキブリ退治をする時間さえあるんじゃないか、と僕は心の内で嘲笑うかのようにして思ってから、だがそれでは戦闘狂だ、今は逃げるのを最優先にしなければならない、もうすぐ白光の効果も切れるし……そう思い直し、ドーナツの脆い部分に突撃し、たまたまそこに屯ってる連中を炎刃で薙ぎ払って灰にしてから、後は必死で荒地を駆け抜けた。

赤の強調による副作用だろう、筋肉痛がすぐに生じた。動けなくなる程の副作用が発するのはまだのはずだが、銀色の巻物に書かれている情報が間違っている可能性もあるだろうか。

それが少し怖かったし、走っている途中に白光の効果が切れたのだろう、ゴキブリたちの騒がしいざわめきが遠くから聞こえてきたので、魔法の力で追跡されるのではないかという不安も生じてきた。だが不安よりも、勝った、という歓びのほうが強い。

計画通りに成功できた、仲間たちを救うことが出来た、と。

シミュレーションで想像していたよりも随分と楽に作戦をこなすことが出来たのは、グミの『強調』による特殊な力が、思っているより遥かに凄まじかったおかげだろう。

明日辺りから襲い掛かってくる副作用のことが今から身に非常に重いが、しかし一日中横になってたまま達成感に浸れるとでも思えば、その副作用の重さ、辛さも、紛れるのは間違いない。

笑いたくなってくる。

笑みを抑えることができそうにない。実際、大声で笑っていた。
周りに人はいないし、大きな声で笑っても問題はなかった。そういう荒地だから。
しばらく僕は笑った。みんなが早く意識を取り戻してくれれば、と思いながら。
彼らが意識を取り戻すはずはないのに、意識を取り戻してくれればと思っていた。
はじめから背負っているモノには、意識なんて無かった。だから、取り戻すはずが無い。
両足を斬られた。一刀両断だった。スパリ、と大根が斬られるかのようにして、斬られたのは僕自身の両足で、背負ってる三人ごと地面に突っ伏する。
「……いてぇ……」
そう呟きながら、前を向いた。僕を斬った者。
刺青を顔中にしている、二メートル越えの華奢な男の姿が、僕を見下ろしている。
「楽しかったかよ。……ゴキブリの下僕君？　いやいや、オセロの坊や、でもいいかな？」
「まったくさぁ……。何で君から人面瘤を取らなかったのか。もうちょっと考えなかったの？」
「あと、魔法使いが人の思考を読み取る魔術を使用する可能性、くらい考えなくちゃだめだな」
「そうそう。後ついでに言わせてもらうと、助ける対象が意識を失っている場合、もっとちゃんと、その対象が本物かどうか確認した方がいいよ。ただのお人形を運んでいるなんて、惨めなことをしないですんだんだから」
「魔法使いに翻弄されたオセロの坊や。お前の選択はここでオシマイだ。生か、死か。覚醒が成されればお前には生が待っていた。だがお前は残念ながら、死、を選択した」
「覚醒するような男なら、あそこにいた魔法使いを全員血に還すく

らいのことは、してくれないとねぇ」
「残念だ下僕君。いや、テンガ君、だったかなぁ？　いやー、ちょっとは楽しい見世物だったよ。俺達が下準備を念入りに済ましておいてあげた、ショー。いやー、俺たちのお遊びのショーよりかは、盛り上がったよなぁ？」
「うん、そうだね。お疲れ様。さ、どうしよっか、ドリュメサ。殺す？」
「いやー。そうだなぁ……。死ってのには、様々な死に方がある。ただ単純に死を迎えさせるなど、かつて戦闘狂だった彼には失礼かもしれない……。ちょっとは楽しい死を味合わせてあげなきゃ、彼の奥底の魂が納得してくれないだろうから……。最高の死の舞台を、お前に用意してあげるさぁ……」
「ドリュメサったら、鬼畜ぅ」
「さぁ、帰るぞ。そして行こうか、テンガ君。君の仲間と一緒に、君に最高の死を」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7562x/

甲乙付けがたい下僕ハッ？

2011年12月3日23時50分発行